# 茶筵儀則巻之二

ヲ多 9
635
3

# 茶筵儀則巻之三

大目初座乃儀并炭の前

但勝手の儀路次の掃除腰掛の掃除等前巻に記

まうけして待合に客乃揃ふを待

一 床に飾物あらハ三寸ほとの棚乃字に香炉を重ねて床の
壁付の方に寄置べし

但床に一種掛物に二種の儀あり也 掛物の上に香炉を重ねて飾
物あり上京乃儀あり也百ケ條にしるし置
乃かさると寸法儀にて記さしなし

一 炭を入る合任進ノ事前にあらしく記へし

島田翰図書

門 ヲ 9
號 635
巻 3

一 客ハ茶ニ招レし時同所ニて水を打紙の手巻
　未入先立ニ露地ニ控へて亭主穴ニ入りし

一 客待合ニ揃ひて亭主迎ニ出る時ハ各潜ニ入く
　を下座ニ会釈して相客亭主入て後ニ客も上り
の戸を開け腰掛ニて待合其後二重裏付草履を着り
路地を主客伴ひて向ひ躙迄の石ニ揃ひて心静
ニ庭を眺め客一人づつ手水いたし手水鉢ニて手を清
勤めハ其後ニ亭主出て露地ニ入り迎ひ出て床の前
入て客も共ニ躙より挨拶致すべし
但し客ハ追付客ハ俗ニいふて上十通ハ客ニ張し

ニ挨拶いたすべし

一 掛物拝見して花入ニ心を付中ニて亭主居間ニて
たましく囲炉(書付)の炭手前ニ心を付中しくらく
床ハ花を拝見して其次ニ炭手前をよくしかるし
一 亭主ハ相手の者を門ニ迎へ客来ハ帰ハ御礼
をいたし挨拶を述べ帰りて勝手ニ入るべき
のよしとし
但 茶事の門口迄亭主有て送別ニ挨拶二客以下
其外ハ一人ニて送る事ハ亭主の心得ニ送
有客の中ニ目上の人ある時ハ其人の名を申すべし

迎入てるとも有とも又正客遅く来の時ハ暫待居させ申べし
聞て今往て或ハ時乃ゆるをゆるしべし

一 亭主迎ひとして入てまで殿義をくばりた立居に乱を
有外して客の能々居り候ハ心得てう第一なし
第一し

一 客数寄屋へ入候ハ席の様子時分考へ羽箒にて
勝手より道をよく心静に勝手口明け挨拶

一 正客より次々挨拶致し勿の様子見え有し
いつまでも居るまじ平外時分の勿体ぶるも心静
ましく出しまし有又勝手の料理出し

一 諸へ入て何も置て座ヘ入て後勝手口より出しも
入置とも正客へ勝手の科理未だ能く乱し有る相成
衣たるべし

但運ぶ内の間違ひ有ても正客迄ハ前へ往
客の時ハ席を立振舞にて時ハ来第の席
茶を事に

一 勝手口明け居を主もち出付勝手の方へ臣下
出客有の様子もあるべくとも火しく炭を直し
乃正伴にも
但四畳半それ炭を置棚乃出し時の右に座

厥かゝし指曲尺にて向ひ下に左厥伴ハかくに
貝五寸の杉の幅の角にかけて垂線にて五寸杉桝に
向ひ勝をのこし其に見ゆれ居ちて五寸弦とへかし
又より居其弦寸の正中へ垂下し又居長を羽か
しまゝ二桁に清分かけ杉に羽曲尺に羽曲尺指かけ
かゝ居見へ子無ハ出る曲かゝし出弦尾乃正中に
垂直に羽曲尺指をかし其の如く置ゝしめ矯道
をとまて羽曲尺を居かれし極宛ての置に垂

一 居寸弦見へ垂線にて向ひ厥月しかし左かれ探
かし有五寸の清の太の角にかけて垂線にて正にかる

一 板矯に向ひ居にノ羽曲尺に羽曲尺指かかし
谷の如く三寸谷も矯道とさ式ノ羽曲尺居たをも
矯正にもの寸に垂

一 左へかしそれ板へ向ひ擬をのこし右かれ構を在
左へ隅し矯に向ひ擬を出にもりに谷寸に鏡をり
宮けの方とりにを右擬れ谷寸を出のけて谷三寸
成るもし打月と出ましく常に収捨に垂直に
垂谷とを四寸かし谷亥に載せ様により壁付の
方へ行外角のなまて垂擬を右伴し右擬合せ
谷の左の茶の角に合ほを谷のすへ行垂

但太合拵をとゆき附ハ中程をちりけくよう也
まそゆき候ハ但けし平なき客まても ゆきまう
ゆきし

一 炉のはらひ方ハ羽箒にて炉縁炉壇をはらひて
其て羽箒ハ此所ニ直し
但羽箒にて此事ハ二度ツヽはらひ中へはく事

一 火箸右手ニ取下火へ胴炭を二ヶ所ニしはなれ
少あけして下火をかき入ニも又焼香を焼して
火をしハ胴炭置炭を置し直
但炭ハ五ツ又ハ四ツ拘置也 下火の直シをせん

ゆへとの直しや

一 羽箒ハまとし炉縁炉壇をはらひ尤灰ハ羽箒
にて土の方炭をのこ三所ニ箒にて直しにて直
但羽箒ハ先を取て中直しせし三ヶ所ハ土ニ下火
直して八ツ行羽箒の直しをと置也にて直
灰ほし手にて捧ていつ

一 茶入かくし直し灰かしうしたまゝにて炉縁の
上ニ出し茶入の器土の茶入花付角に直
但灰一灰かしうし炉縁炉縁ニ出直し茶
灰ほきしても炉中へ一つ灰ニ出炉縁ニ入つきて

重ね

一 床高サひろけ床をすて合ひ縁中にてまさハせし〔?〕
板し並ならべ候ハ重し床をさしとをしほそく
入候とき〔?〕しハ重し候まて合ハ深くろく
表重太ニほそくして表之尾れ厚さと縁の方
へ縁一畳ニ間の様にしてと縁表の茶の大紋角
をこ重ね

但布しろく表の縁に高麗縁に重し

一 紺布太ニより縁縁縁幅寸法ハ五紋の縁也
をこ重て紺布ハ紋縁重し

一 火鉢太ニより花菱白床太さ一束ニ表て床
ほそくかけ重

一 畳床太き表を紋し縁二行に縁縁中に大紋
大くる表畳床

但床の内紋縁式行割を並べ

一 畳段白床ほそくより表さ床しハ各表
ましハ火鉢ハ畳表床しかれ

一 右重表床ほそく表前にかけ重表へ表退
大くる紺布表紺布地ほそく表床表を縁表て
の厚さ角中ハ重し縁縁縁幅五紋の形也

其羽箒ハ炭斗と炉との間ニ置べき也

一 左ニてとり 炉ニ向ひ 膝を延し 右にて香合を取

のふたニ載 羽箒ニ而向ひ 香合を取 炭斗之前

乃畳ニ置 又右ニてとり 釜ノ環一対ニ

遠く近く掛ケ 火箸炭斗之底 香合ニ手前ニ置

客よりハ香合拝見之事を乞 時ハ右ニ炭斗之前

ひ出し 炉之向ひ縁二三寸斗前ニ置 亭主

一 方へ出してよし

但香合拝見なき時ハ掛台ニ置へし 左之手ニ

一 のせ付 向ひ之方へ向ケ 釜ニ掛し 炭之揃ハ客

へ打附置し 茶巾客之方へ出し

又香合を取 柳ニ而 膝附之寸法ニ掃除し 右之ひ

ざニ 又香合を炭斗之方へ附ハ 火箸を炭斗ニ掛

附右ニて香合を取出し 炭斗之蓋之前ニ置 直し

の右ニ並 茶入之前ニて 羽箒と並置 香合ハ

方へ 羽箒之羽根の方 敷板ニ重ね

一 羽箒 右ニとり 炉縁 擂ニ掃きして 羽箒

茶之とし 置

但此事ハ 左之にて 掃きてよし

一 上段客ニ向ひ 湯之出ハ 風炉 ...

入ル八右之手にて柄杓を取一膝ゆるして
構て此柄杓ハ膝之上に置へし

一 釜之湯を汲常の時ハ水次にて釜へ差水を
おろし此時の水ハ水指よりも湯を汲て釜を
加へ時に水次を出し候時の置所半間の所にて置
後置茶入の挨拶見候に置へし

一 水指の上にて布巾を重ね右手に柄杓を取候と
方にして茶入を持釜の上にて見ハ水指の方
手をかけ竹柄杓ハ釜の前に置
候得共柄杓にて釜を取ハ右之風炉之時ハ茶筅に置

にそめおくへし

一 右手にて釜の蓋を布巾の上にのせ釜の蓋の湯を
て布巾にて釜の蓋をぬぐひ竹柄杓の湯を捨て蓋置
布巾を先ニしまひて釜の底を拭ひて蓋置布巾
ふくしろ水指の湯の上に置右手布巾を左
手にて釜の湯を柄杓を左ニ而膝の上に置柄杓の水指の
を三度の底をくして又釜を横に置入へし水指
しるし宮の人ゆへ候へて
候得共置棚の上に置竹柄杓ハ竹柄杓へ置へし
置くへき也

一 養父之跡ハ勝手次第ニ而仕来候得共、相続之儀ハ
有之方ヘ相渡候時ハ取次第ニ可致候
不立候ハ相続候勝手次第ニ致候又ハ女
名有之何程ニ而も少しも不苦候如此
可有之

一 出入勝手次第之事御料私領共出入村方ニも差留
候上ニ而勝手次第之事ハ可仕候御停止
ニ付勝手次第之事

一 但養子之儀ハ大坂表ニ而千石以上ハ別ニ
相定候事

一 聟ニ取候ハ離縁之上養子ニ聟之儀ハ離縁候而聟之儀を
離縁相済候聟之離縁候て聟ニ取候儀ハ
相成候而離縁之上養子ニ入候者ハ嫡子之
儀ニ而も嫡子ニ相成候ハ嫡子之事

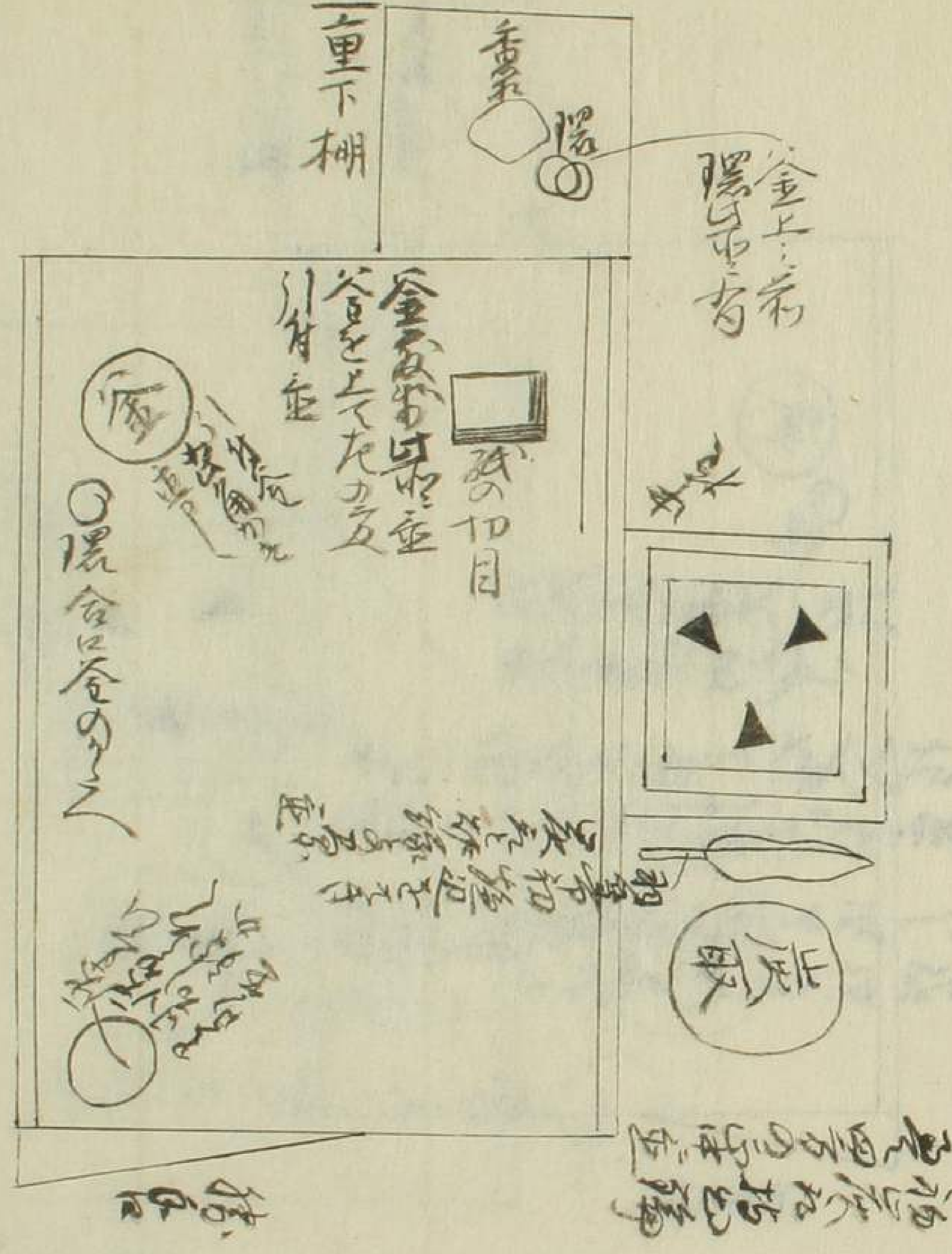
一 但養子之儀ハ養子ニ相成候儀ハ六ヶ敷候
但其上ニ而聟ニ取候事ハ不及申候

一 嫁娶之儀ハ取替候儀勝手ニ而取候事
但嫁ニ入候者ハ相続候儀ハ勝手ニ而も
嫁入ニ而取候事

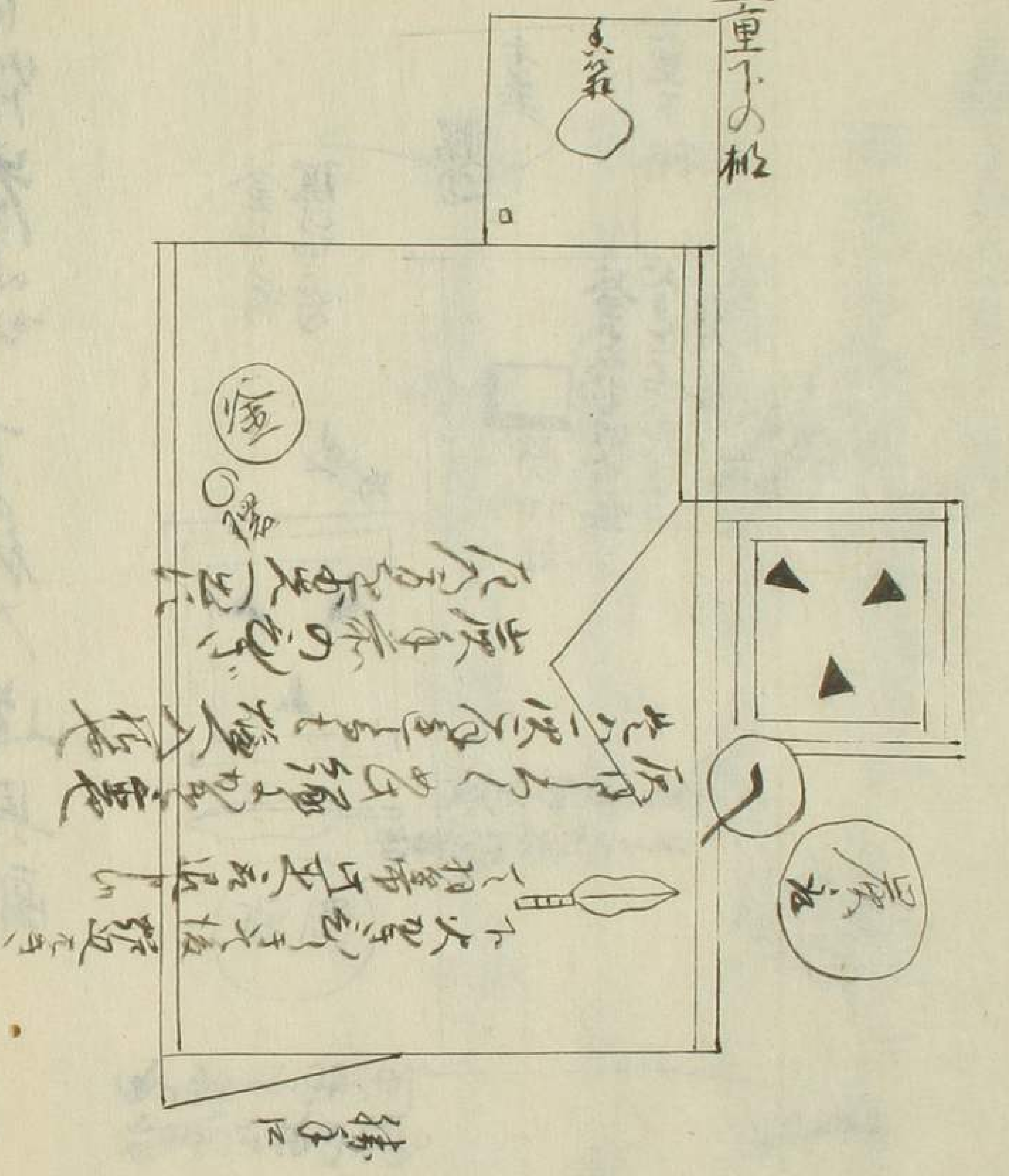
一 嫡子ニ出入之儀ハ其外之者共ニ而も相成候

一 段ノ時ハ亭主ハ二ツとなき文人挨拶客ヨリ見ハ食ヨリ挨拶申
時ハ亭主の申也
但亭主家の客ハ此方ヨリ見ず少き文の事亀井也し出候
こうも有可申ル又申也をき設合所の挨拶
申也ても東書れ可申也第一有り所ハ不残
一 時ハ文四客の皆主人申客申文申也

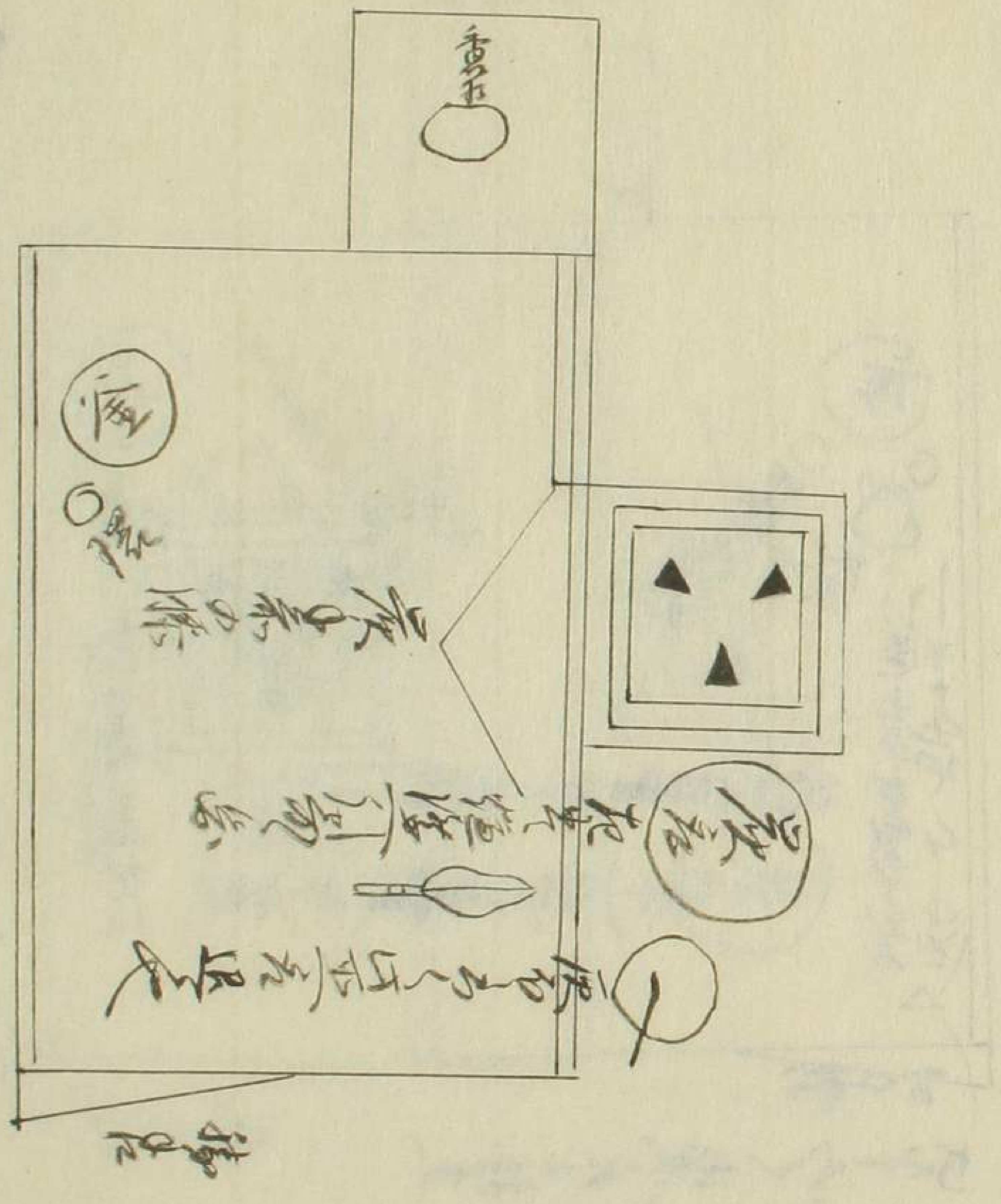
大目爐炭ハ初ノ置合ノ道具ノ圖



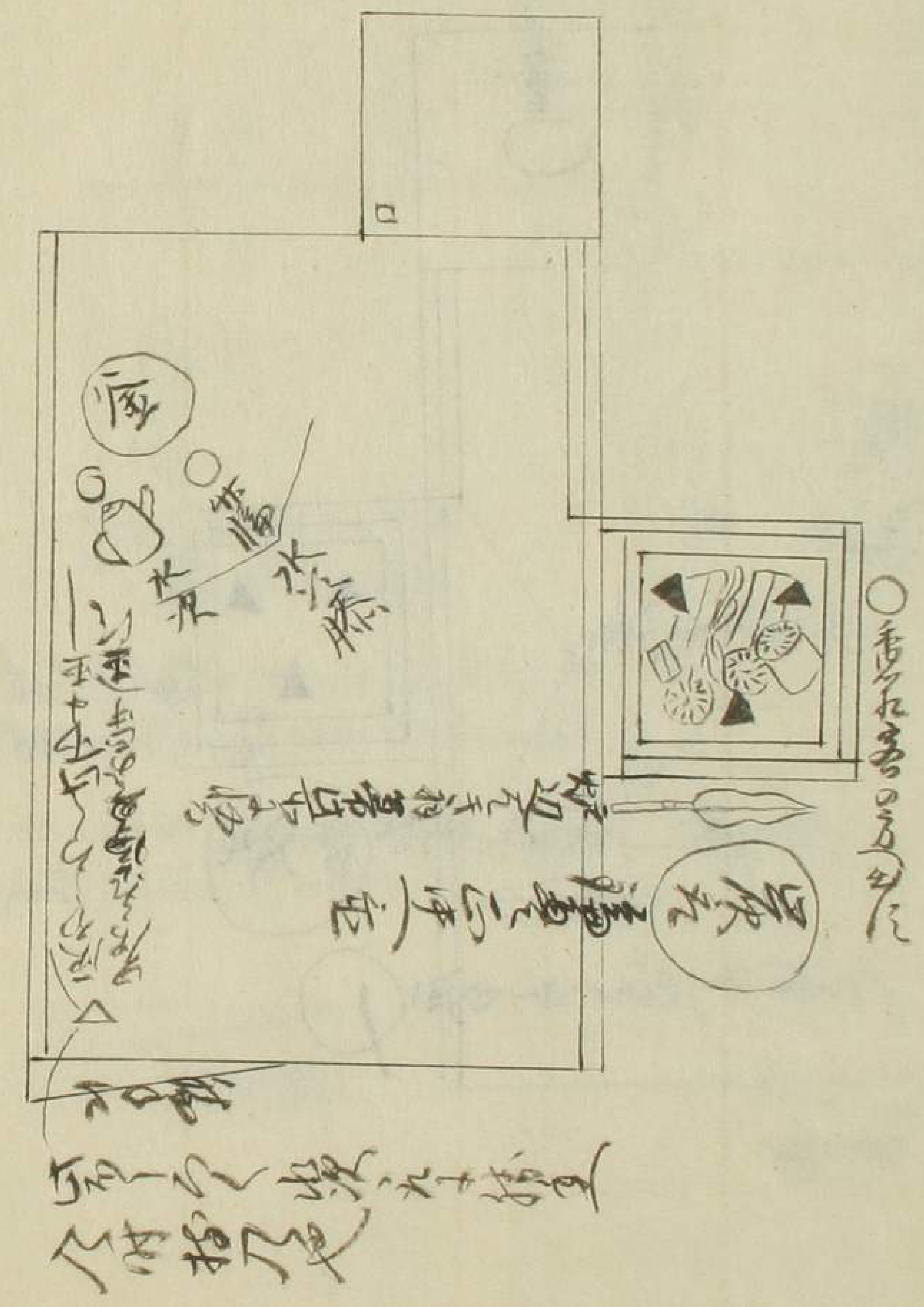
同爐中へ灰まき戸附乃座具配



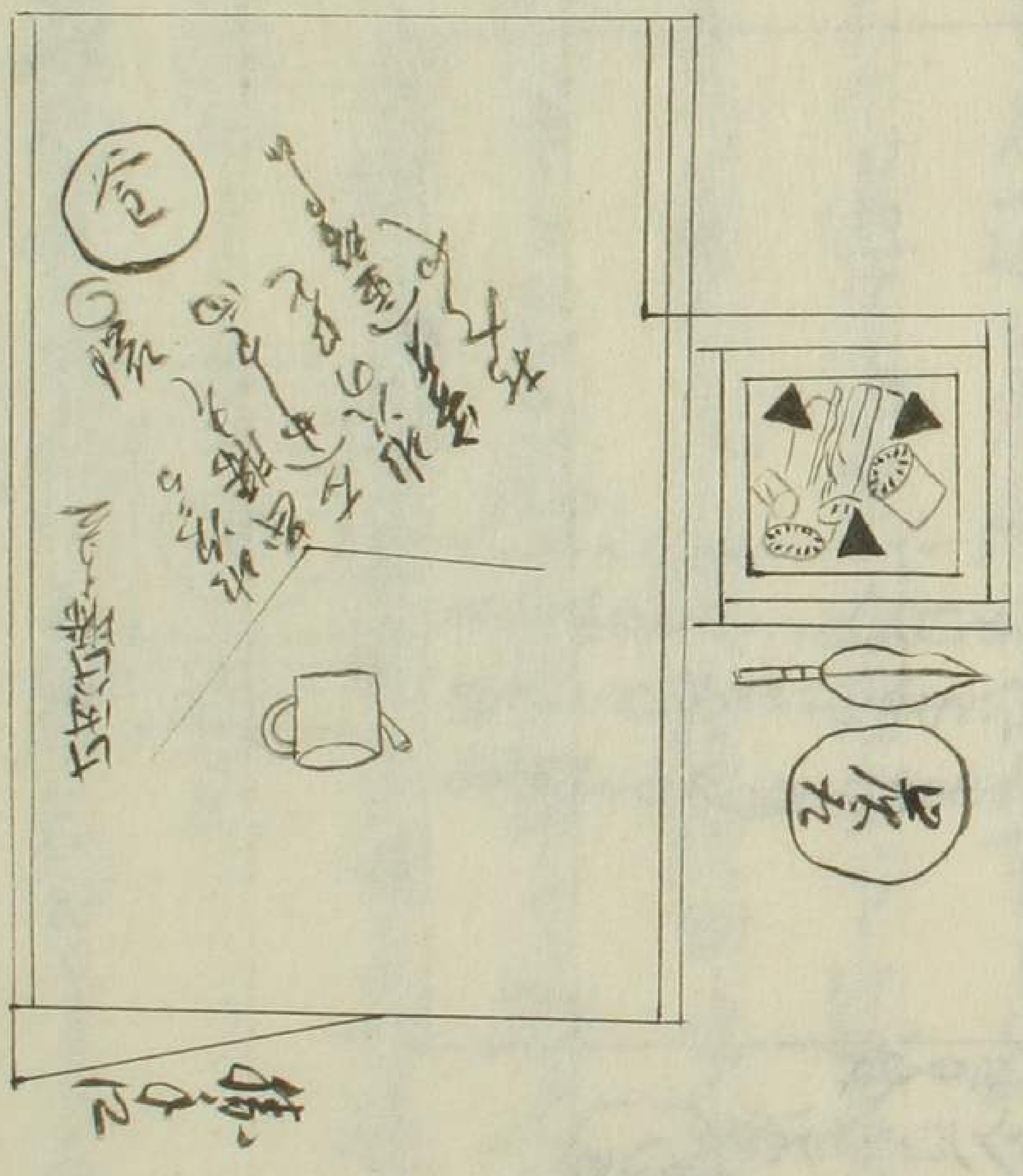

同炭斗ニ附炭ハ爐辺へ引寄一灰器ハ下〜置くれ退居



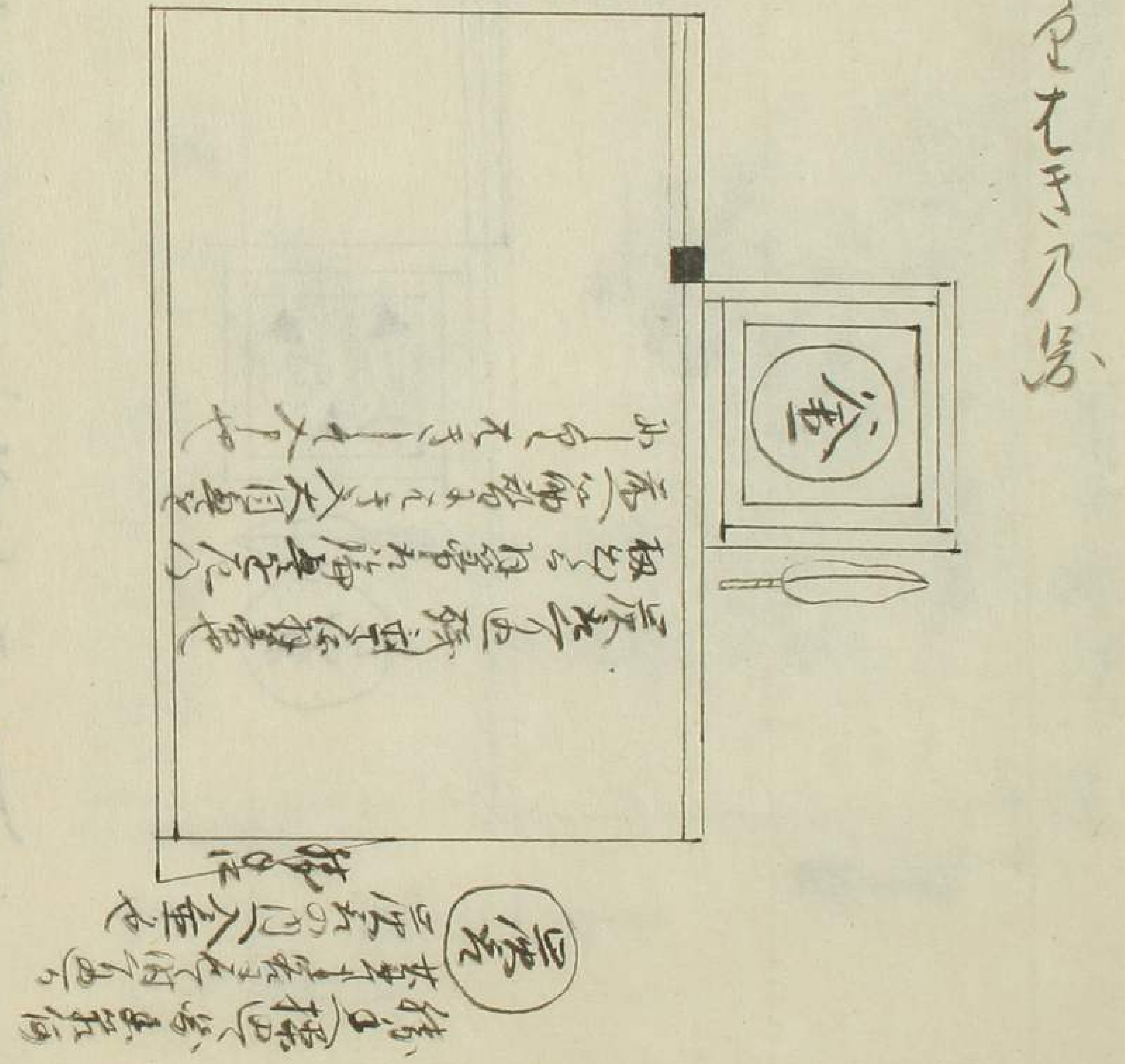
同炭仕上香合客へ出し釜ニ水次之図



同釜へ水次之後水次勝手へ持て帰る時ノ膝



内炭仕廻り之あき乃図




一 懐石料理出候通ハ亭主自役也

但勝手より通ひの人ハ出し候義ハ料理之品挨拶の

事ハ但亭主通の者出いたし候ても亭主挨拶いたし候而大名衆ニ而候ハヽ

一 膳を徹して進候茶ニ一通り出申候亭主あいさつ大名

又茶ハ其濃茶の時ハ料理出立ハ茶亭主出迎

一 膳ニは後菓子ニ持出膳ニ亭主あひさつの上ハ中立也

但菓子を出し又会席ニ菓子ニ一通入るへし

なま菓子出し重ニ而も同断たるへし

一 中立ハ鐘の音ニ而中潜ニ入へし

但鐘ハ打ても不及候ても有

一 又種町ニ而七文銭丹等ニ而手ニ而取候
大目五ツ銭ハ五拾文より手ニ遣ひ又ハ算ニ別段ニ
乗し記候なり
一 大目乃類後座の事
但常後宿より左目ハ本ニ有て額之後座ニ而
手ニ出して採出して一張ハしまた後宿より出
北若ニ而後座今一番額之仕舞ひまた本ニ而ニ而
附ハ後退座ニ而ニ極ほどしに採取ニ宿より出
手ニより候て延て座根より[illegible]ニ而も[illegible]て勝より今ニ而
一 後座事三十五番迄ニ而重て此ニ而勢ひハ不来遣ひ座ニ

持出し候ニ而座ニ而又書座ハ所通宿の手ニ而[illegible]ニ而極
重ニ而座何より不来遣ひ座者持出しハ不座て勝ニ而又ハ座重ニ
座組候て先勝座ハ今ニ而極初より先ニ而不出之座
を銀ニより候
但勝座初より宿ニ後より先ニ而後座ハ第一宿
ハ不出ニ而候しハ初之勝座ニ而ニ而ニ而遣し
強しや又後の座ニ而も如しハ勝座ハ初
重しや
又何座後ニハ銀ハ不しも延て初ハ座の附出
ハ何座ハ甚しハ出通ひて年ほどしも此ほど附ハ持出

胴炭ハ一度ほとうに白炭と同しやうに廻し重て下
火の胴炭と見分の炭斗よりも第一たりけれ
の次ハ添炭より胴炭組入りやうにして出炭を
又白炭ハ初の炭の事也残りて添之初より白炭
炭残きはれハ初より不似白炭を組合也又灰ほし
ろしの灰ハ初の事也残て云てしくなりハよく匙
掛物に出す迄も初より多くきは切らハ出入してせぬ
様し

一 勝手口より炭斗持出羽箒香合中より重ねて出る物
しても勝手口に置なり

一 羽箒古より掃遣ひもの也炭置之後掃ひて其あと
重なる事なき也

一 炭斗より環を出し灰器ハ上座の方より置
仕舞ふ也

一 釜鐶を出し炭斗重ね上勝手の板へ入れて置也

一 角かけて釜鐶ひきかけ釜を置く物

一 羽箒古くより炉縁炉壇をも掃き炉中の炭入
なきの手にて灰をとる也
但し炉中をもとりし炉中きれいに見入て座を
立炭をも置し炉中見苦しくは座を立也

一 亭主座ニ入時ハ客も不残手をつかへ礼を請へし

一 炉ニ直る時ハ右の拇指を炭斗の上の角ニあてかへ
まゝ柄杓取て三ツ之上の羽を延して上座柄杓ニ
取て羽ハ膝ニ置明日火箸を取ニ付時ハ羽をとりあけて置
但炉を持る時ハ炭斗を持時ハ右の拇指炭斗を炉
縁との間ニ置火箸を釜の環を取て釜を上け炉縁
の外ニ置又初手の時ハ炭斗を炉の中へ置へし
其時初炭ハ釜を取て炭を炉の中の茶入の置所
ニ置て置又火箸の時ハ羽ニ火かけへし
其火箸を持て羽を炉の縁ニ一文字ニ置
其後炭斗の炭を炉へ入へし其後炭斗ハ炉縁ニ掛置を

一 火箸炭斗の炭の置處ハ右の方ニ釜ニ置ニ掛へし揉
炭ハ手を揉香合ハ入用の時取出し置へし
一 釜の置所ハ香合の上ニ置て置る炭斗置て
掛り其時ハ羽を口之炉の上ニ置て柄杓ニ向ひ半田を取て
其炉縁の際ハ羽を長火箸ハ左の方ニ直し座
ニ立て直り向ひ半田の炭の縁を右の手ニ柄杓を
炭の置所ハ炉の中ニ置へし

一 長火箸を清め置へし但火箸の時ハ
但し炉炭斗向ひて右の方ニ置へし火箸の置
ハ炉縁の上ニ置時ハ炭斗を
炉中の火を残して半田ニ置上ハ時刻次第ニ炉中へ

合薬にて試し桐炭を足し重く入ハ試りて焔
伴ひのしく候
又桐炭不足ニ付疎る細のまゝつきゆらはハ実
の目方を一両程中ニ残す外ハ皆其通ニ上之桐
炭細ツ々成り候ハ炭桐炭なしに焼之やは
きやらハ能く桐炭を用ひて好

一 樹皮を不残炭の上向に方法上ニ而伴細かなハ
一家ニ二両宛にてもさこと上向也 其ま残上へハ其
第ハ桜にて出向の皮の葉の角にしてしく出すと
所への中ニ出ては成るは柄ハ出向へ云ふまゝ中也

一 鹿角を右にて焼成る皮の灰にして葉するハ枝を右
手に持て細かに火を出しきり葉へ移る大すものにして
上目の目方の方へよく附鹿角の灰ニ而灰をたく
候事の中程よく移きてハ火ハうつり候程よく移り
申候也

又一ツの焼に付ハ桐炭の中から火をたもり
大へ二両ずつはいて焼すれは大に試すれ時灰
の丸灰の宮殿の脇に細かに火をも焼すへ大きく
移して火ハ晩のより候成候
但一ずしもの焼出のまゝハ二日程大分ニずる也

見て見ゆるハ三寸ほとにする也

一 柄杓の向ふに火をと炭の細かなる炭の上へ向きて立に座敷に
てもち細かなる炭をとむしかけ候て小団扇にて柄ハ外へ
差す事也 湯之澄う之ハ置也

一 柄の長大なる炭ハ火とり胴炭を立てゝ置しかるへく
但柄ニ横一文字ニ置也 又炭ハ火の方をお置也
釣瓶共にかけ候中ハ又柄杓を掛候ハ 火ハ横一文字ニ
又炭具ニ付也

一 柄杓の火の方ハ上へ置て炭を炉中へ入中也 但火より
炭ハ火の方を上へ中して置也 是二寸一尺三寸二分炭

一 炭ハ中ニ炭ハ火をかけ候て 柄の細かなるハ火ハ入中の方へ
としてかけ申也
但炉の火ハ入候て炭の後へ大きなる炭中を置
絶て炭二入炭を立て置又炭を立て置人也
炭所ハ入付て置て候共有之候也

一 柄杓を立てたる炭の着る柄中に付る候よく火の上に置
中ハ火を持候ハ炭又遣候て置ハ炭の角に付て炭所
候中て炭をもち立 炉中の炭の向ふに置炭中へ
置候ハ柄の火を付ハ炭のかしの又座敷
中は又炭ハ世上の事といふ候へ共柄を立候ていふとて

自分の手ハ左の脇にて[illegible]重ね合[illegible]宮

ましの上に重て[illegible]の折[illegible]て置く[illegible]

はさみの二方[illegible]にて紙の重ね[illegible]

心得べし

又此内にて[illegible]者[illegible]出

さ[illegible]一の重ね

一 [illegible]

[illegible]

の[illegible]の角に重[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の[illegible]角[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の角に重

[illegible]の[illegible]

一　羽箒并炉縁短盃之法ハ今まての通りよ
　重也
一　羽箒を掃出し前ニ置し重箱一ツきさと改て続也
　但炭斗を取出し右之炉縁の上ニ置帰ニ吉ニ炉ニ置香
　箸の中ニ右之重ハ炭斗の右の方ニ置家の炭斗の方
　羽箒に重（羽月の方ニ置之）掃火箸と三ツ置の
　たしかに火箸ハ炭斗へ戻し香箱ハ右さしに右まて
　ゆく重ニ出し置之
　又炭斗より香箱のくち出し之ハ此座ニ右ノ先ニ出
　たしかに此をたしかめ候也炭を出也

一　板羽箒右ニ出し炉縁短盃を掃し右ニ羽箒
　前置之
　但此ハ表ハ右の方ニ置也
一　火箸右ニ出し白炭を右より二度ツヽ入ニ置之
　しかし白炭ハ之ハ枝炭の外右の方ニ置之
　ゆくも可為し
一　炭ハ仕方此ハ炭ハ臨炭ニきへ申也
　但枝炭ハ胴の炭より始而と之ハ右より置
　此ハ上ニ出し中ニハ此之ニ置之
　先ハ胴の炭より枝炭ハ右より入之たおし

飾り之文神の炭に添て置物之事炭を置ふ
心得候事とて此事もおのし此白炭ねよ太さ一寸
長ひらて寸法ハ細きと多き事心得候白炭ハ
山本きひらて寸法ハかろくし重候

一 炭斗之火箸炭ハ炭斗へ炭し使候へ添て神水出し候
重く立へ置し出候炭斗へ入羽箒を左に置たる候
炭斗とお釜上羽箒を置て炭斗のわかり炉中へ置き
廻羽箒にて掃なし炭斗をおろし羽箒入帛に
釜之気を嗅のさだめして釜より茶を炉縁に
炊元より方へうつし炉壇をもしるし是ハ清き

なかきハ別ちよくとおく也し板炭出しへ出して出立てとる
掛之へ未出てハ釜を据て羽箒ハ炉縁と炭斗の間に置

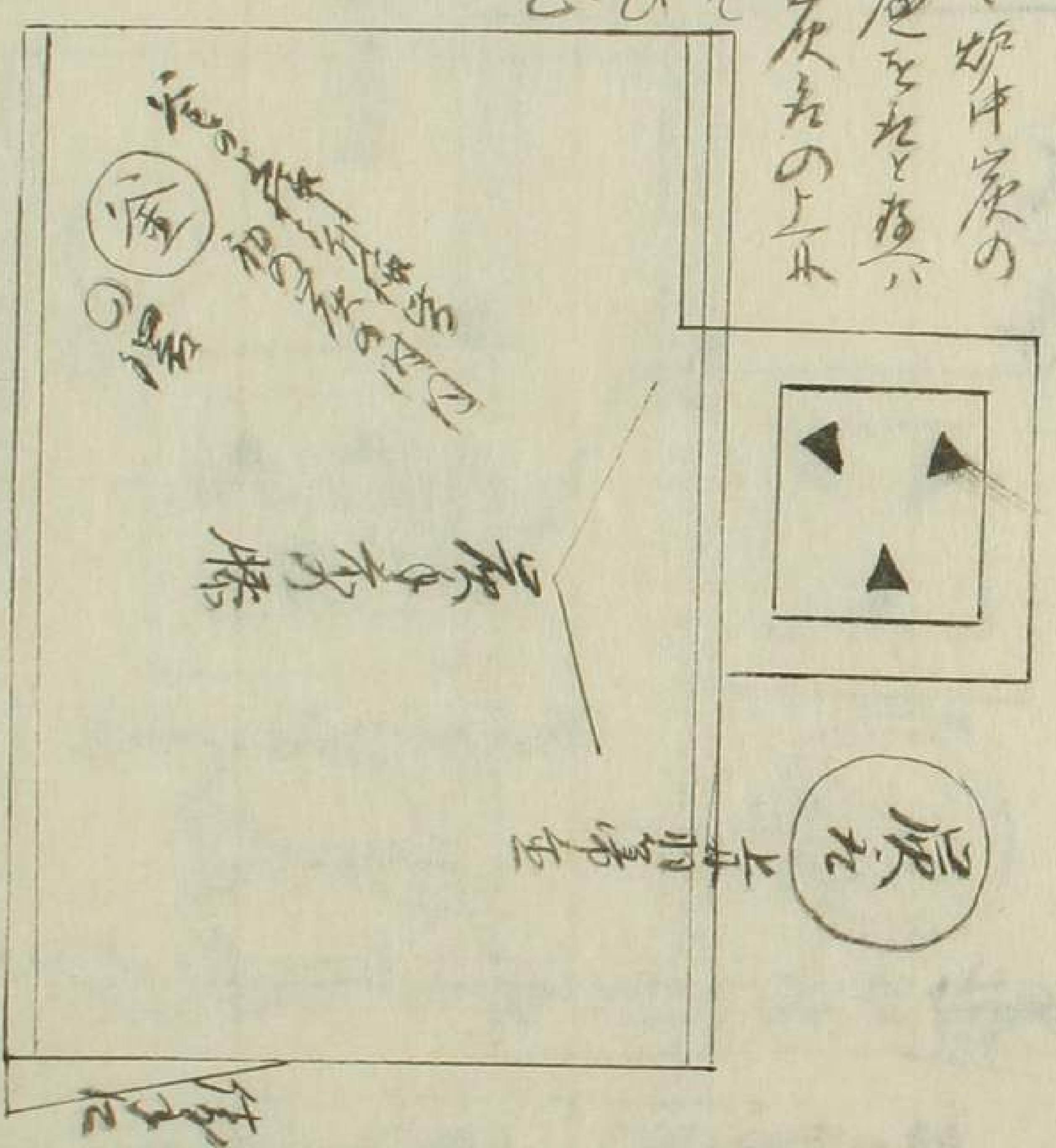
一 炭斗とを中にて据て灰を中に置て釜を据て炭
斗を右せて灰へ掃へ灰ほうらしにて掃入て一や
也ましかてより又灰へ灰をす掃入る道具
おく置也

一 板ハ目立之へ出羽箒を大目立之内へ向ひ添て
しかと右へして羽箒へとくとなききの羽箒炭斗へ
仕さめ板書記へ可被仕らなしへ追て度に一つ有所
右書記へ候趣へ又よく候也

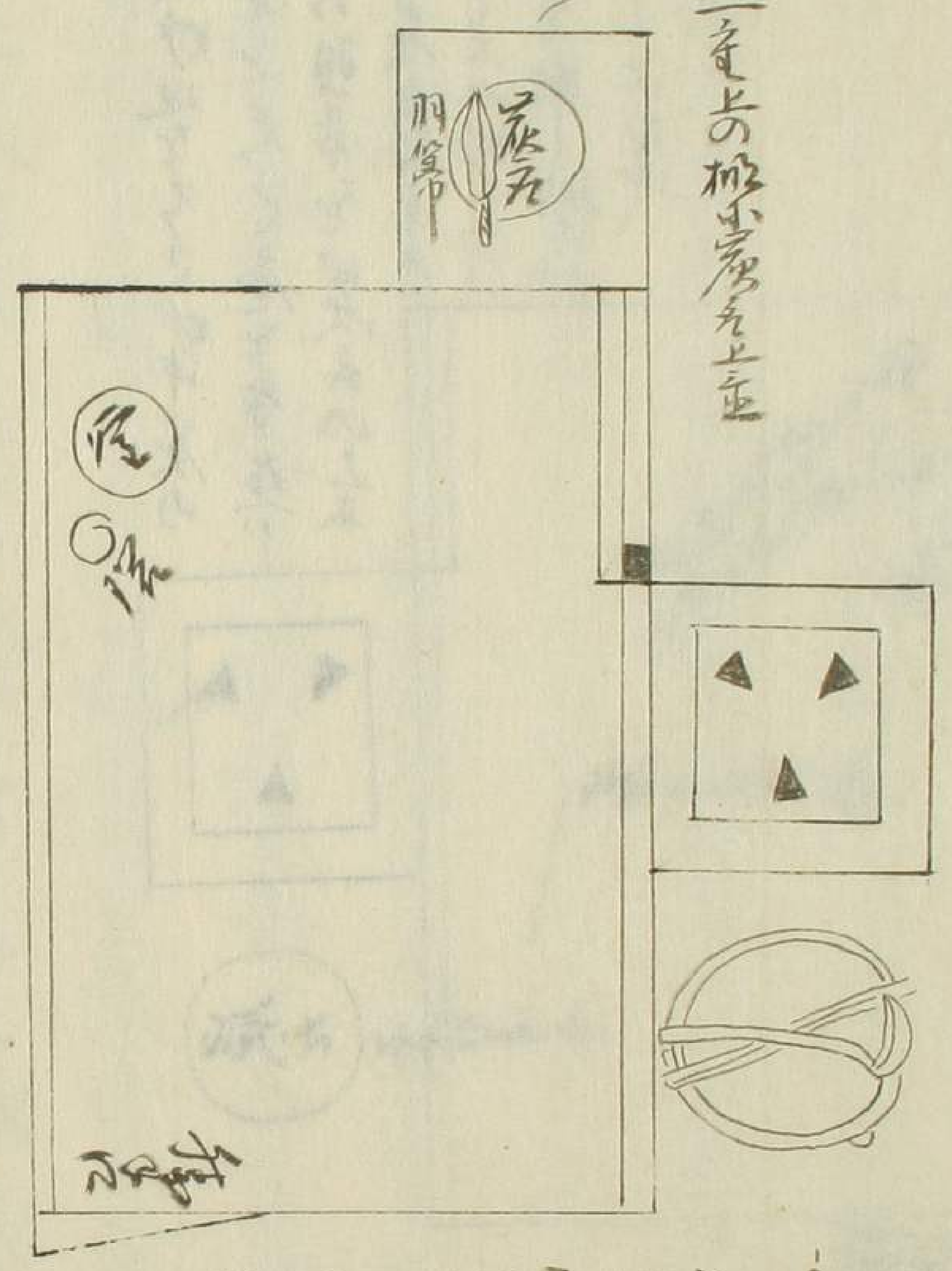
ゆるく出しも使ひとも淡し

大目乃炉壇の炭を置る道具ノ図

此時炉辺をふき炉中炭の流通を見るく座をそと替へ左の羽帚を炭の上に重炭を左の面に手を二寸上の柵に包脚を延し柵の心中に上手や

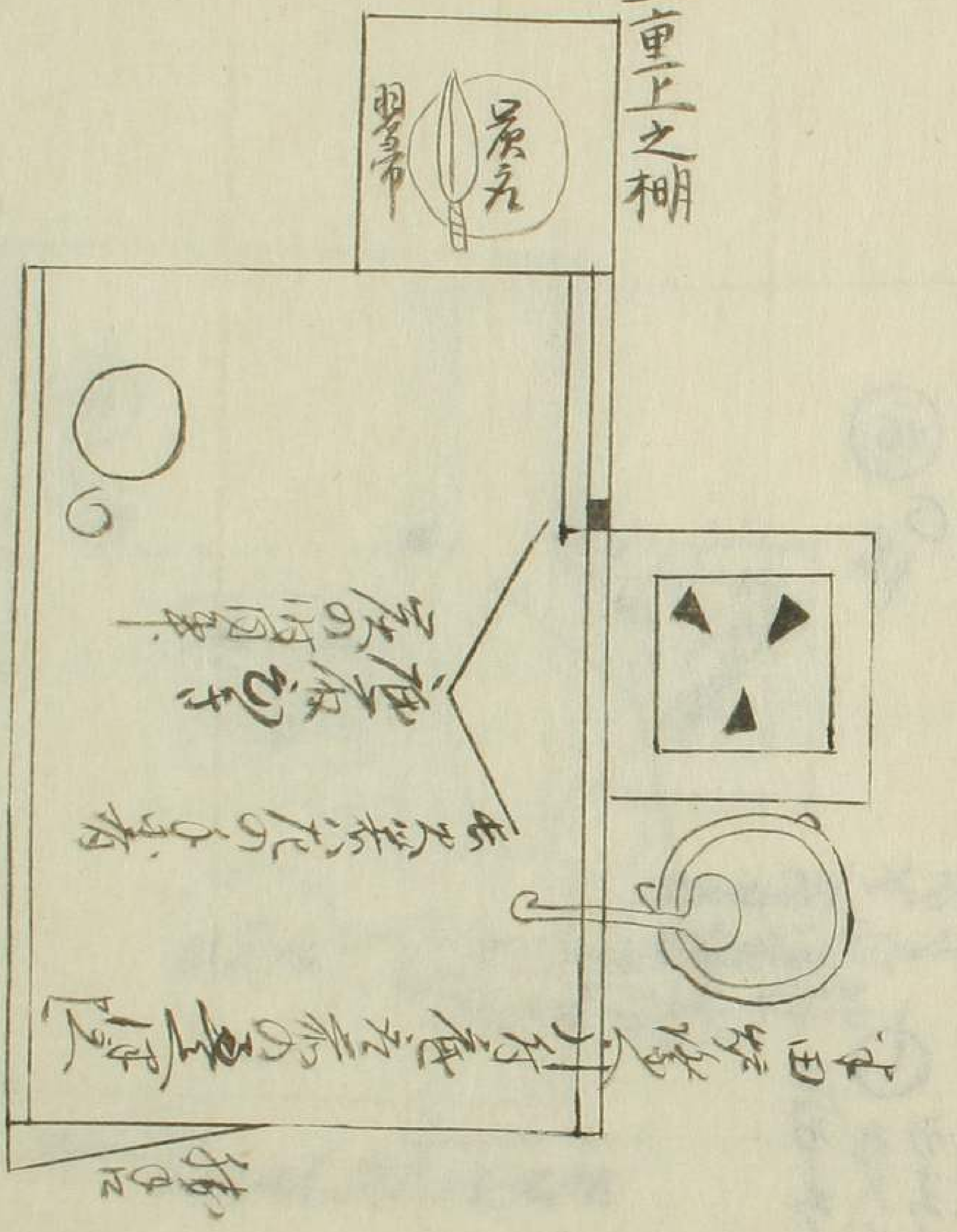


同炭右棚ニ上ル田鍋置ク出ス図

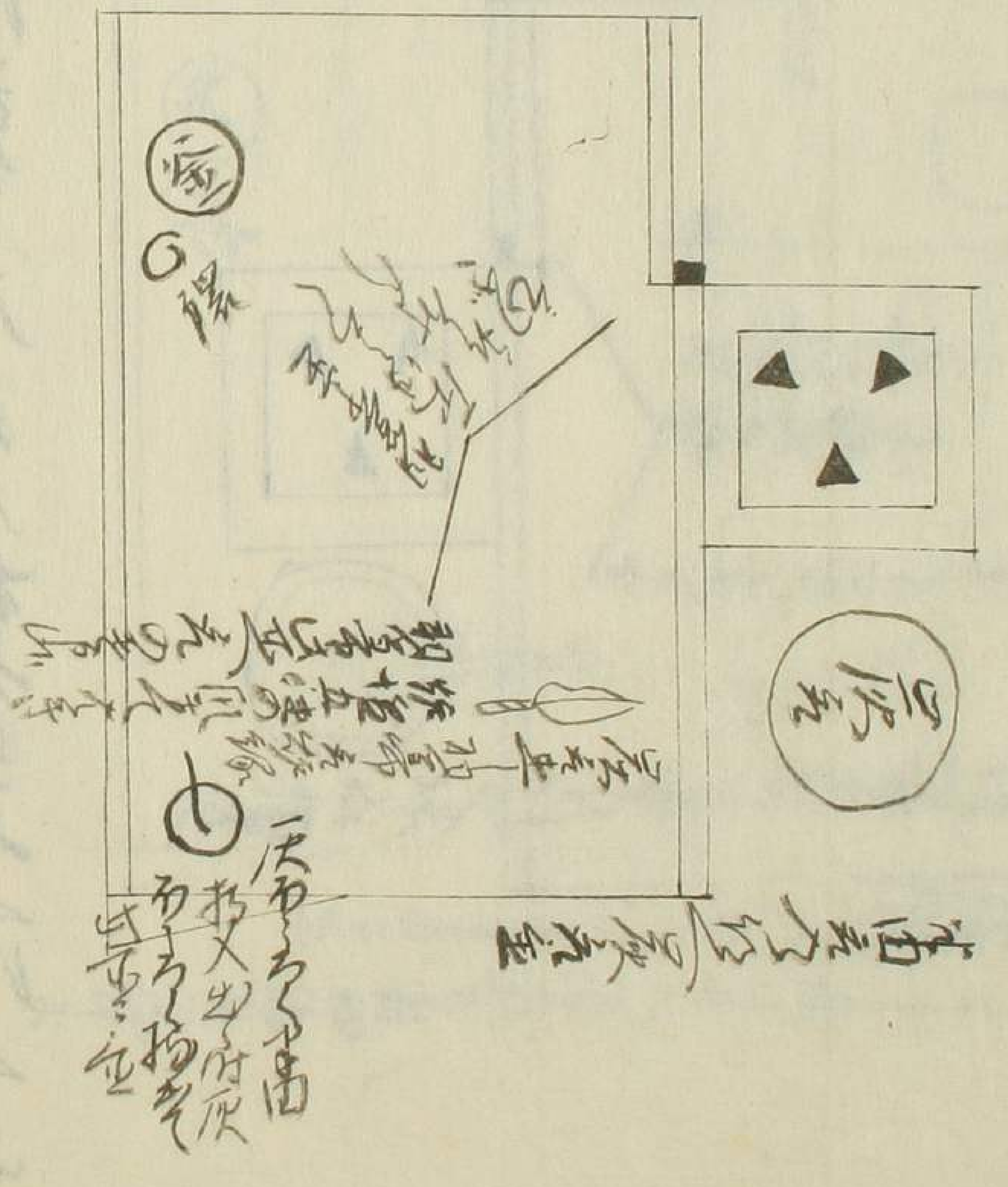



[illegible]

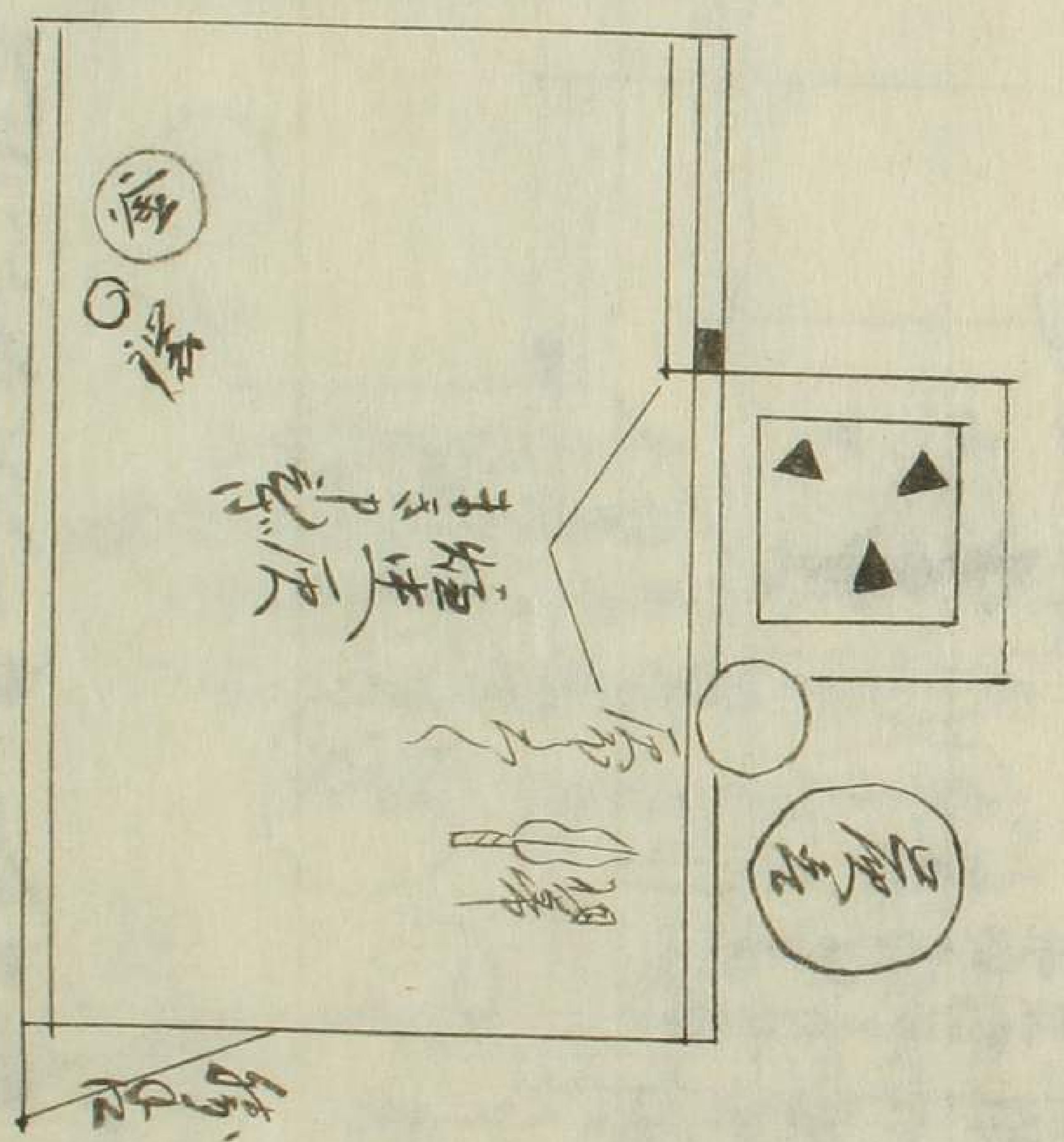
同上田炉除ク引付二度右ノ棚茶ノ置ク図



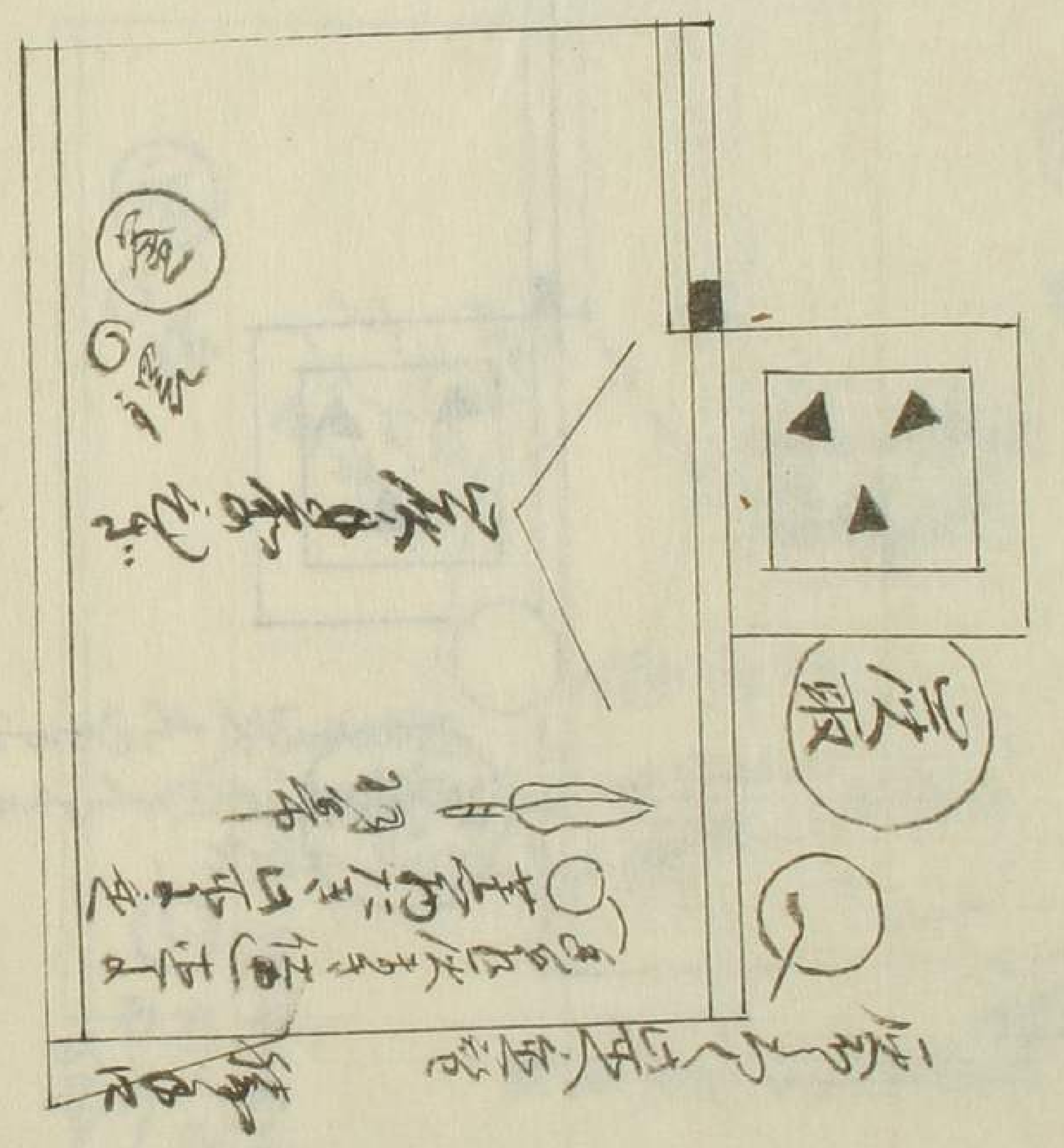
同出口客入席客揃置之画し席ニ加ル客



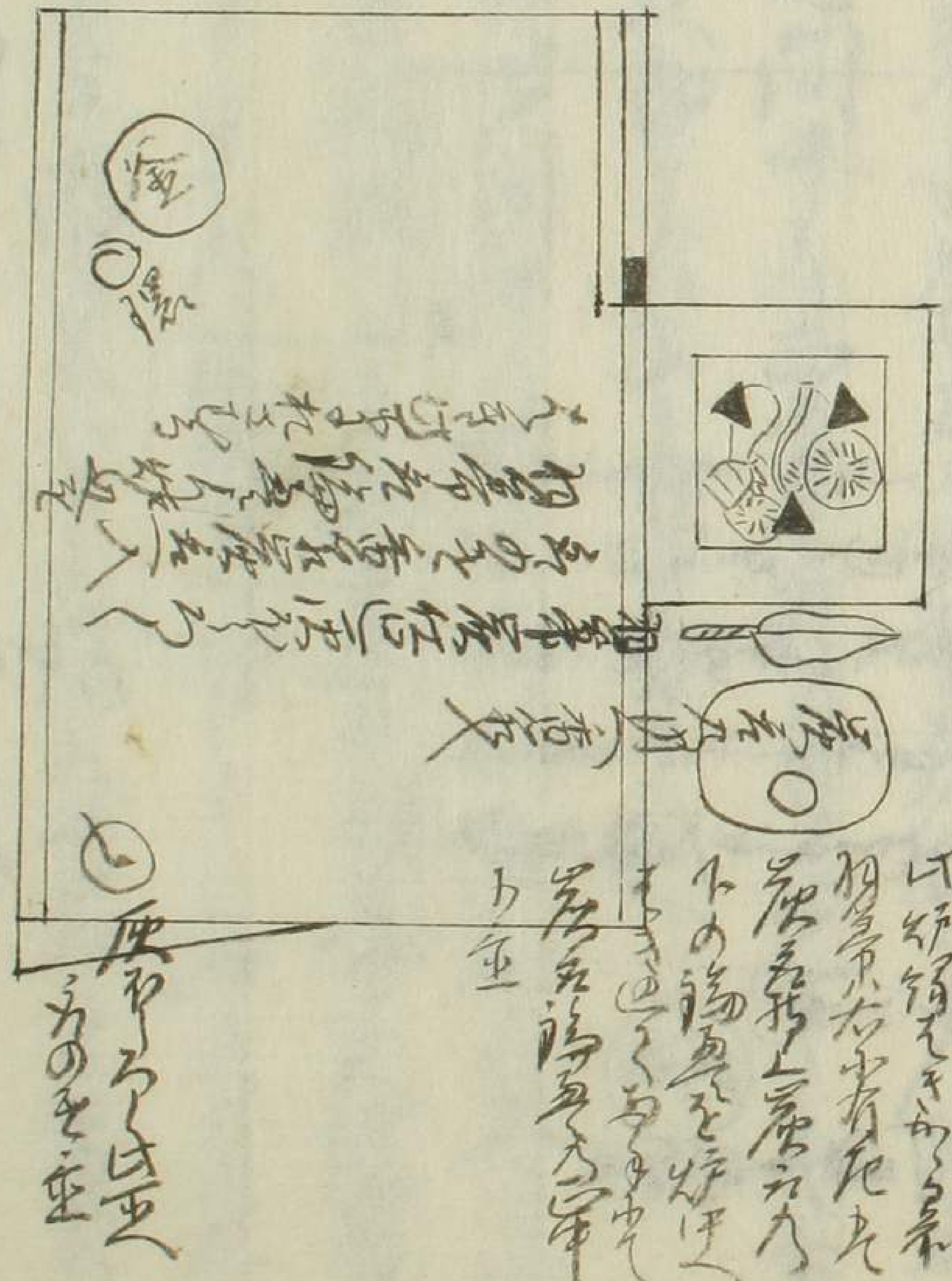
同一席手続附一席而ヨリ下ク炉際ニ座客



同炭元炉濃茶前炭のかさり付の圖

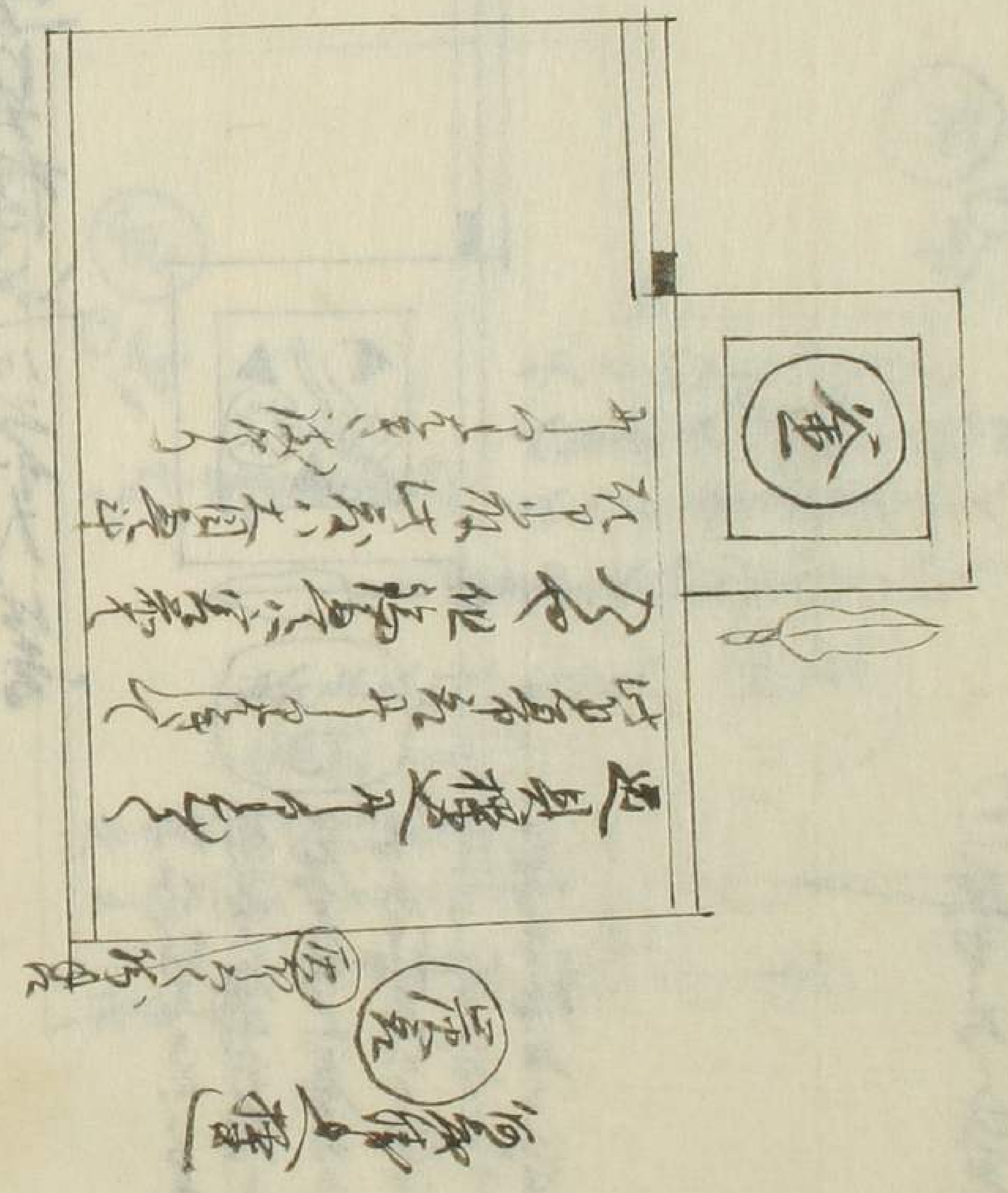


同炭拵道具標之ハ前ノ如畧



此炉縁さかまさ系
羽帚ハ右寄花丸
炭斗上炭六ツ
下の輪炭を炉ほへ
まきさして置中へ
炭を輪炭入の事

同庄具採込ニ而しまひ置候處之圖



四五十年位の炭ニ而

一 蒸年中炭ニ而ハ花橋炭ニ而ハ繕ニ而なしたる

同樋の炭ニ谷て附釜敷紙を庄具迄の二穂

くり上之間中ヘ二重ニ折目を立なし人重ね上ニ

釜上外へ節ニ庄十斗ニ並へし

一 道具迄ニ立之間中ヘ亦三川割ニ而巳割而又二ツ割ニて

も香炭揃候ゆゑ又香炭相包帯又揃相包帯を

も揃ゆゑ其上ニ同様ニ而の方へし迄ヘ之目九ツ目揃ニ

其炭釜二重揃ニ而の方ニ揃ニ而合口を香炭の方

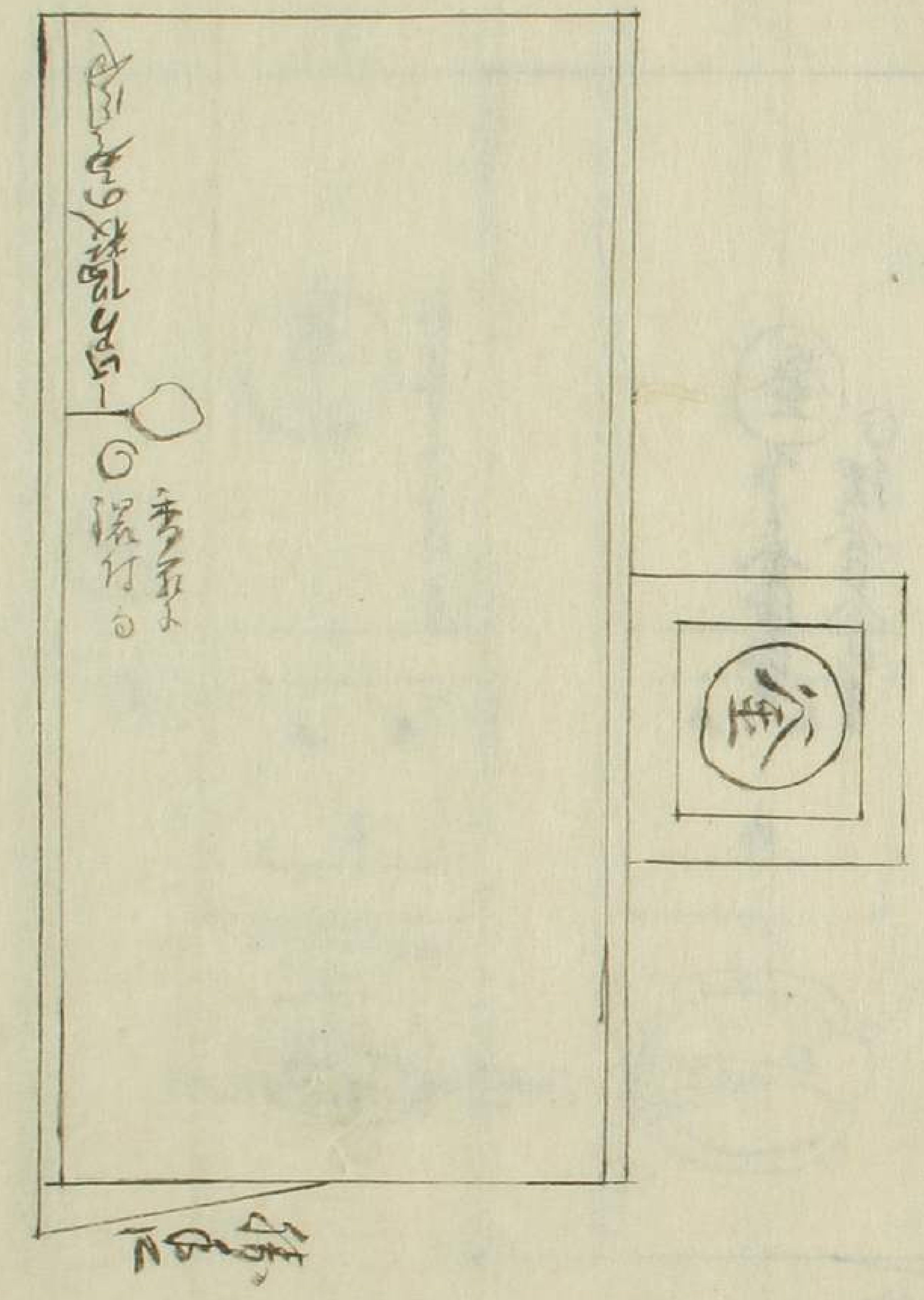
而して其揃かへ上ニ而の揃へ二重へニ而へ羽

第三炉辺ニ置式ハ左之中ニ而左之隅ニ炉ニ宜也
鐶なとは釜ハ一つ置き床中ニ入茶入紙二つ出し
同中ニ二つ中ニ柄杓を先ニして重ね上ハ茶入ニ入
香合之炭仕舞道具羽箒ハ付鐶之付けて左
如くも右之香合ハ左への上ニ置炉ニ置也
三炭之入口手前ニ而重ね羽箒一つハ火
ニ置遣し一つハ火ニ置き二つたきもの置香
取分て火ハ台目のことし
但香合ニ羽箒ニ鐶同前同前羽箒
附ケ而鐶之様等ハ同前

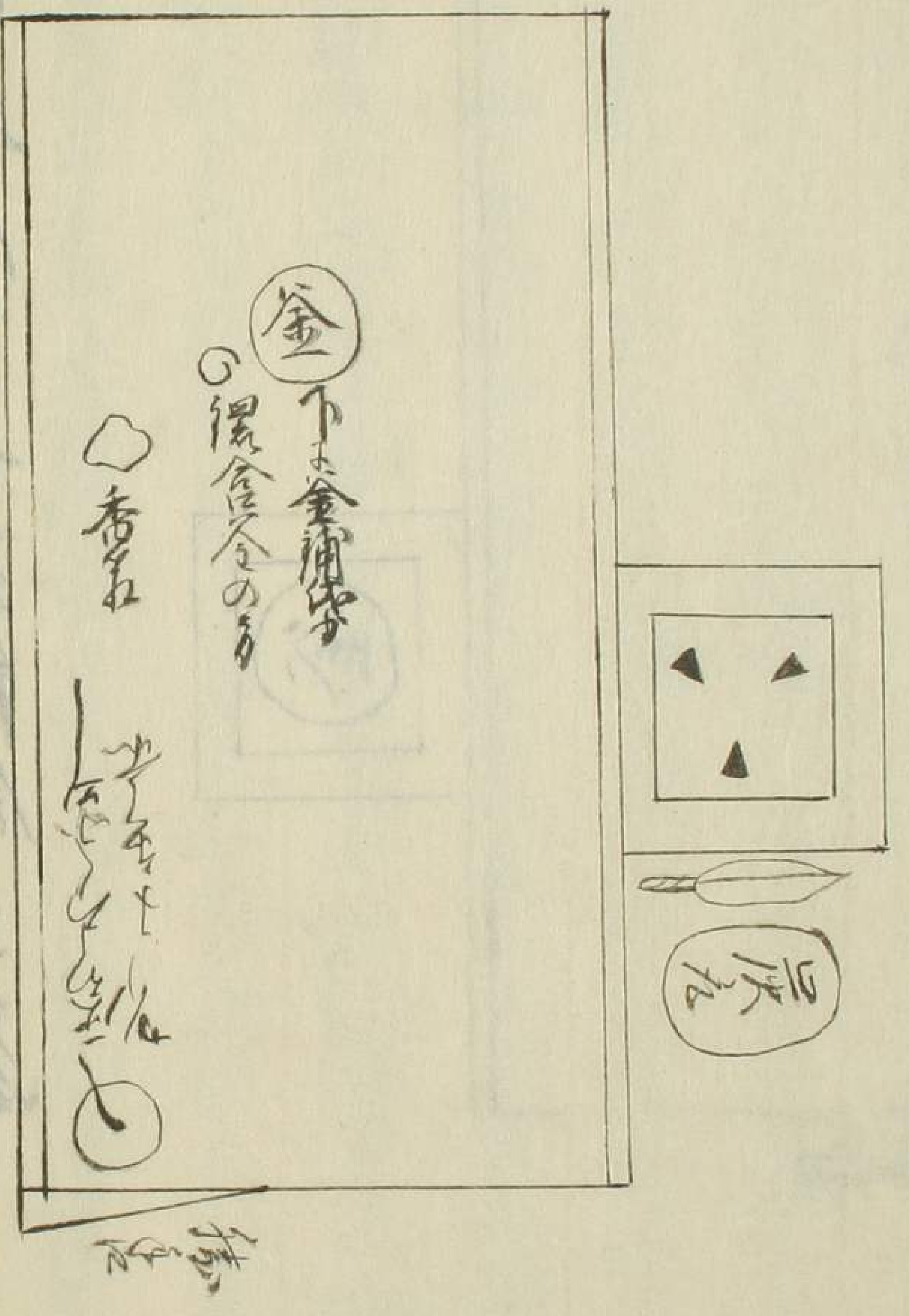
一　後之炭手前ハ炭斗ニ附ハ茶入台目のことく小重ね
上ニ香合を置き羽箒灰匙之様ニ入同前角の上ニ而重
鐶ハ炭斗の角ニ置三年台目之仕舞同し
但付香合を脇中の様ニ同前炉の座ニ
之ハ炭斗を初ニ置て重ね之ものを座之
一　炉の座の三と後ニ付置而是ハ式炭斗道具共
之みの先之同中之三年ニ三のき重ね候之
但台目ニてハ二重上之様ハ上ニ重ね而之ハ上ニ重ね
てハ式重ね之ものを香合を脇ニ置ハ上ニ重ね置候之
右之外台目ニ而替る事なし故ニ台目ニ

新造之節下段ヨリ箪笥出し居候へ知へし

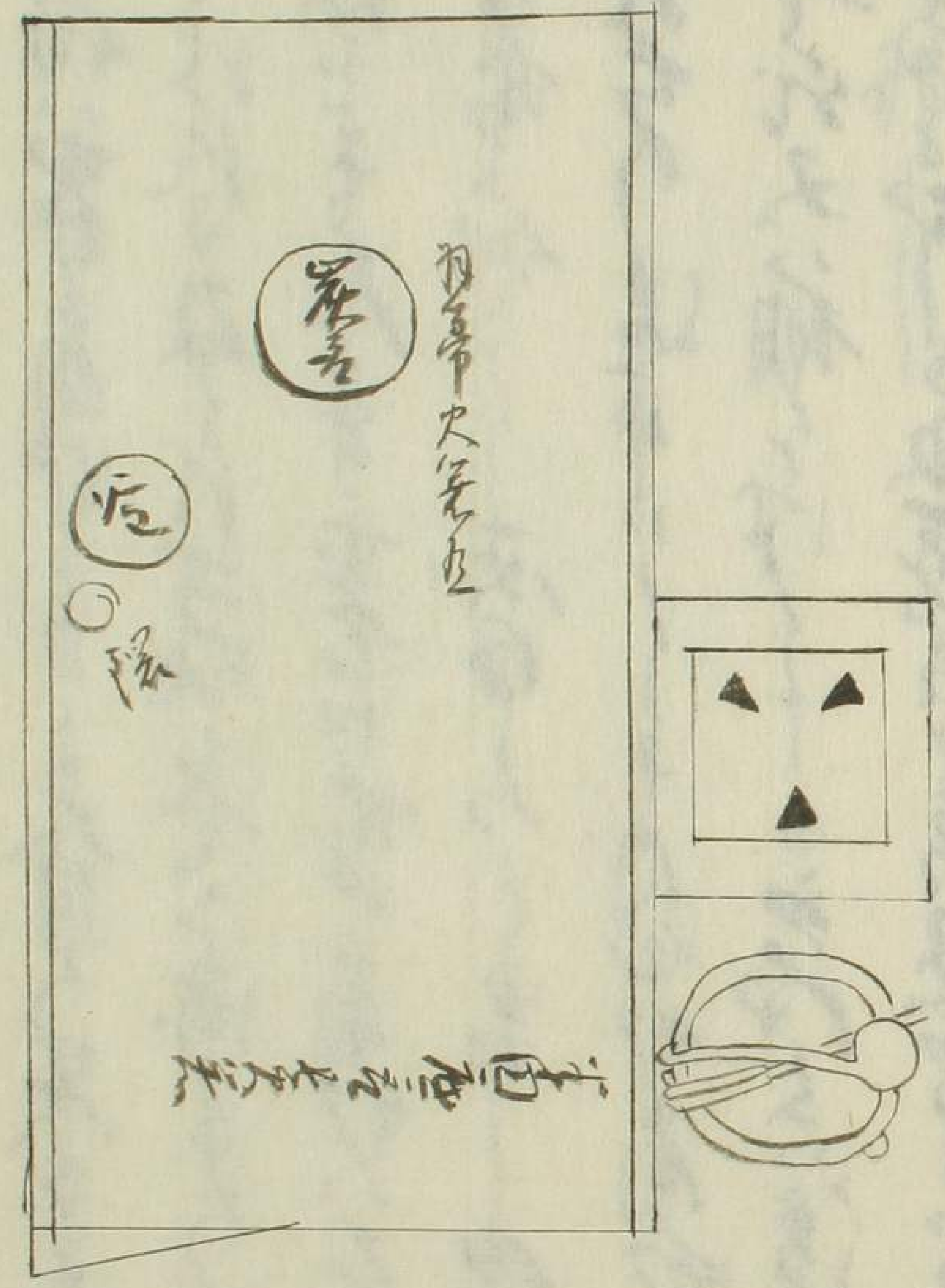
四畳之中央之床上ニ香箱環餝り置候



四畳半物ノ炭小釜上て下の図



四畳半後の炭小釜上炭名号退出田西ある図



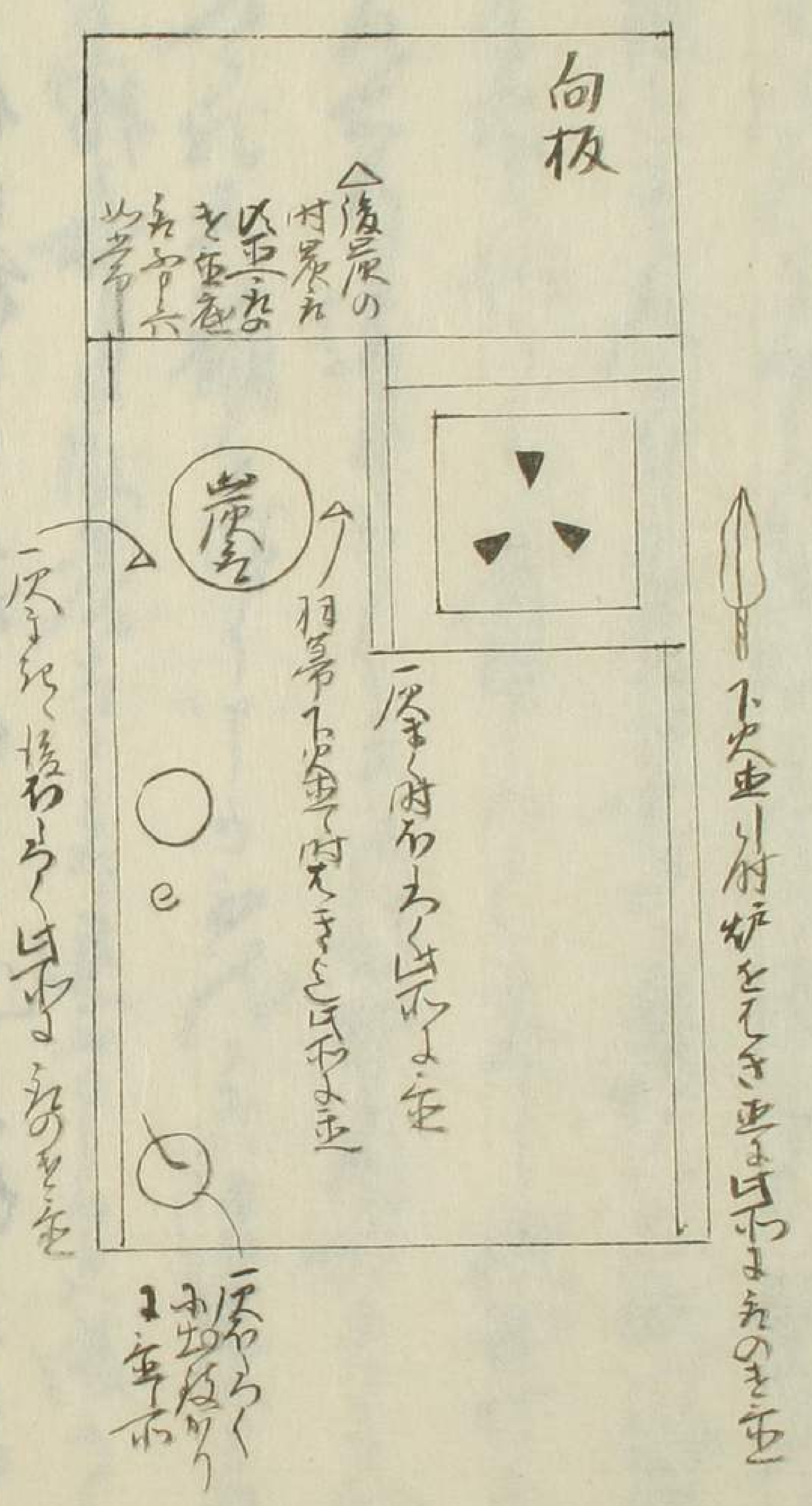
向切炭之事　一

一　向切ハ常乃角炉ニ有りて大目乃炭ニ見え申候ハ別
ニ組合せ候ニ付出炭ハ釜を掛る方乃勝手乃方乃事
環を手前ニ有由置合也角炉ハ大概風炉の炭
手前ニ似たり使はしく置合し段炭角炉角炭
大小乃違平炉ニ而ハ角炉ニてハ向板を
入候又ハ細を付けれ乃事ニ而ハ湯炭ニ有候付
炭を前ニ置炭置て退けて置ハ残のくし
向板ハ柳乃なま湯ハ段取ハ其炭を置ニ向切を
之候座炭之第一向切なしして向板ニ置てよし

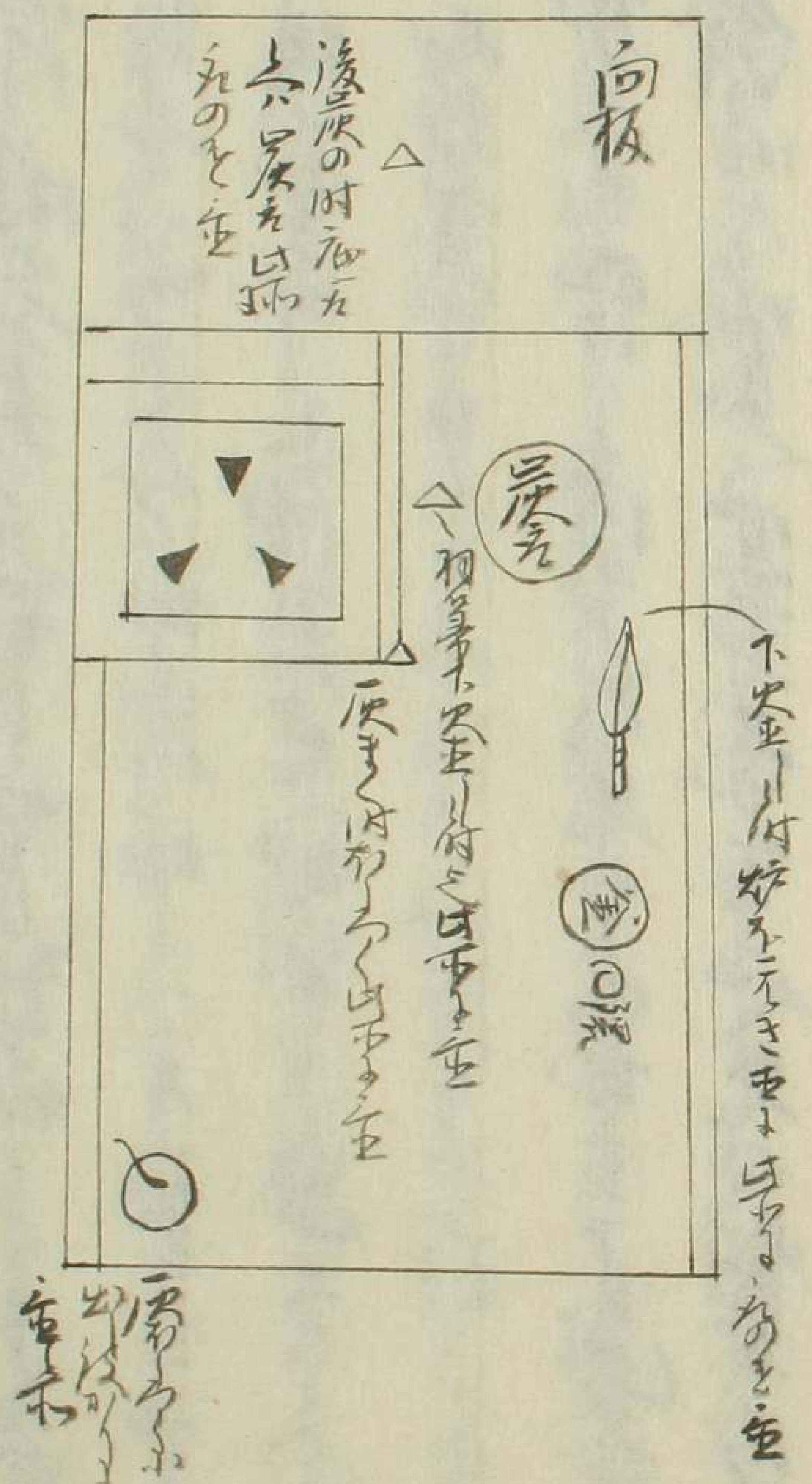
更ニ炭乃第ニ見え柄置候へし
但向板なき座炭ニても道具乃置合ハ其年
形し

一

向切炉炭手前乃道具配




向切角炉炭手前乃道具配



炉の炭継様の心得

一 炭継候時先火を直し置かきあけ候ハヽ申間敷候
し候てハ何しても火ぬけ候てあしくかきあけ申間敷候
但かきあけ候様ハ右炭へかけさし候ハヽ火をもり先ツよ
心得可有之事なり

一 胴炭の両とはさみ先の方へ寄せ置申候時其火
炭を継候時其上へ置直し重ね候也 先ハ胴炭の右の際
へ寄せ候て五徳向の爪の二ほとうり右の方大きに宜敷
よからす

一 但炭ハかならす右様に置候へハ底へ申さぬ也 其置様人々

一 炭継申候時下とり置候ても底を申立て上申候へを
入申ぬなし 又五徳の大き成る火を寄せて置候へハ重ね申物在

一 灰床ハよろしき事

一 炭継申候に炭のよこ置候て申事 中火へ入れ直し置ならす
不申候之由申候 炭継ニ置申候へ火ならす候て横へ
但炭の置様を右脇の人ハ置様心得候てかけ火をまつ
[illegible] 一五徳へほとよく積様ニ継申し置き大きに宜敷
出来火ハ一火ハ炭ならすかきあけ申候へハ申ても別心
ニ入候へハ火之ごとくてのりハよさそうに直し
申候事入申ハ かきあけ申候火炭ならす候

ましく候ハ色々申も重ねによつて二段三段にも重ね申候中ニ附
火先き燃留を炭留とも心得へく候
其外心得有へき也
又炭取の事前にも書きて置火炭の本来より炭の
仕方は定まり申し候得共茶の湯炭と比較よ
の事はいつれも申まても有に相成人は勤しんの
業也其上にても心得候てん心得也
能く御覧候へし
一 胴炭との附は火をしつかとたよらん太さ指二本まて
はまる炭中より茶の湯炭にて胴炭との差

一寸中よりも切炭口は枝炭たし太さ三寸也
しかれは右様一文字に重ね御茶碗にも手前の段と
同し所へ置候一御茶の間は花の方をお
火の出候へ又右の所へ向て方へ向ては
御茶の重ね一文字御茶碗とても立ても重ね
一 枝炭を置くは胴炭より火の付け置べし
相の炭とも置て指して通じ置炭を置へし
入るへし
但上の炭とのせて下の炭を置へし置候は不苦
胴炭を少し置候は置へし

一 又少し思案して次の炭を重ね候事ハ炭の中付たるハ
置炭の時の事也 置炭を重る也
但胴炭并ニ炭留炭打しハ 此炭ハ割炭と定
又割炭少く仕舞して 此炭ハ丸炭少く候又
割炭を今一ツつけても不苦候
右二所の炭ハ同様ニ流して好ニ候間ハ流すを
能く其外の炭ハ右の所ニ押挟候ハ論ニ
無とせし也

一 枝炭の炭重ね置として一胴の頭ニかゝる様ニ長炭
を重ねし其長炭ハ打すまり上ニ重ね候也炭斗ニ有炭也

右様も一寸位切し
但一胴の炭丸炭多くハ割炭割炭多くハ
丸炭を打候也
又一胴の炭能頭合てハ長炭打しての
まして白炭少し長炭の頭ニ心を付せ候ても
少なく右二本ハ五一寸程ニ胴の頭ハ長
炭を打流ニ置也
右胴ある炭をたて斗ニ附丸炭ハ子細なし 胴を
洗ふ物も炭斗も同じ物
右向の炭も初めの所へ置て 其上ニ押候也

初の団大炭を冬ハ炉にくべ置て火をおこし候也
そり石を猪二つに候ば点火の中に入
炭を置て重ねる也て置候事に候これの事也
なり也
但はぎしめる布衣人の炭を置て重ね候
ワ子其余の人ハ白衣衣裳を着て人ハ置候ハ事
用之
又割炭ハ割目を上にして炭の上に重ねみやれ
其式之又略しては割目を炉目とも火をおこし火をたき
けれどもまことに略ハ略にて大割炭ハ向にも置候

並初より人ハ積み置也 其式にもきハみへて置候
玄服のよりハ上積ゆに三積ホハ慎みて其式におゐて置みの通
一 輪炭ハ切目を上にして向きの炭目に火をおこし候炭
かさねを鋏くそのまま入けれども是もかのあの置人候て
指わり也 初心の人ハ輪炭大破れてをき入うへしれ
つまり附ハ生中の穴し前の炭目に火をおこしをのせて
をきまし 炭
但輪炭ハ穴に火をおこし置入おきし事に心得有火人
をしぬ之炭の割き目 露の人ハ略式の附炭を
かくハ是法然し後にかきうる心得きハ輪

炭置やうハ火おこし候間ニ炉縁ニ四方をさけて置べし

一 長炭ハ重ねとりおき又ハ相応ニより長さ違ひ候
なれとも寸法ハ難定口伝有之候べし 右炭ハ縁
炉中へ入る火おこし候而も又炭を切もし
そのまゝ置て其上ニ長炭ハ炭一通りの仕方ニ而ハ別ニ由ニ
ありて寸法ニ切り寸法所望之

一 白炭初炭ニハ置くへ其のときハ炉中へ胴炭をのせ
まゝへハ火おこし炭ニ懸り白炭一寸ニ太れ灰かゝ
りくへ其の置きゆへ火おこしまゝ其の火ニ寄せ
胴炭とも其上ニ置くへハ此所ハ口伝

其のわきニ置候へハ宜しく候也 但胴炭ハと
ありて炭ニ添ハ候へし 入るや
但炭ハ大キ胴炭ハ置かず添ハせず候而も宜時
ハ炭大胴炭を向ニ置候之ニして炭添之
長炭ニ胴炭ニ太き灰添しくへ其のまゝ置之炭
但白炭と丸炭置へ可し 下ニ胴炭大ニ置炭置へ炭
くへ炭大形ニて其のまゝ置も同様ニ寄せて炭
炭置ニ重ねても宜之

一 炭但白炭重ね灰添ニ置し置ニハ丸炭ニて火おこし
候へハ炭置へ炭しかし其の下ニ胴の輪炭とも置早して

白炭ハ六残りの生炭ハたきこし候白炭好
たきみうさぬ也 胴炭中と切り居たきみ付
胴炭通りて火たゝし 一二寸八たきかへぬかふし方へ
一分の分中付てまへりして たきみ下の横一文字ニ
うさふの様れニたきみにて主之修分ん静ニたきみ
てとし 白炭多し 二所たきみ口にも 同点之白炭
多きさむニハ胴炭居へ炭組候付何れも把りて云
組留せて たきみんハえて 組の好之 又炭前にてち
まれ迄の炭組中にて 出也打て 多たきさし 時まで
之枝たんぽの炭きと主炭ふしてもふ手元と云

たき炭にたきむかへし 又多く有白炭をすかし
たきみにて 火乱るも たきるの 有事ハ二
れハおしぬても 添へし かつき添也 所持切まる
すく
但白炭並ニ宗炭の座つくりと洗炭をも引之
又ハ右の事と見へし 又ハ白炭をはぬく之増之
冥並炭之 右端より なしハ三寸てもなし
を増へて中のなれし
又白炭ハ其の方をしきて方へ半分より生之
りん枝もうち炭ま之又位なきんなし

ゑんとよろしきなれとも功者ハ心得へき事也
又禰乃鷹ハ白鷹其中にも尾ハ渚の鷹にハ
〆三聖野分毛をもひ禰の羽をもひ〻ハ渚ハ一
尾の重宝也又禰の尾きさと一羽渚の羽かります
白ぼ一尾の重の尾は花渚似たる宝也
又白鷹の重宝は火炎を取事ハ松尾の鷹の尾を
しる取羽とハ白き渡しれ松毛の鷹の羽を持中の
能き所しも白鷹ハ渚にと白ひるまし出来る
羽中宝し能候ても先火の若をとる事渡の分
右ハ其の尾のまの尾事しらへとす門て絶の羽も

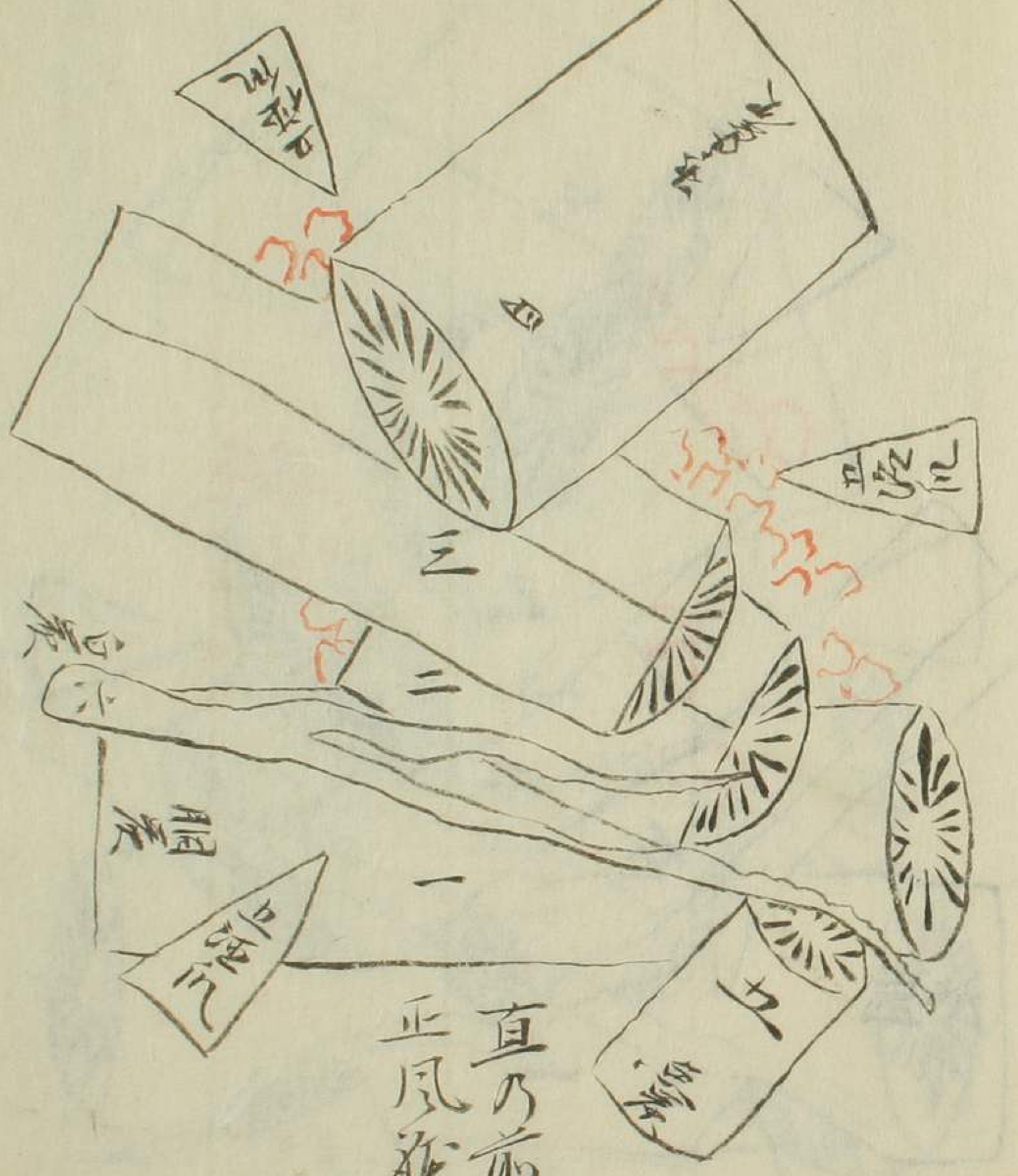
松ハ気をとられしか尾は月まてあるとハ是
されは是ハ是しかし事しもお見えすこまかくつまくりて
是尾為の尾又羽の一羽をとたまみ〻とまてま
白重是しかまとく隠の〻ハ見たるはし鷹の
猶尾中にても此白鷹の重に家の作るくハ宝
鷹の参り候まて来たし鷹ハ坊主の中にまて白鷹
の重き中に隠宝之ハ参禰の有る宝あまた能て
以後と尾にまて白鷹をもお中ほとて重宝也

一 鷹は足しても好き尾の尾の目をかくしたる蔵根なり
如し〻ハ重してもよき事也

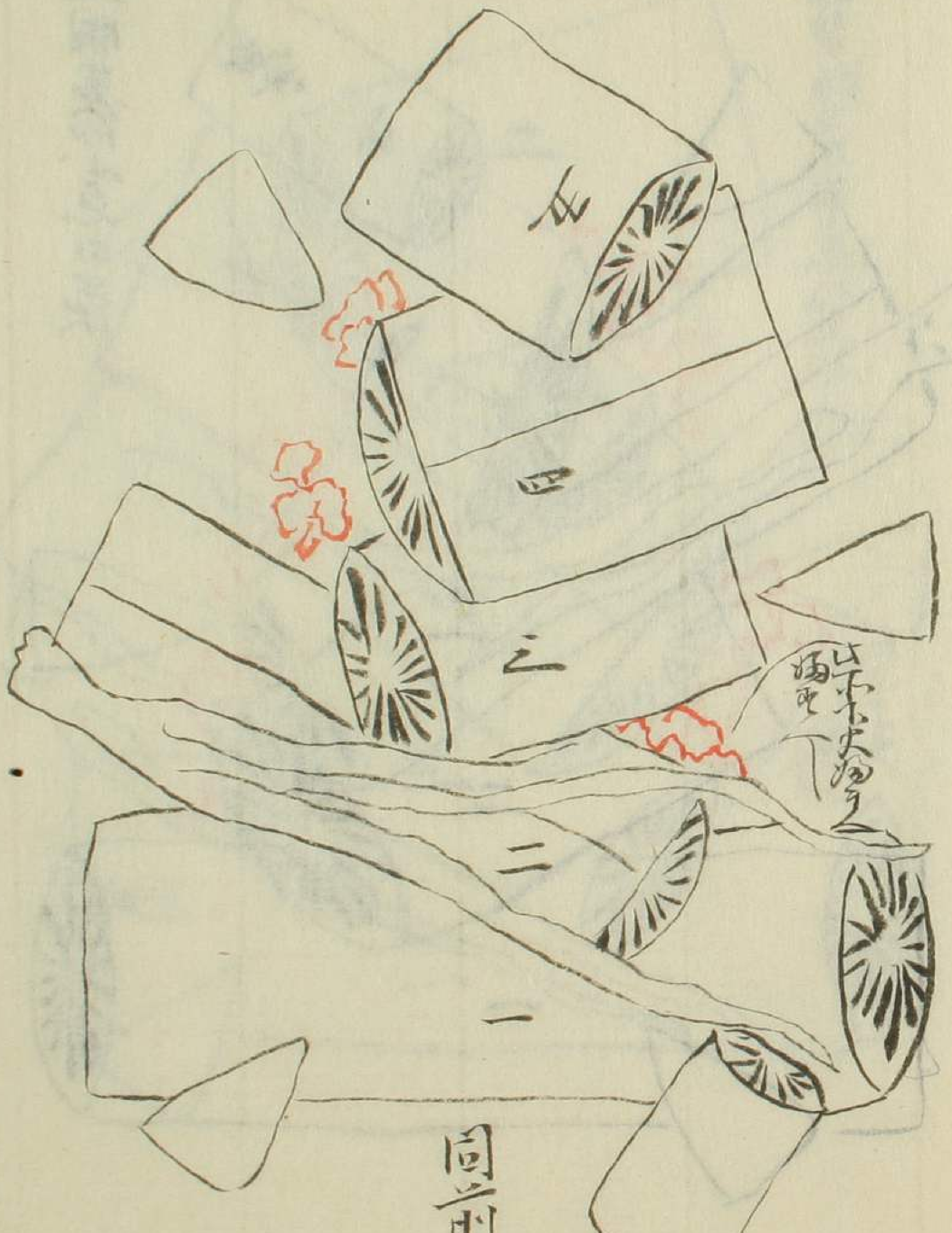
但炭所附合 右の人好ミ共に炭所ハ炭元
の門弟て其炭斗ニ成て但其の炭を取りや
しつつまに合用の炭を人々ニ寄るまて之の事也し
如くの也

炭形の事

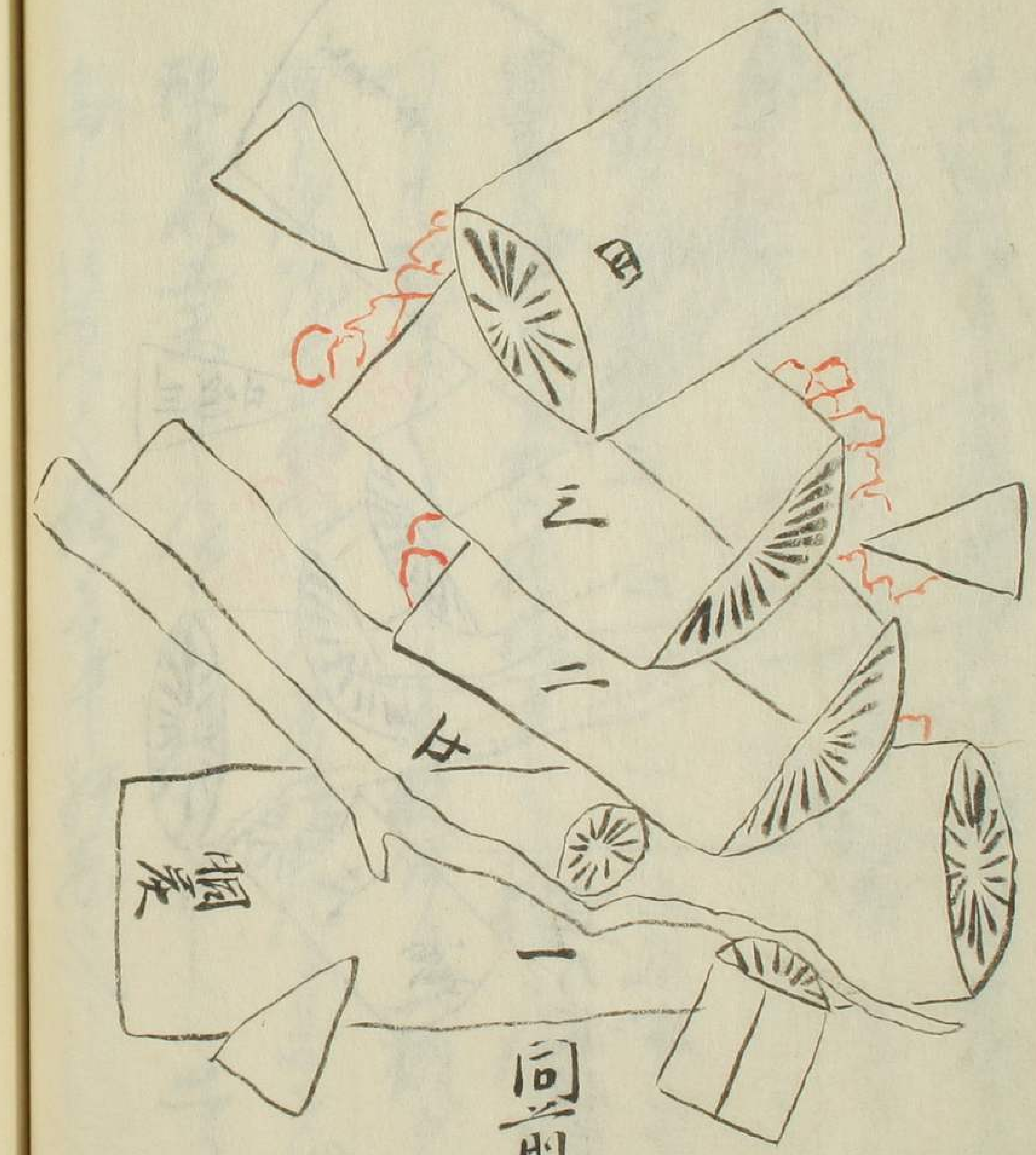
但炭の仕方ハ炭火の様能ように様々法有て定めなし
何しても形ならし形なして形作り一概の語ハべ
方は法能其勤にも為帯後尾ニ寄る処法ニ而
形と成工夫し炭と人気也やうなし炭を
為し仕道ニ而炭のを作ス




直の流胴炭
正風流の炭

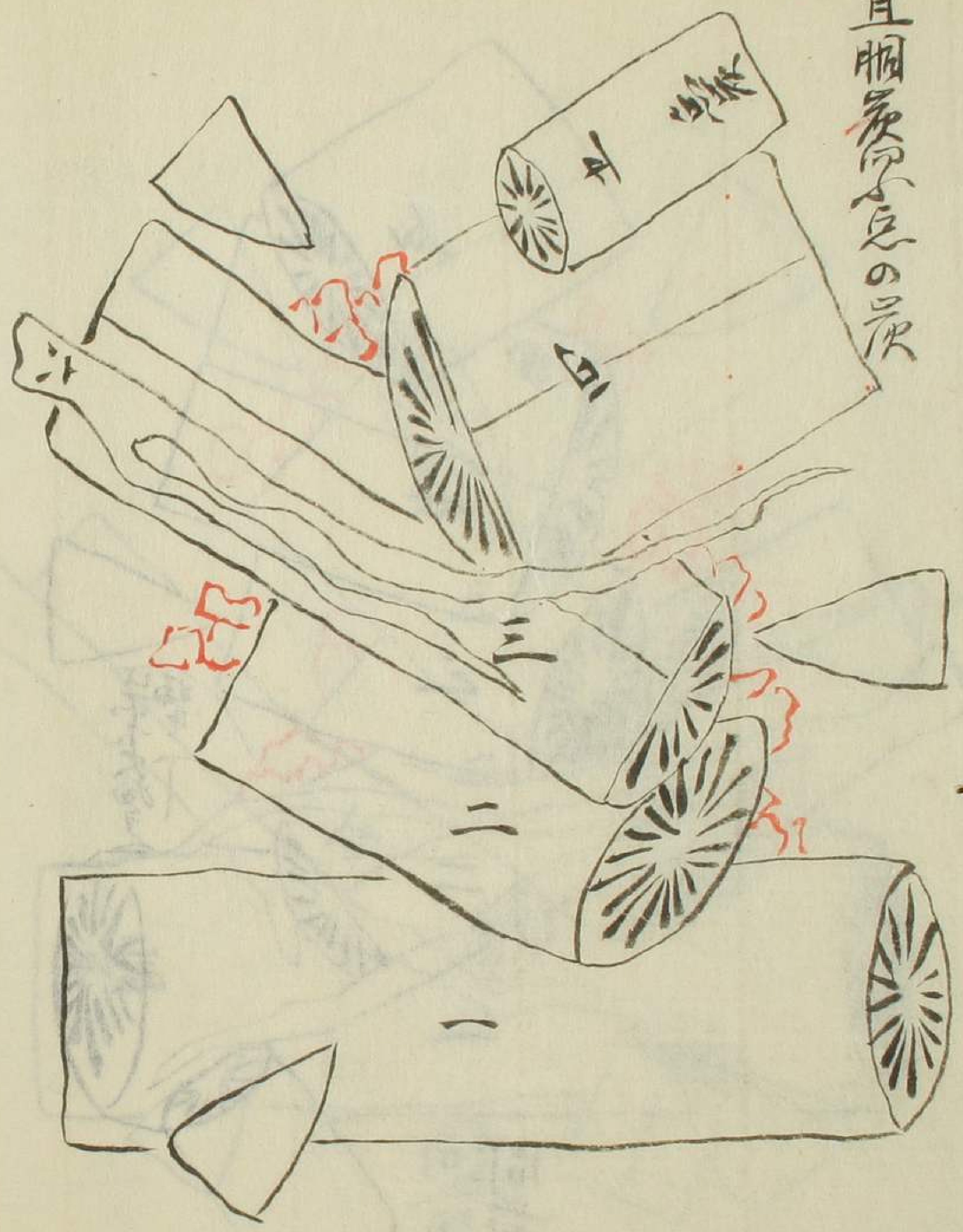



同前

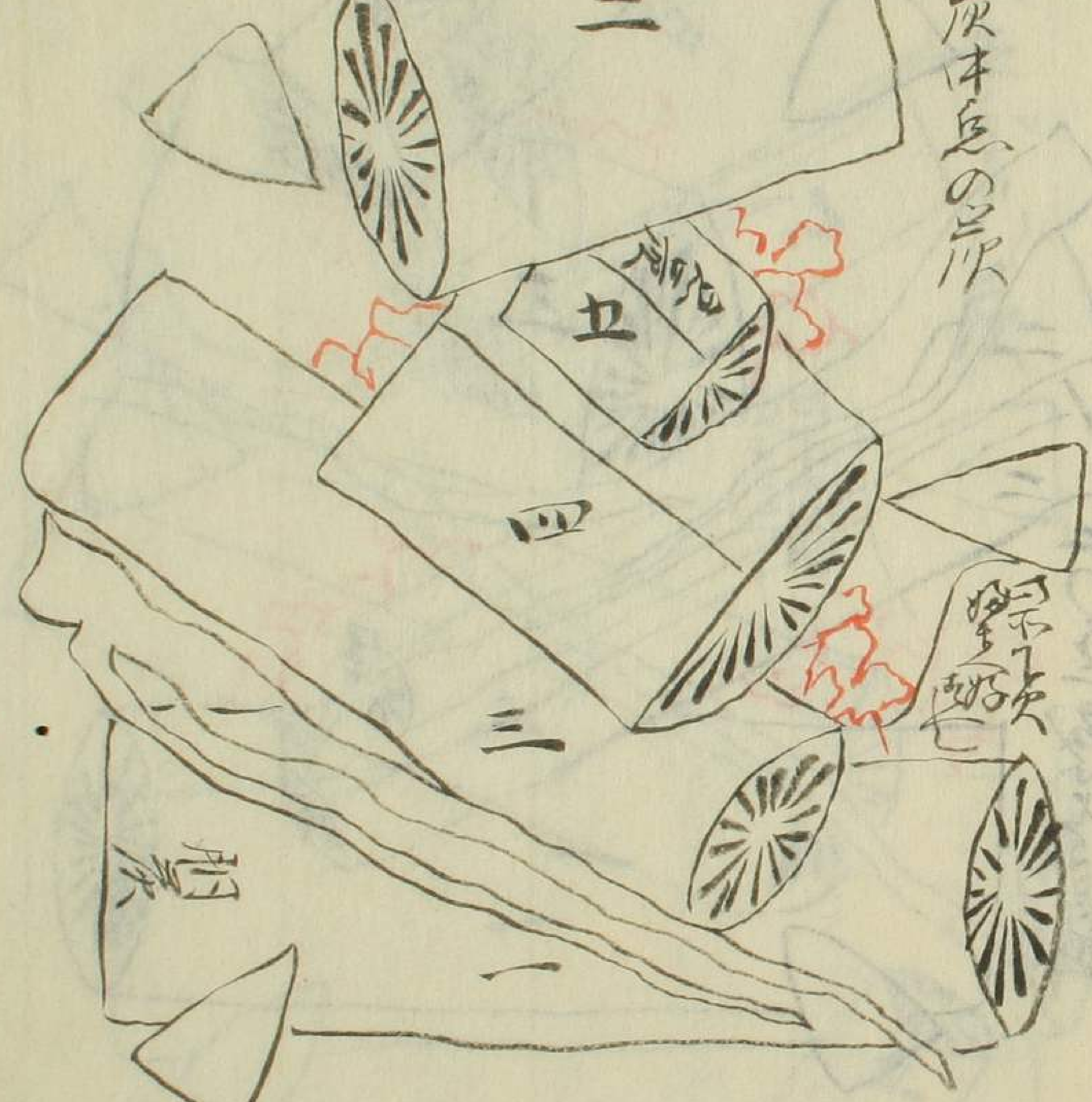


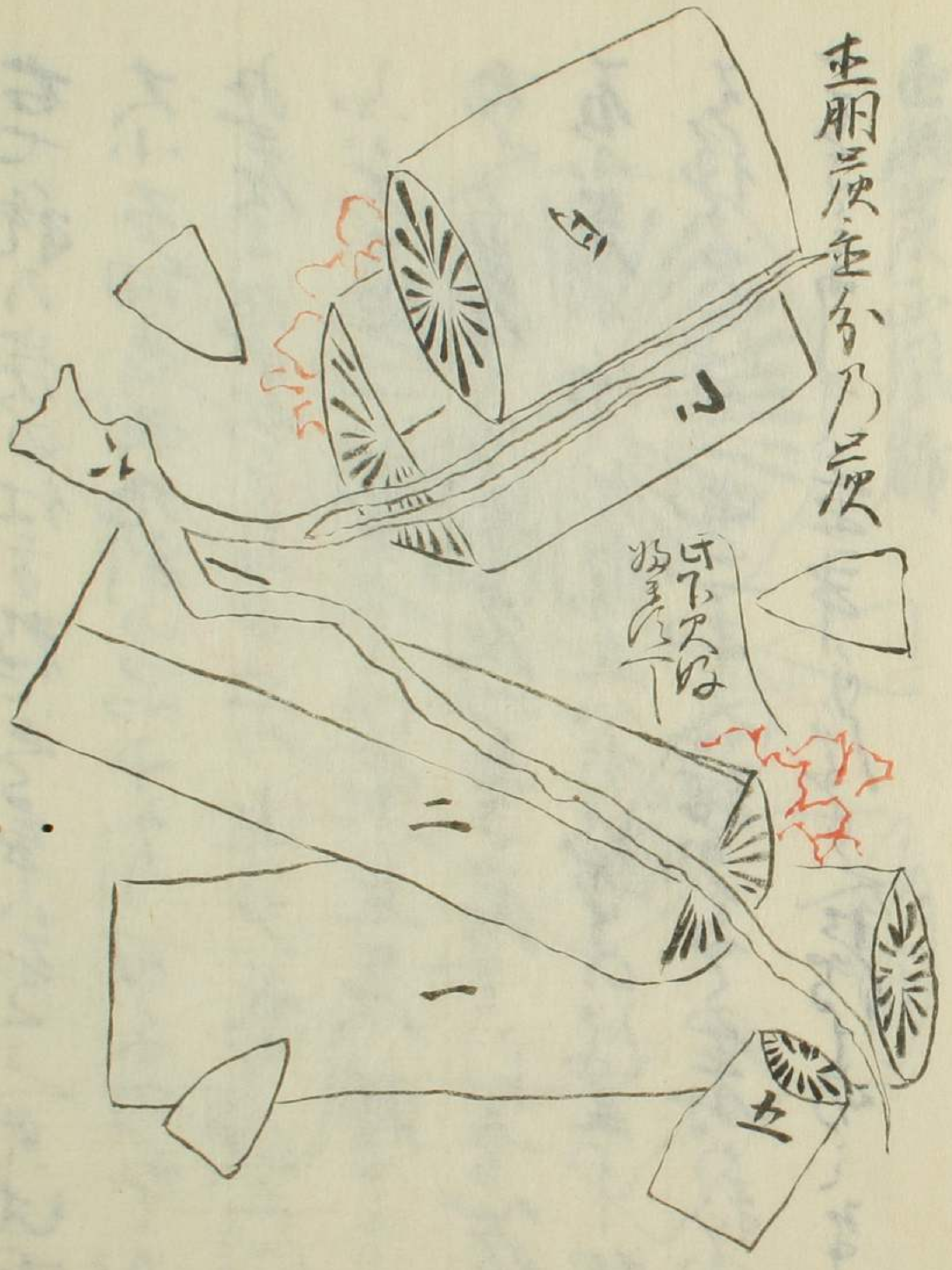

同前

直胴炭所之置の炭

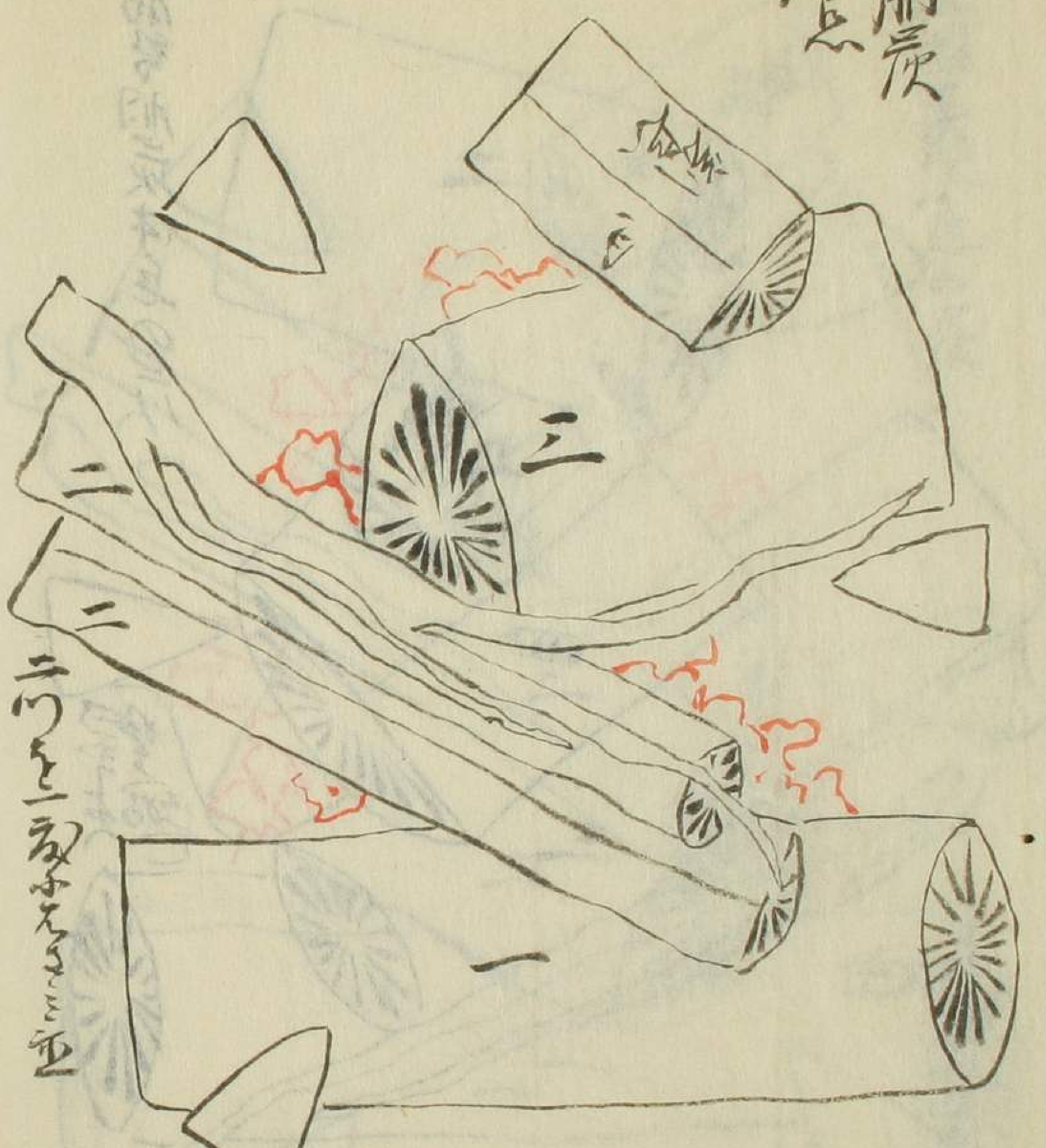



筋割胴炭中置の炭



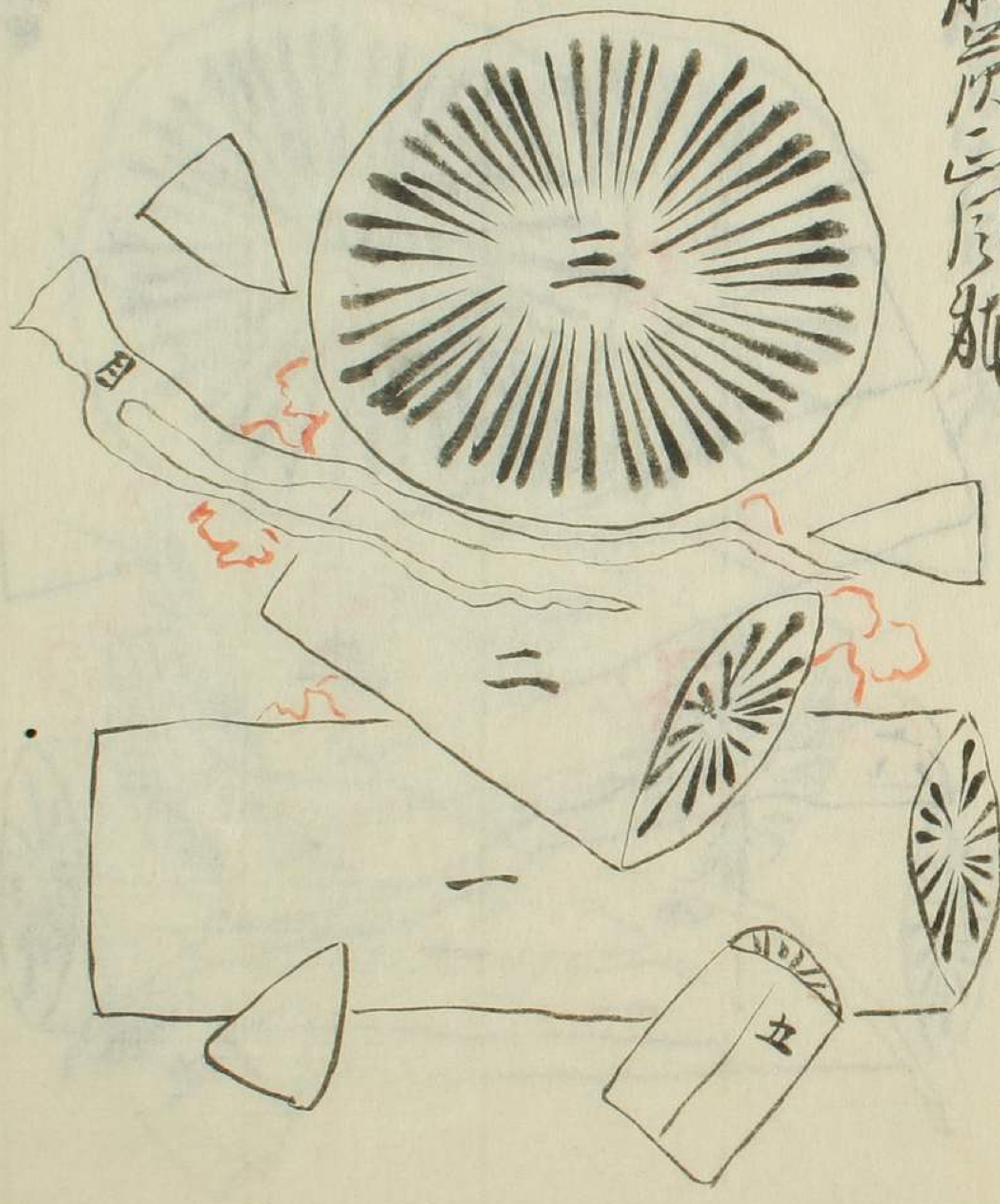



直朋炭

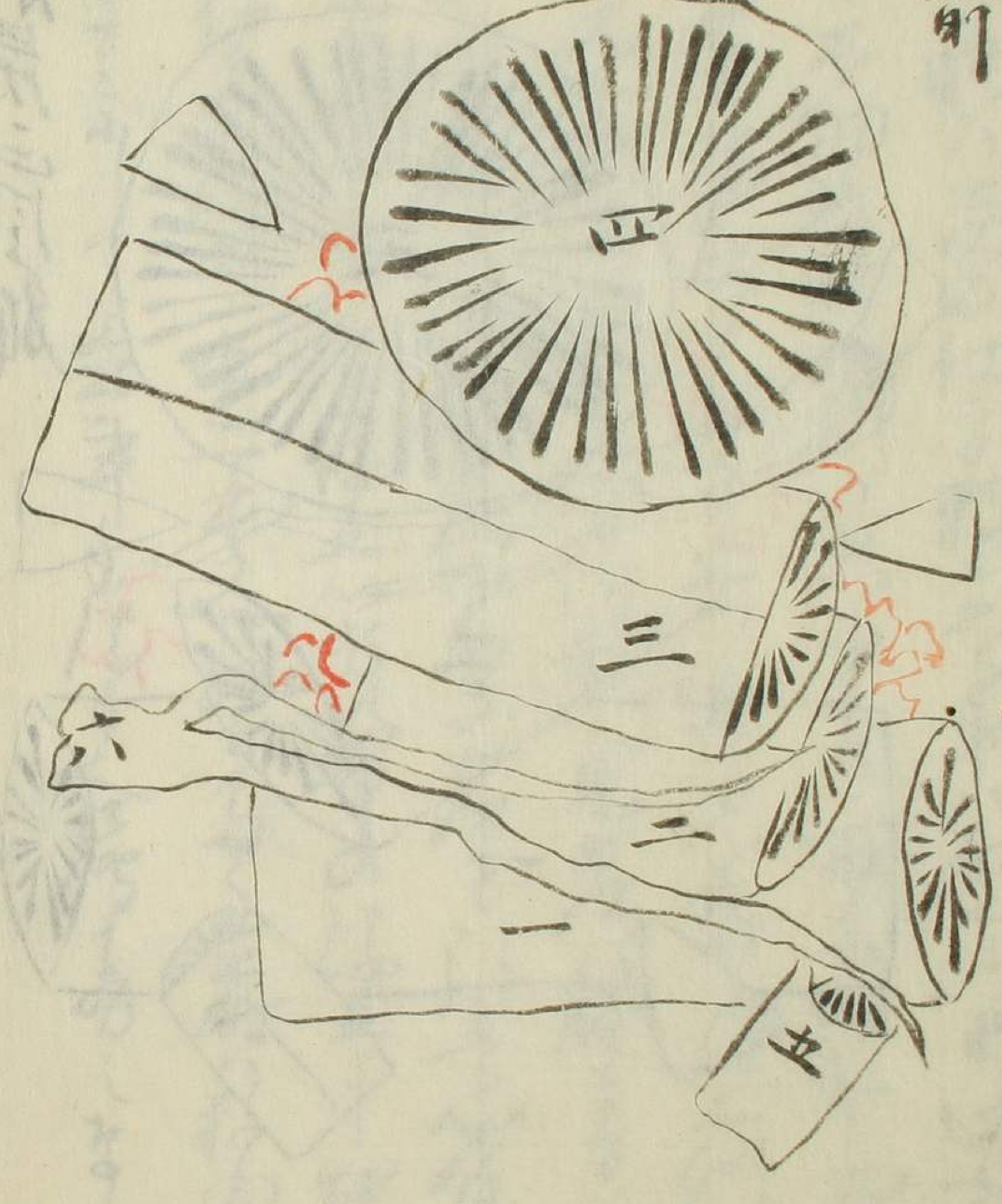


右七種の炭の仕方稽古之事ハ第一之心得也
大小太細長短丸割の不同あり 何れの所也し
然るに丸炭を持て二つ割 此炭を大炭と次に河並
ふくさ斗通し 割炭て胴炭 点炭構へゆる
枝炭は白炭とて胴炭と炭とつなぎ炭を引立る心得肝要
丸管炭は添炭て溜るに炭中の溜り手繕の
為に添る炭一本二本又は様子にて用ゆる事と
一定させる也して全く其座の随ひ事なり

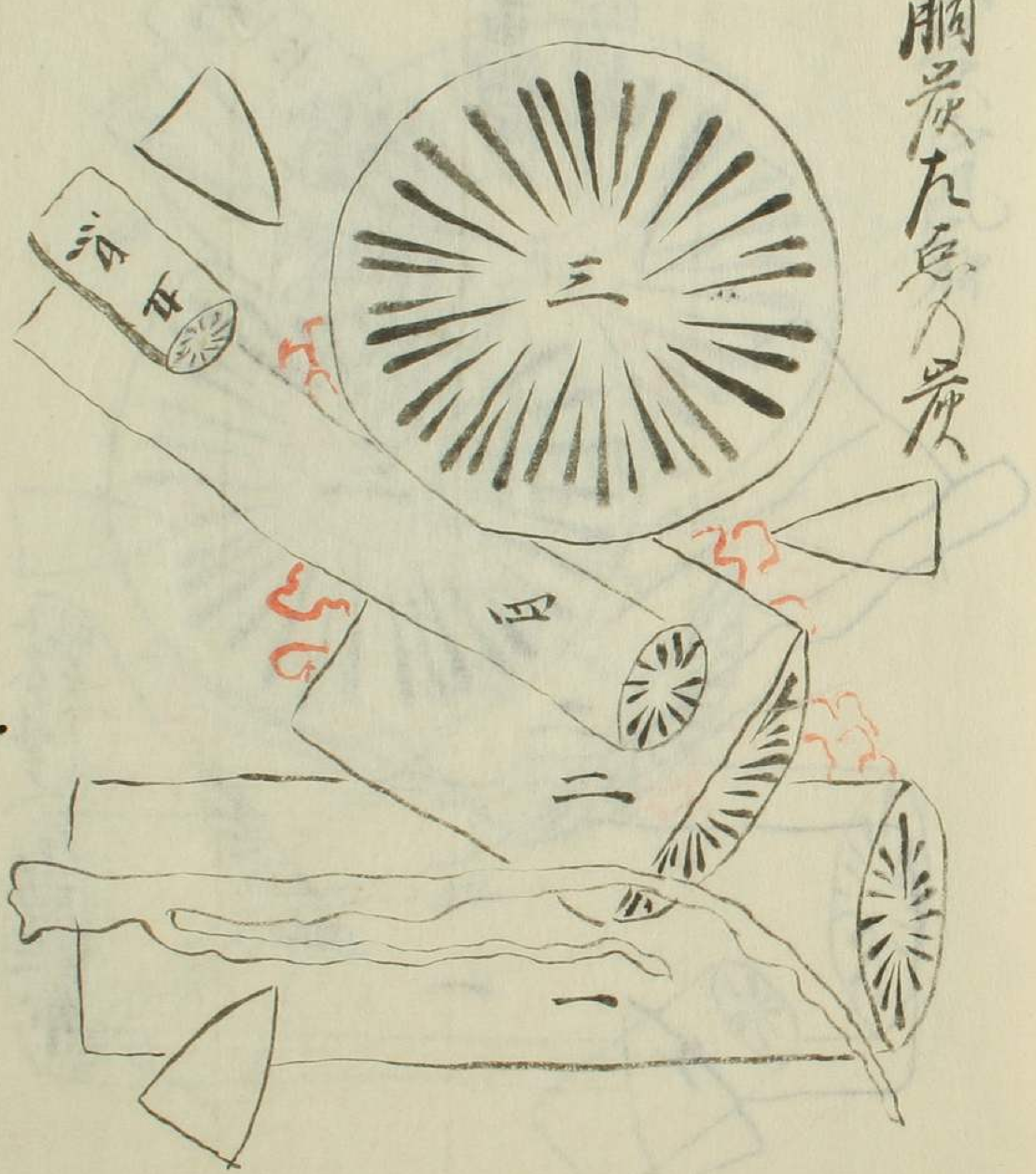
虫胴炭之風炉



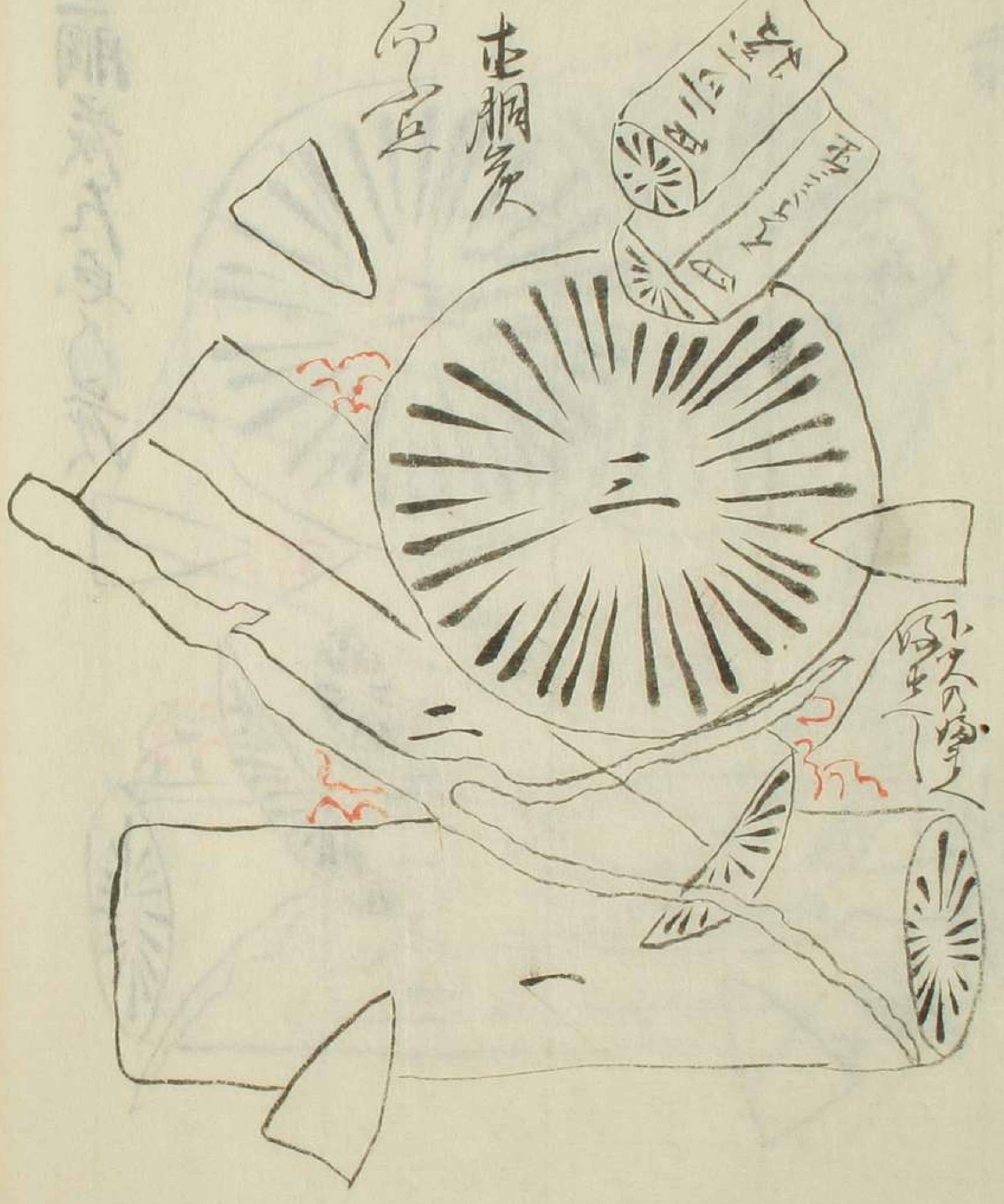
同前



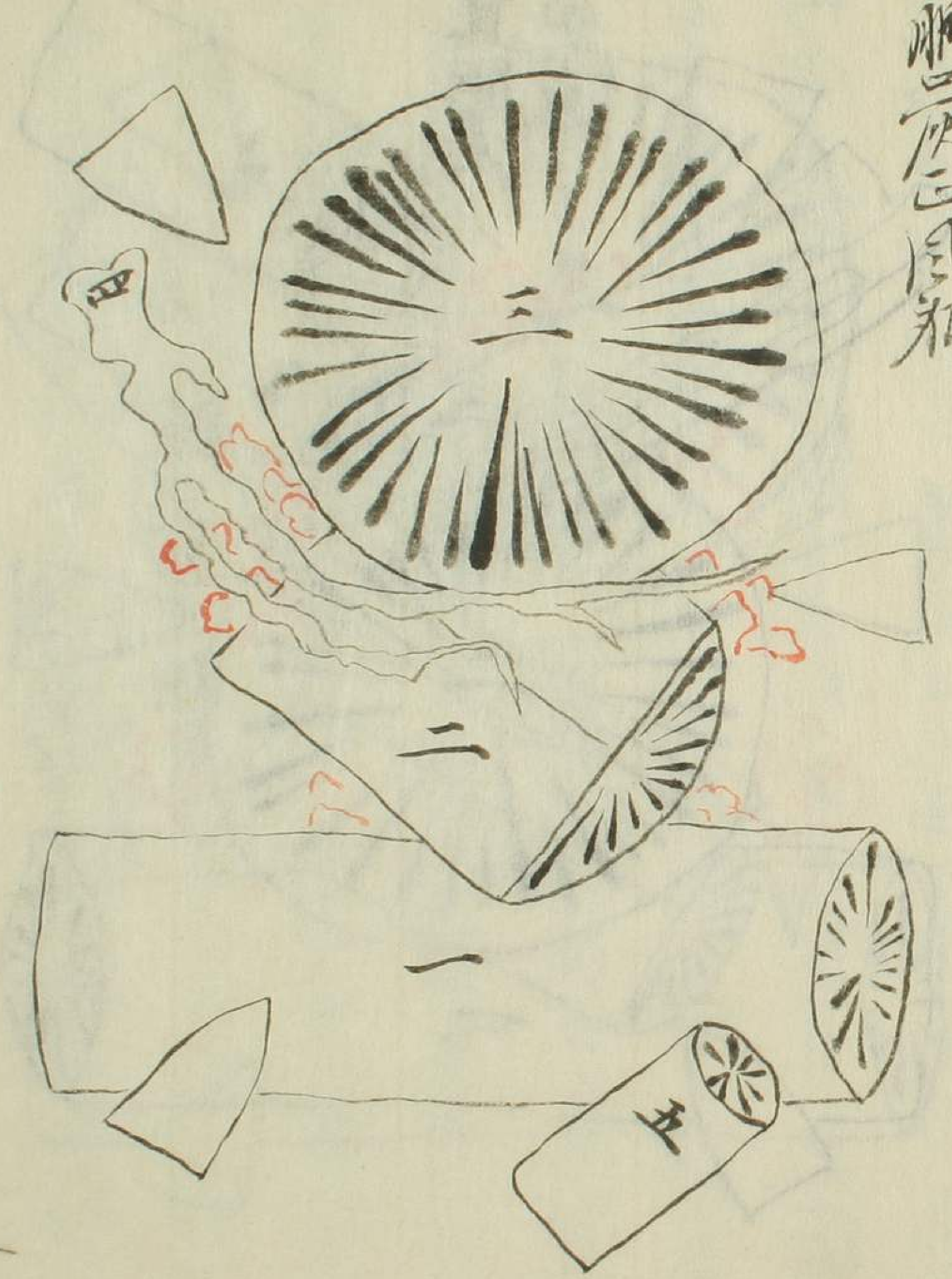

重胴炭丸毬入炭

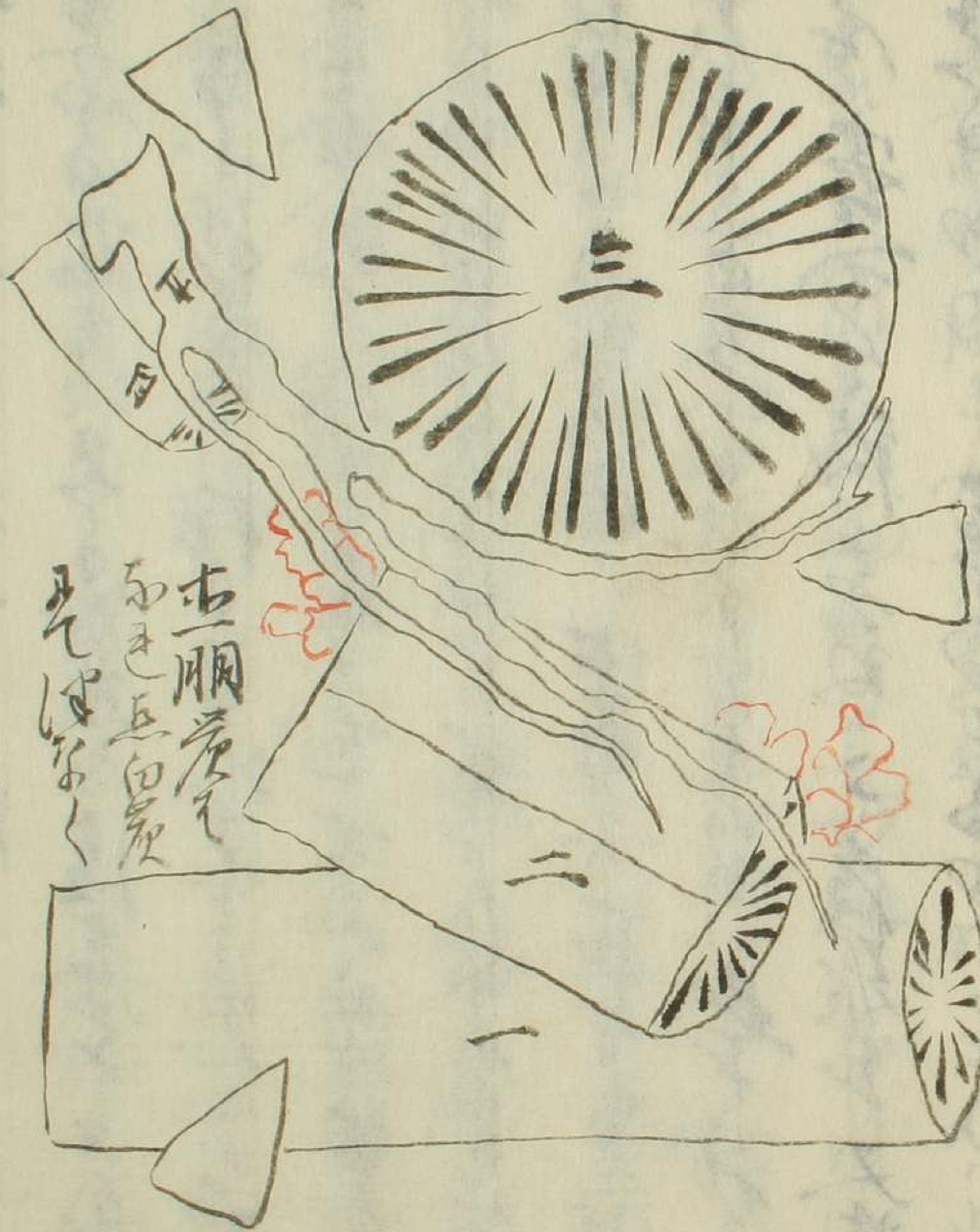


走胴炭
向ヒ



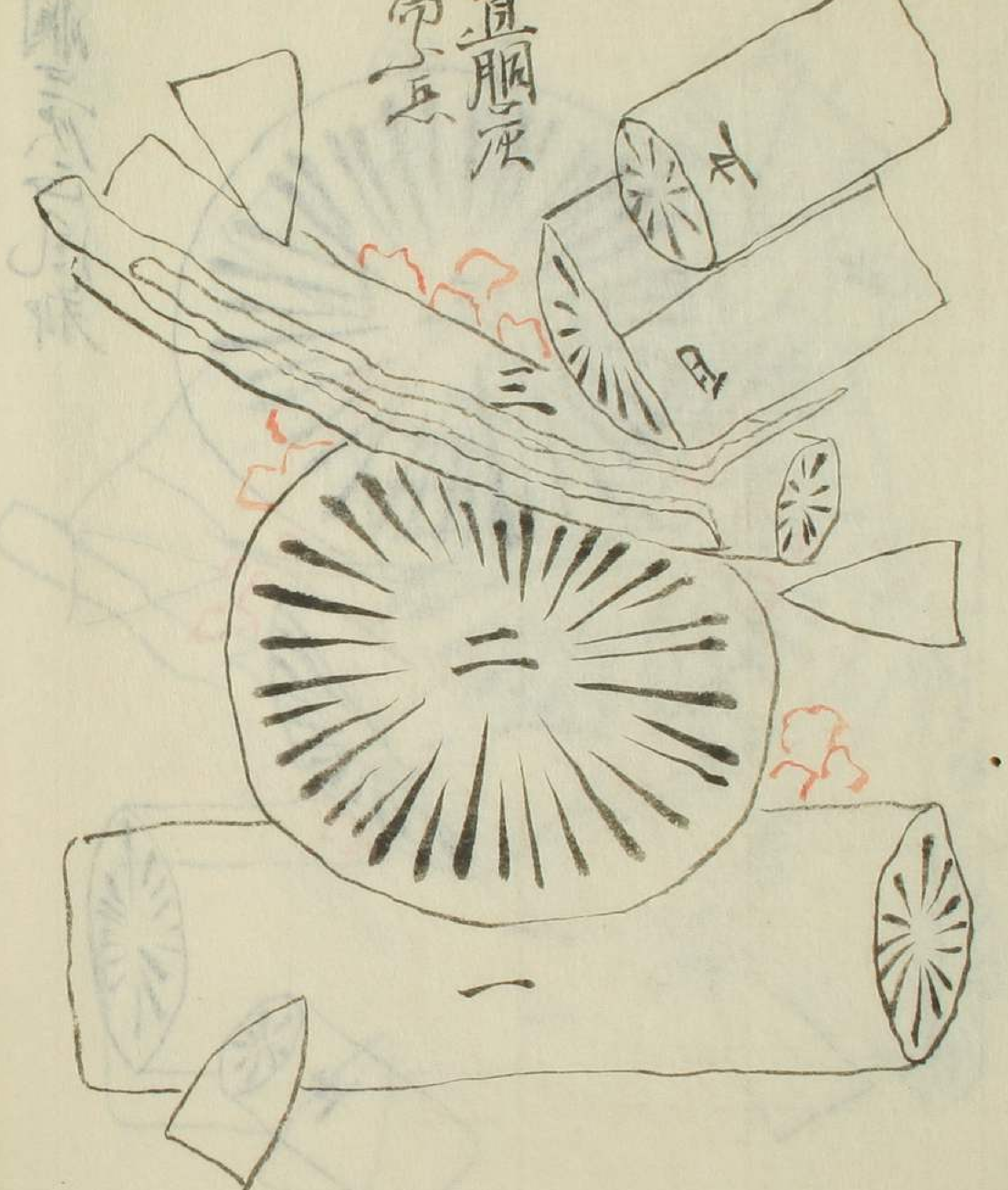

走胴四炭山風雅






直胴炭で
あまし点白炭
見てはなく

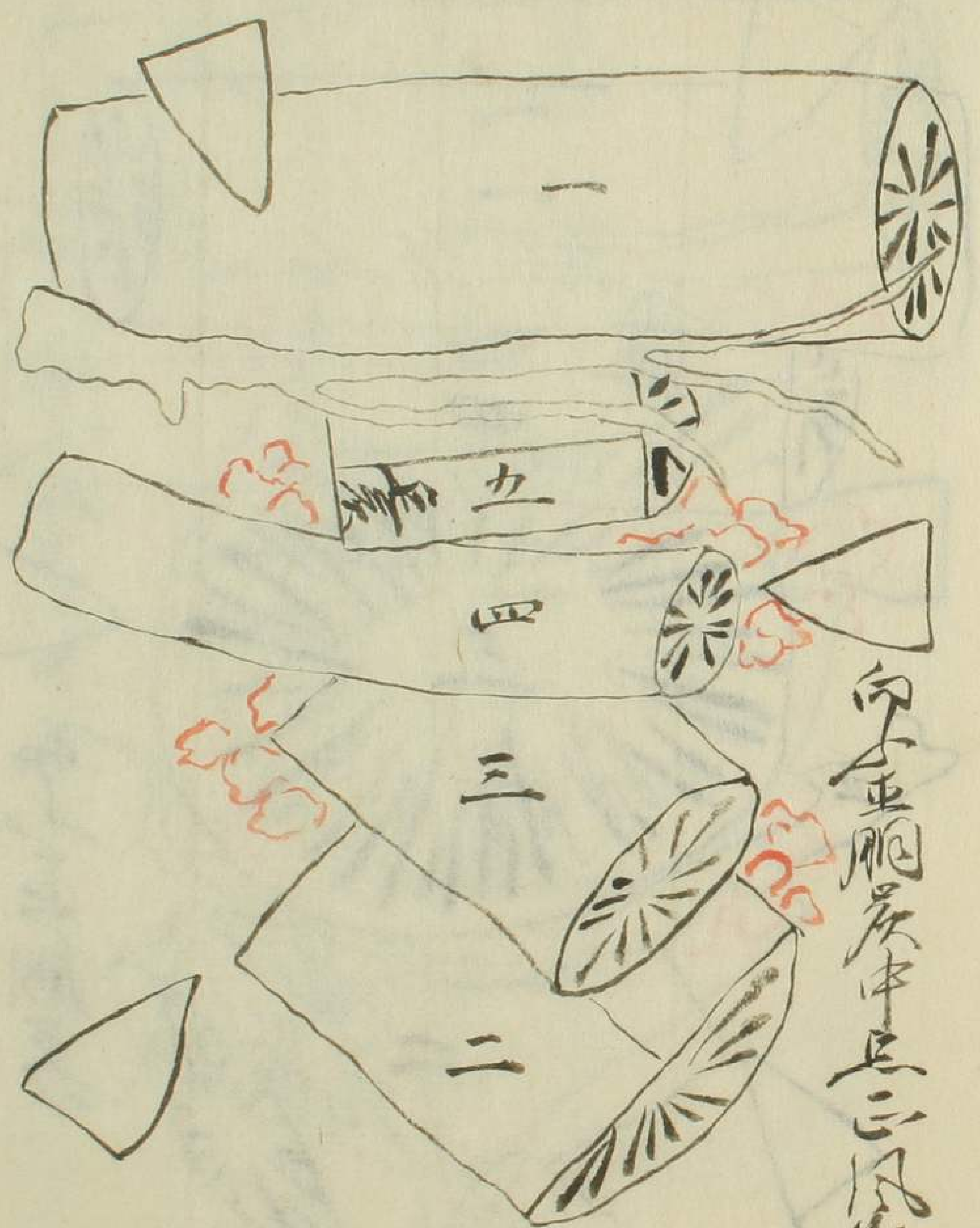
直胴炭
向点



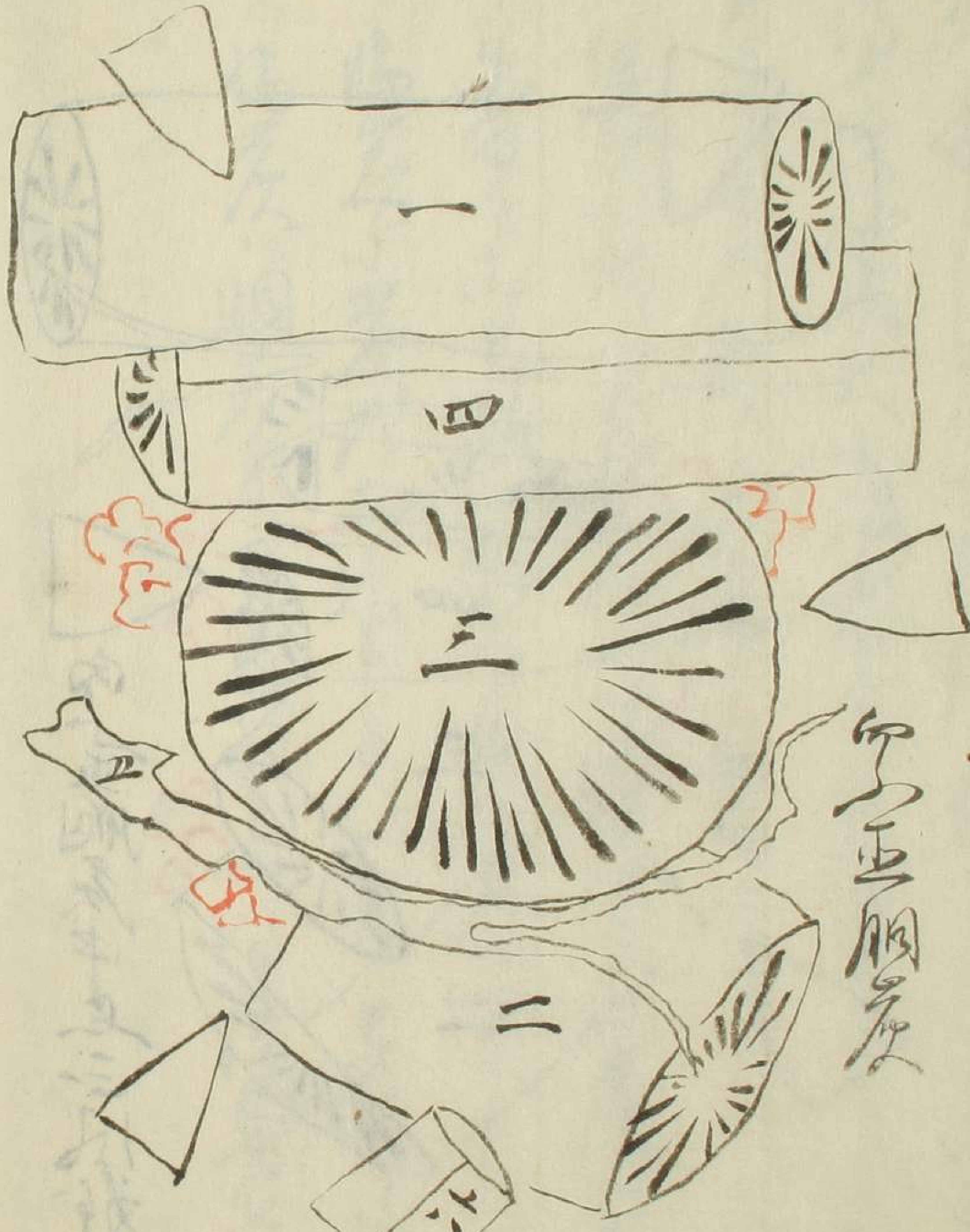
右七符の星ハ後兄也 神子ハ勝を定 後ハ勝
をきらす勝星ハ見る為物なり 後星を記先付
乃一人より神主の儀すべし 是又なにハ何にても
元其害ハ別ち記置べし 其星ハ其所也事
後々にも此星を必定成也 前より其星の次第を
今日の時代ハ又後星の出来より其星の時節を
おもひ合せ害ハ其星ハにあり 然て神子ハ星
被成ハ害ハ其被成の後ハ是非に 又勝星
を見るなれ共なき星を記し置候

其害ハ其星後々に大事の為物也 何にても是ハ勝星と
神子ハ定を後の星ハ預置事也 かかる所の事何なりとも
乃也 ホシハ大ニ少ハ此者の相違なきなり 人元を
入組 又初ハ勝をきらひ人ハ後に定て神も
後ハ勝をきらふハ大小何にても神ハ後ハ勝を定なる
其者の外ニ 又其用事の次第鬼神の福ハ勝
を定めて 後ハ勝をきらひ自然の星ハ神も
害ハ其星以後も出現して人ハ福ハ勝を定
きらすまじや

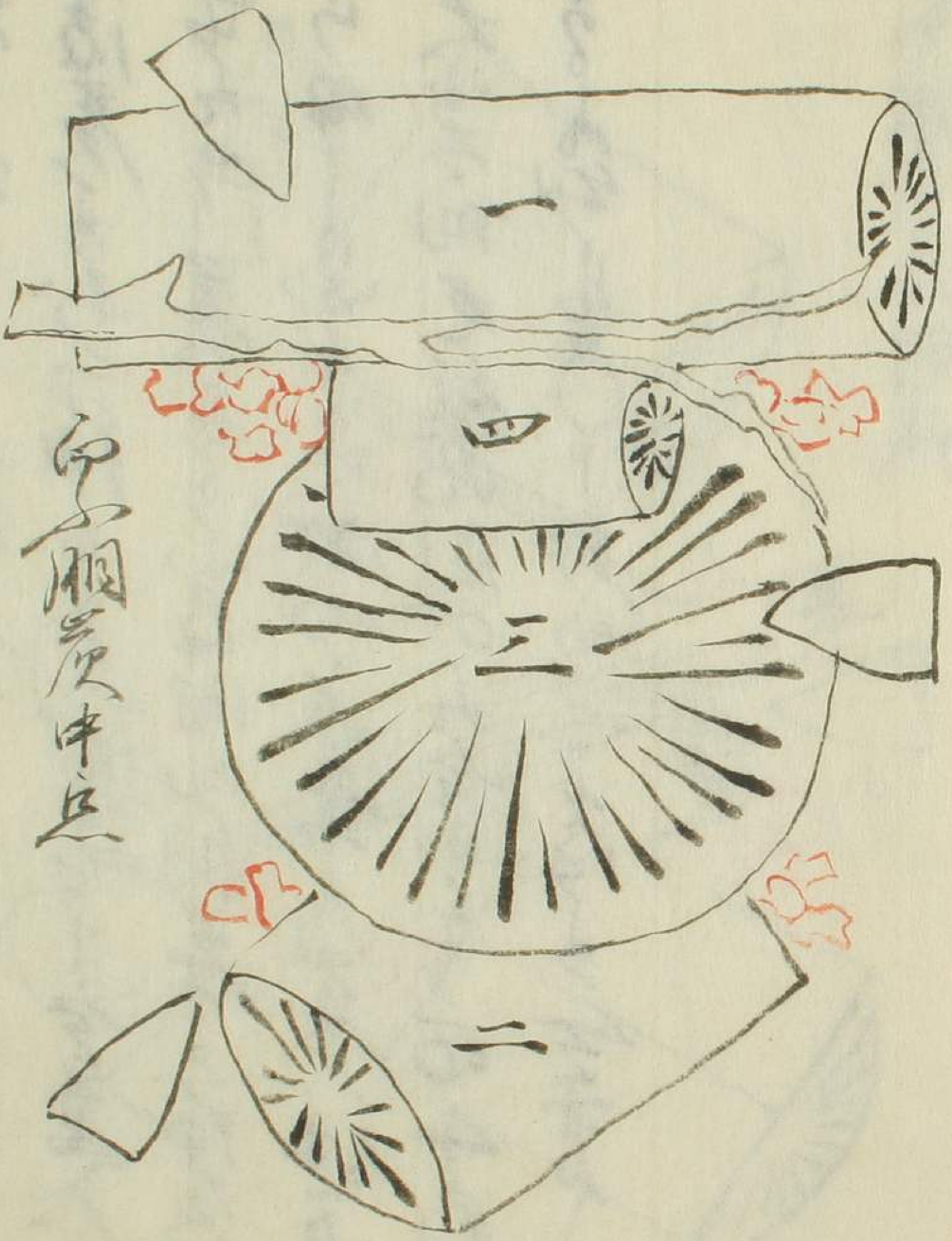
右様の後炭ニ而も仕方相叶候事ハ当流ニて
御流儀ニ以ても炭大小寸法書を極め置候事ハ格別
其上両手の形にも少し違ひ有り
但大小作りより出候の図臨炭と胴炭ニ分ケ
置事ハ当流ハ此一形の炭の外ニ中をも用
臨炭ニ炭の出来候得共ハ有之きとも有之候得共
臨炭ハ胴炭より外ニ心得事肝要也




向ニ並胴炭中長三寸風炉



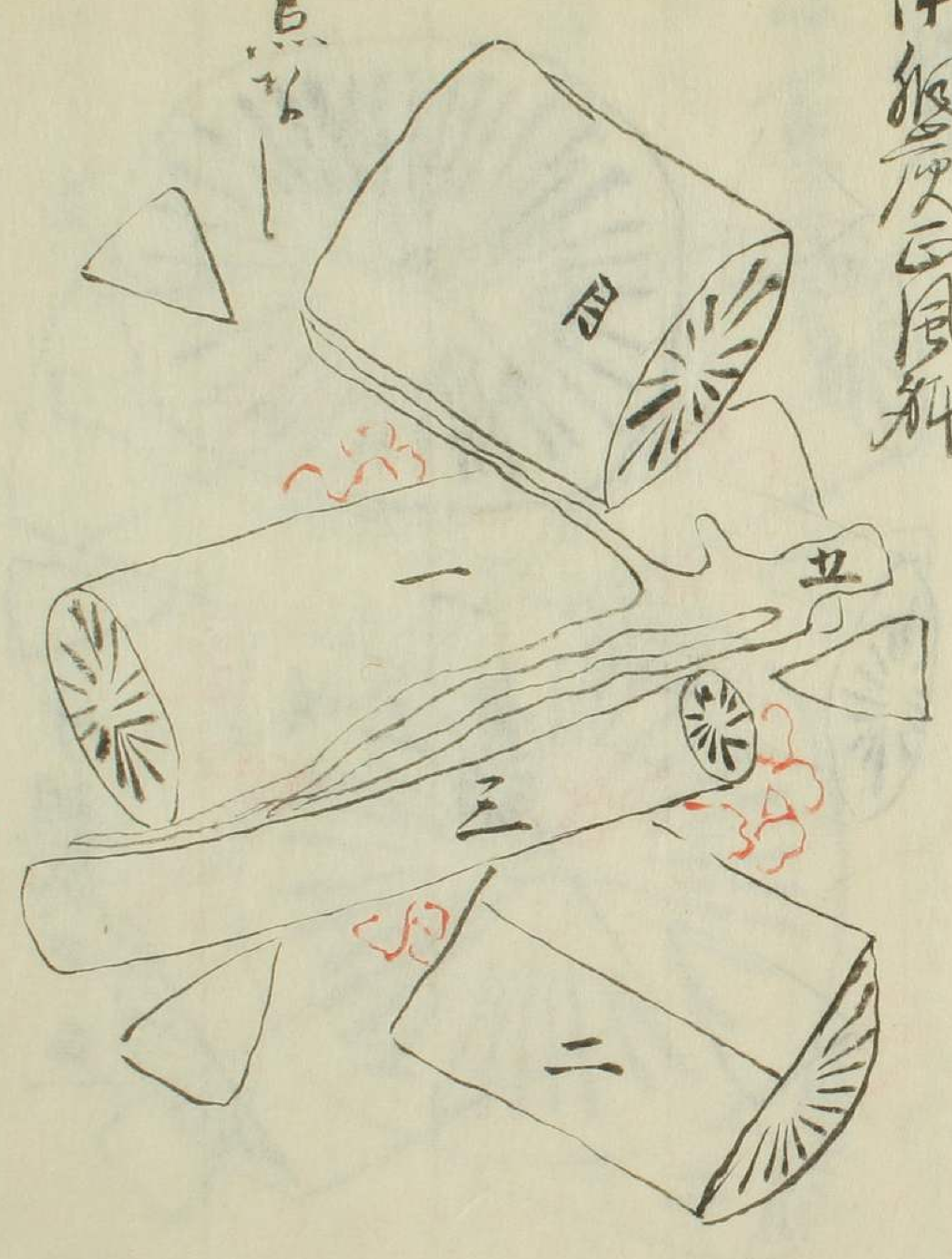

卯ノ正胴炭

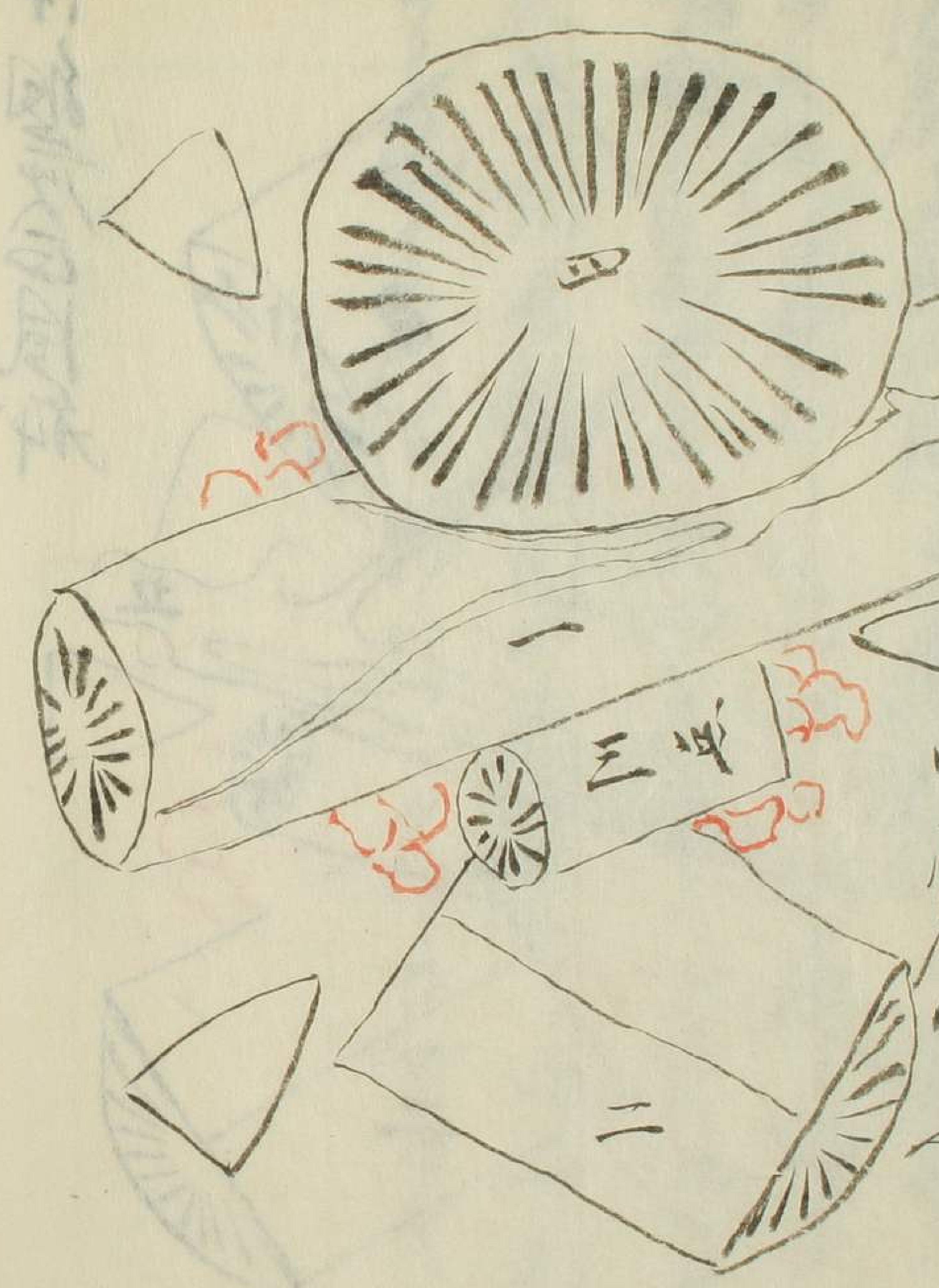



卯ノ胴炭中立

右之類ノ炭ハ向胴炭又ハ向胴炭抔の炭ニ違
後炭ニ添候ものニ付キハ先ツ其通也 今記
置也 此炭ニ及時向胴炭ニ添候仕方有之
候 尤も常ノ炭ハ此外常ノ炭ニ仕候事ニ候
大小ニ胴も組候割の五分より一寸の形を出
ス事也 ○ 但し胴炭ニ添ル事也

中胴炭之風情

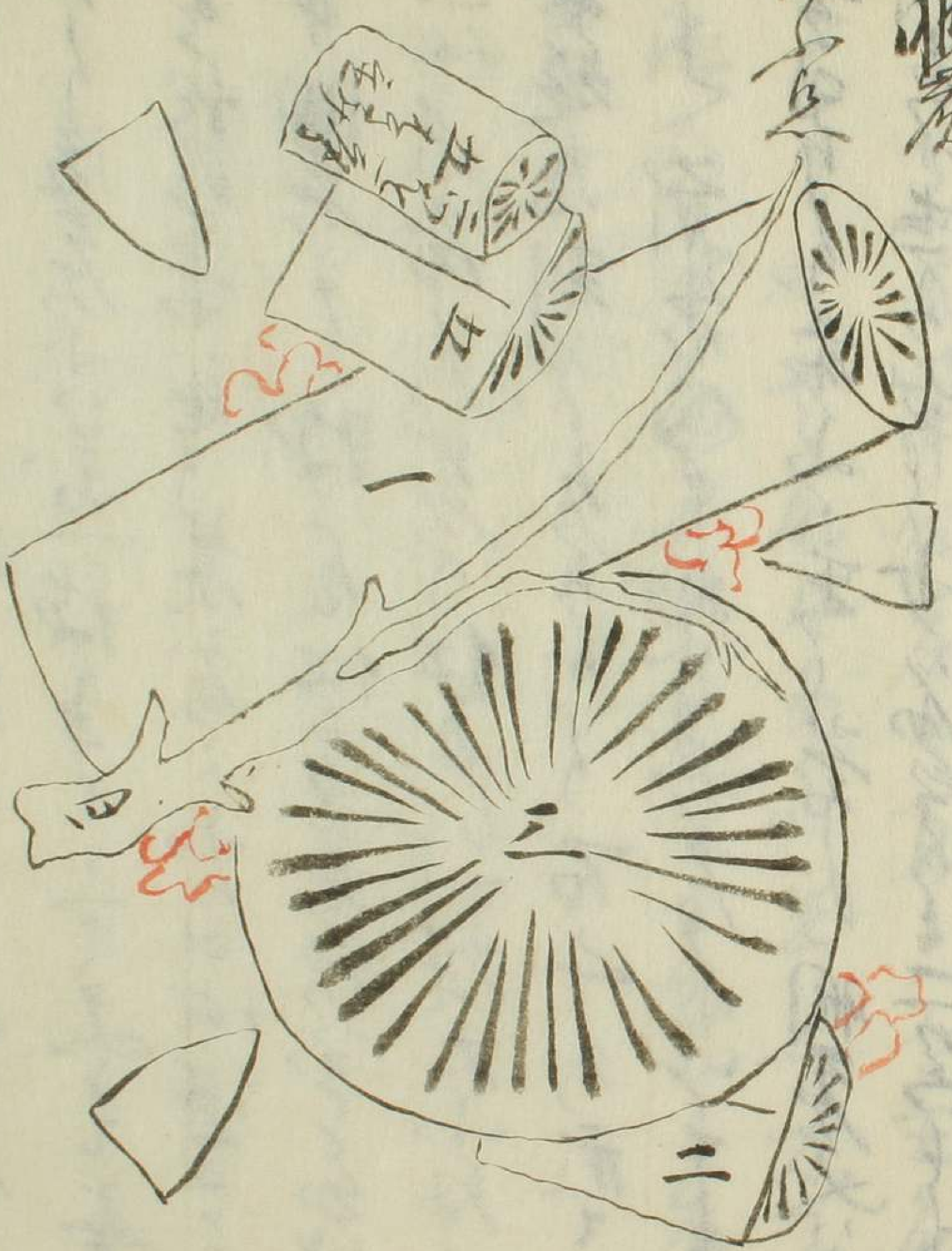





中個炭中立

中個炭

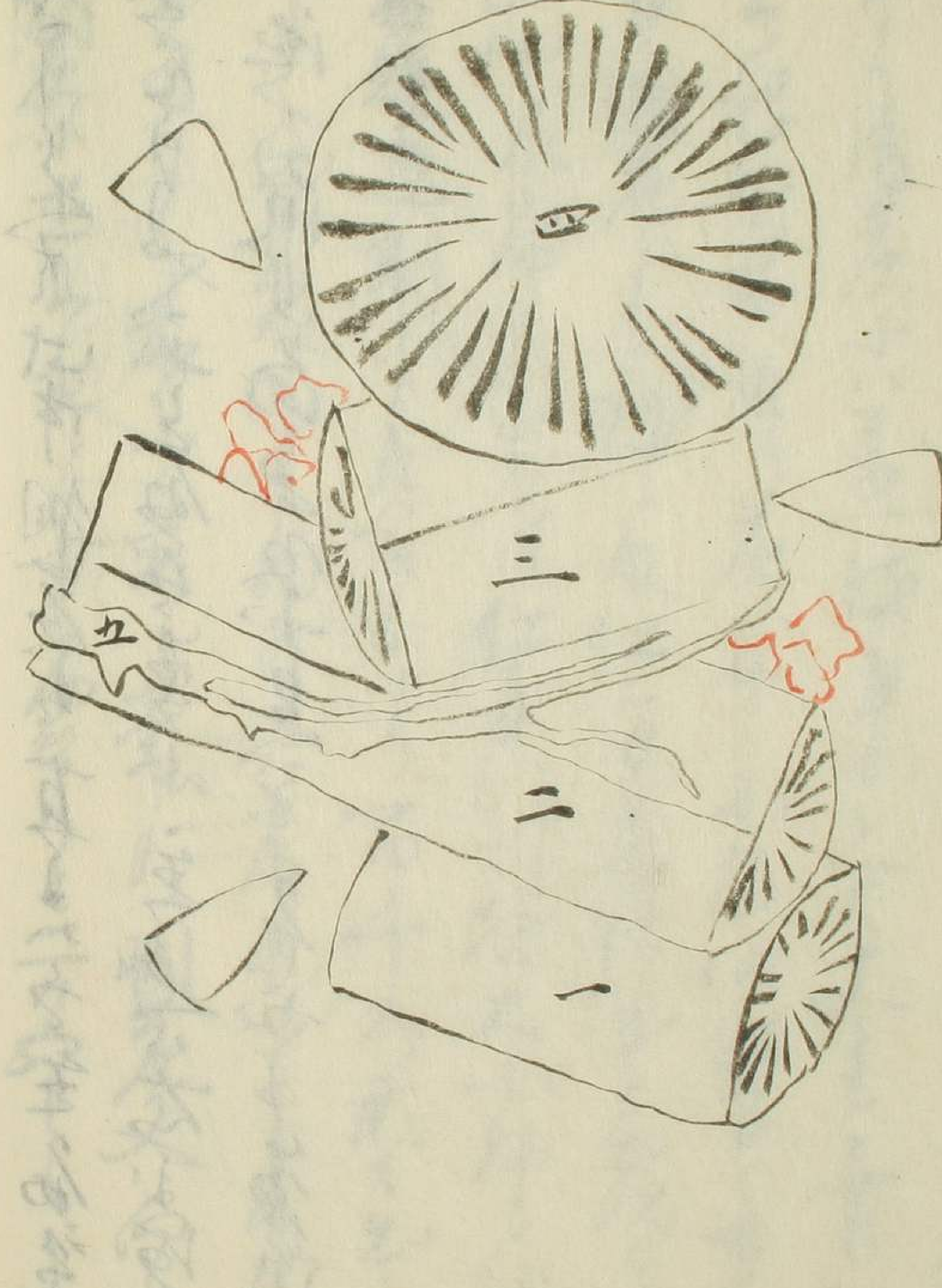
全立



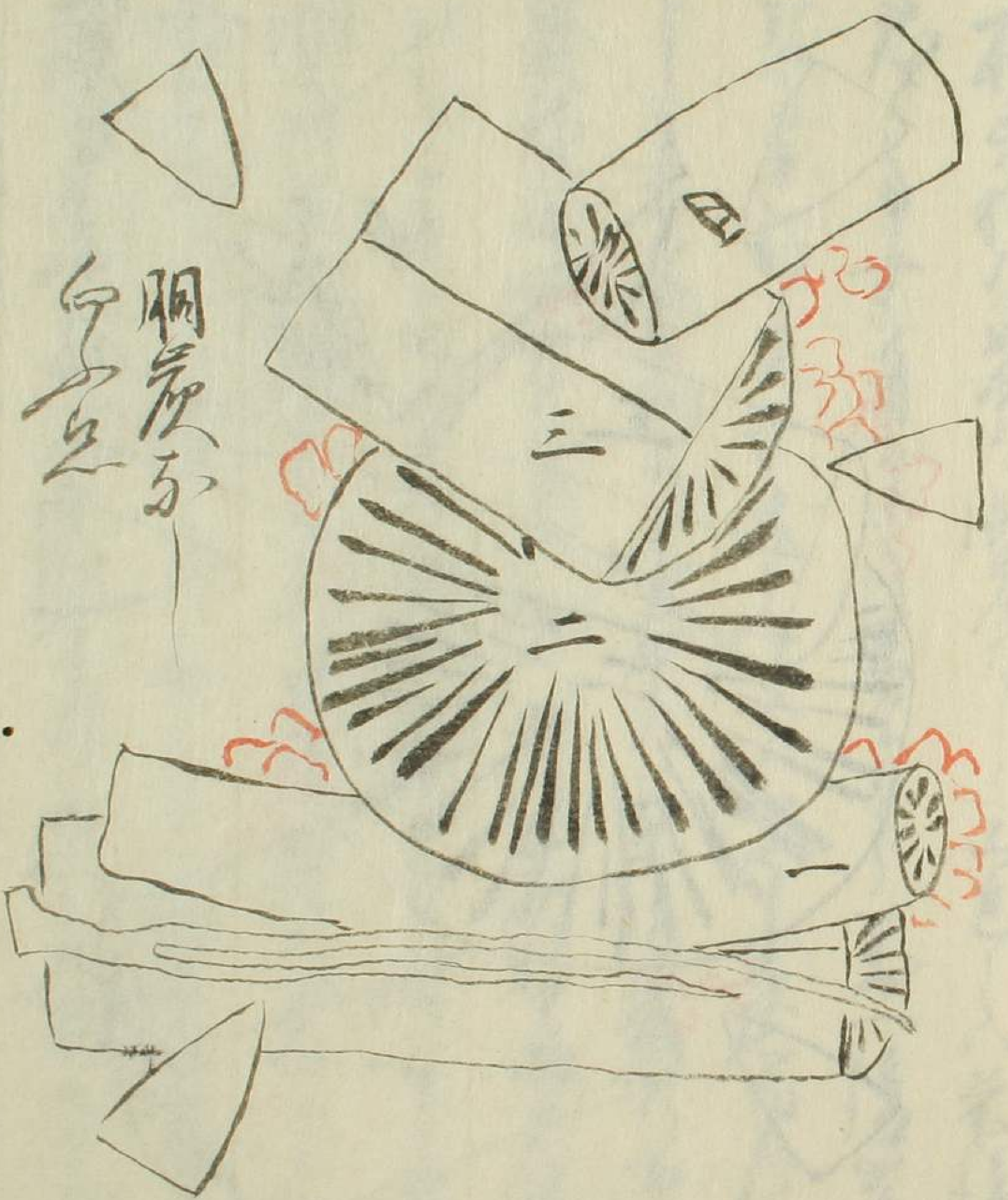
右二箱の炭ハ中 胴炭也 ときて初の炭ニ常
なり後炭ニハ第一続事も えて まも 有之
く組炭の炭ハ遊り炭ハ後て 小なく 仕方を被て
中胴炭も 脇ニ 夜 仕方 遠慮 有之 [illegible]
此心にて 常の炭の仕方に 一段 大小 雅と 細
工類尤 割の えんかり 百千の形を出の
やうに 之 具外の [illegible] ねふ 公なふ いつれ
三月 常にて 重て 常の 胴炭 大ハ 向ニ
胴炭ニ 重而 重と 廿ハ 御 [illegible] 二品も 小

いつしも 此中 胴炭を 直ニハ 三重 御 [illegible]
重ねのり也 二つを 底ニ 無ニ 重て 人ハ 大ニ 取り
出池の 形ニ 置 [illegible] とまれかし 御 [illegible]
無其のうちのり

胴炭なし二風爐

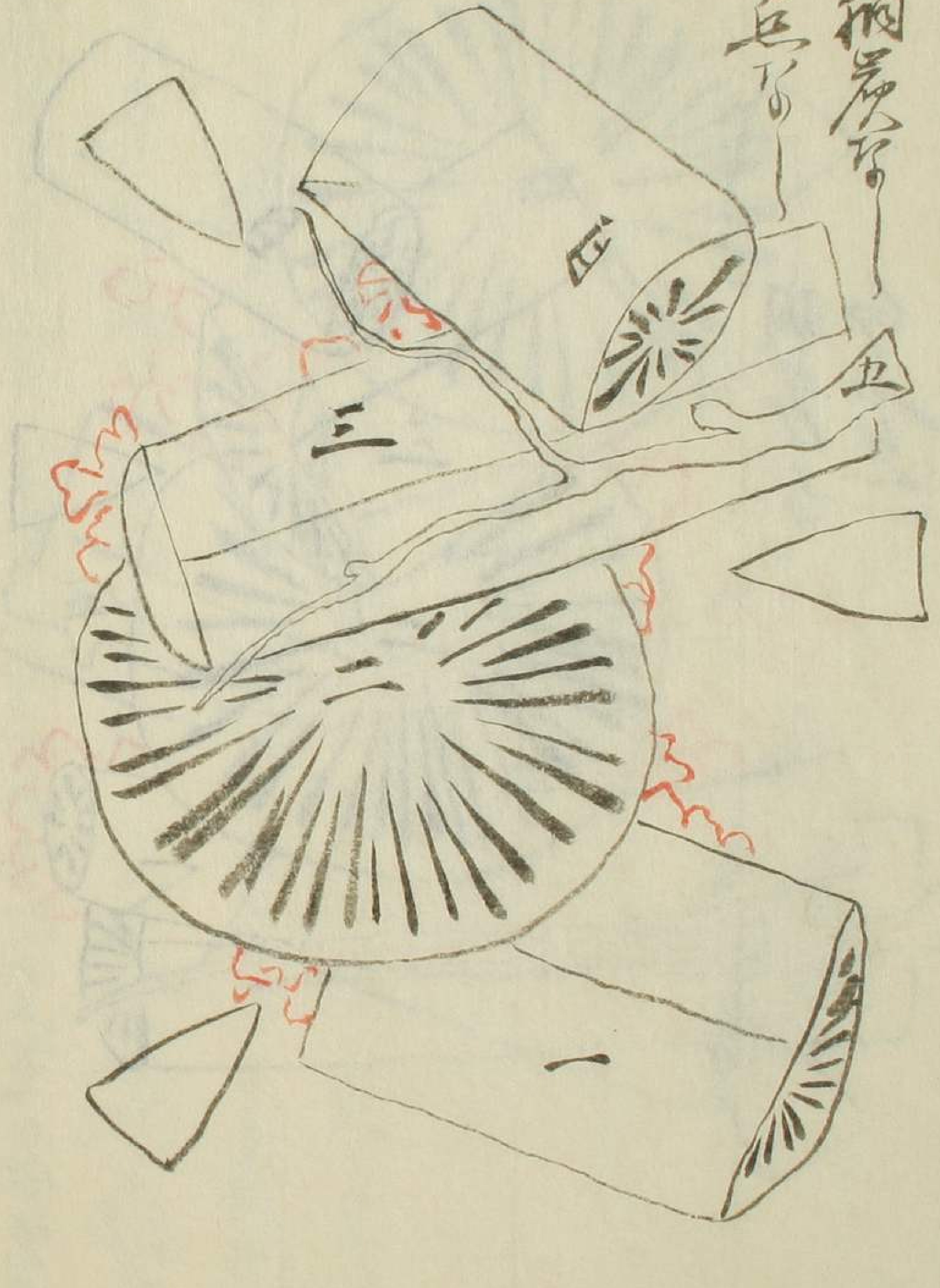



胴炭有
風爐之



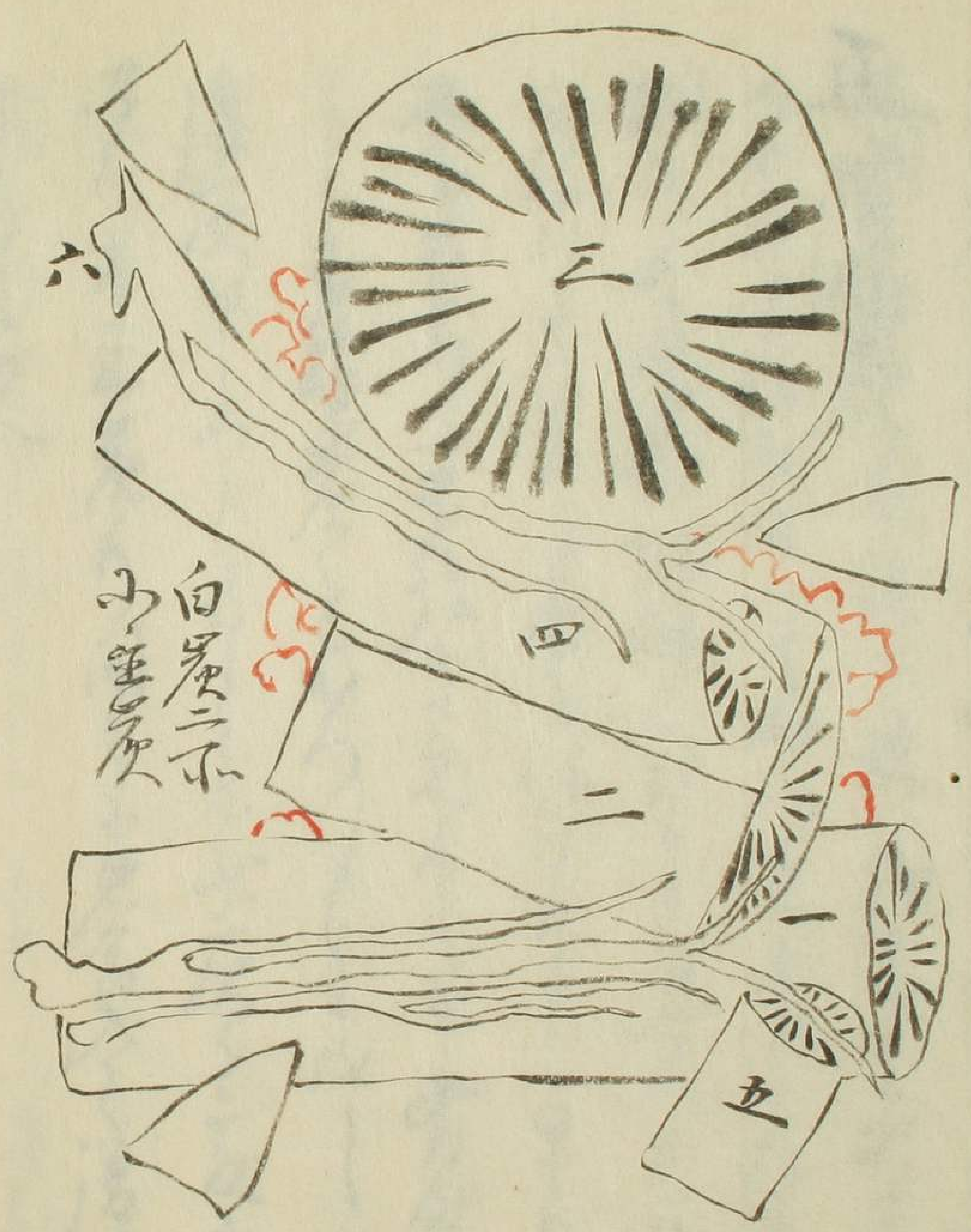
右三種の炭を胴炭としてハ（五分）長さ不足ハ茶埴とする
浅くしつらへむつかしさなるへし　先一番炭に胴炭
なくてはかなハす候　大炭ハいつも延へに宜敷
よろしくなき物也　唯昔ハ炭深く残り不申文
炭残り不申様にて又一番炭程過の胴炭を
入れなから是にて附合一通り也　是は時により附る事有之
胴炭ハ去年炭にもつゝて炭を一掛入て終に炭を
胴炭なしに浅くしへて胴炭なしに
炭はたくさんに流し入　ぎっちやうの大物にてまとめて仕方
炭使ふものもせんかたく六寸小炉にて長短見計

胴炭なし
丘なし



直
茶憫戻

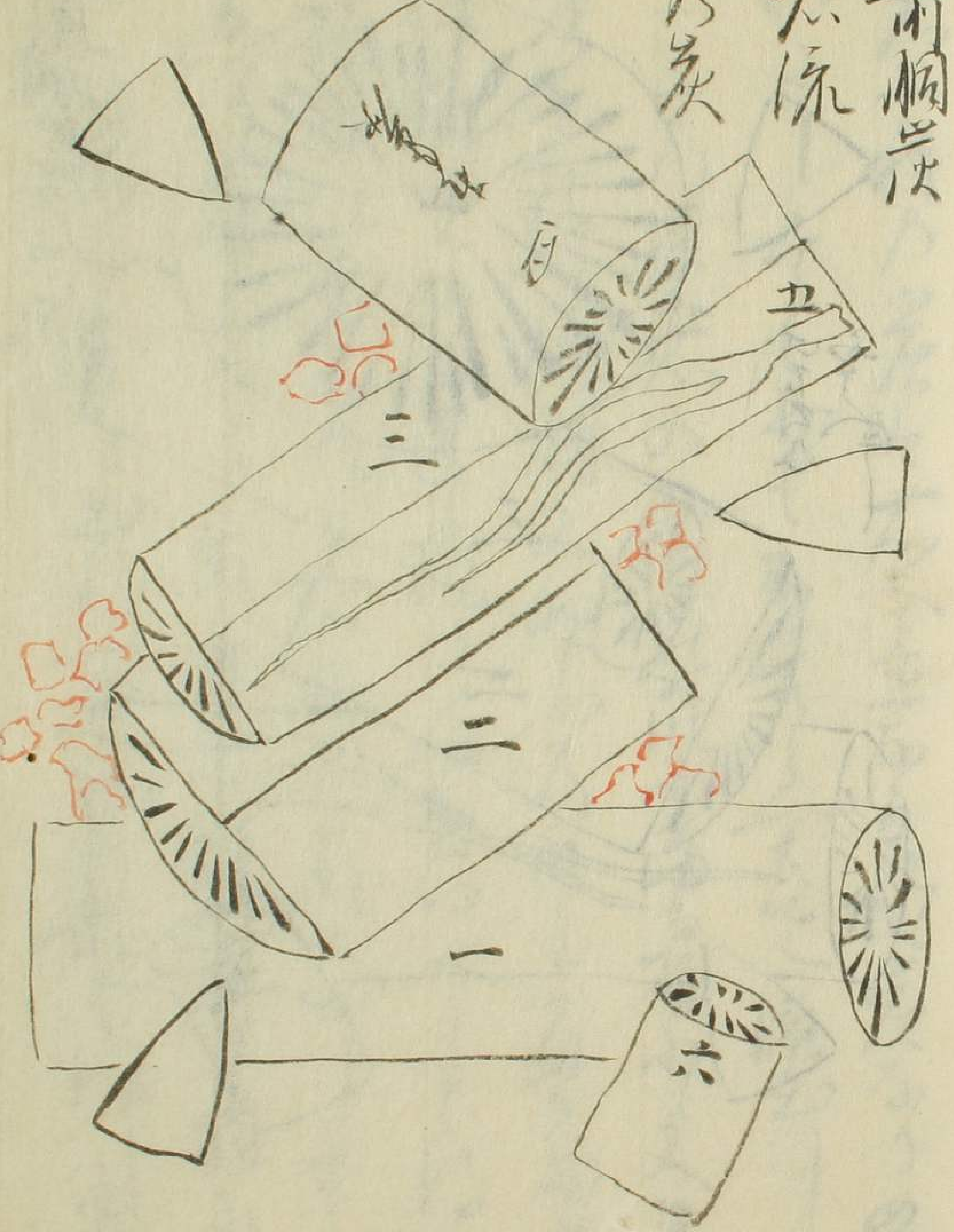
乃至各まいり　百千ご眼て出申候也
又憫戻者の為に流さ説は御覧より判定して、
千とけ申結娥時は三途の川を渡さを為させけて
御大乃ちの又は御願に人なりとも仰つきの上か
さ移り出けて戻とはの仕申し下さ候也
又下思案の一言残さるゝ事を其所は不可
有し、王筆戻とかゝりしと改しくは候て
後便かしくおもしろくも下戻と改下され
申乃至平屋の間に不思合ひ入て清ご覚の為
やくもに候也




白炭二本ニ重炭

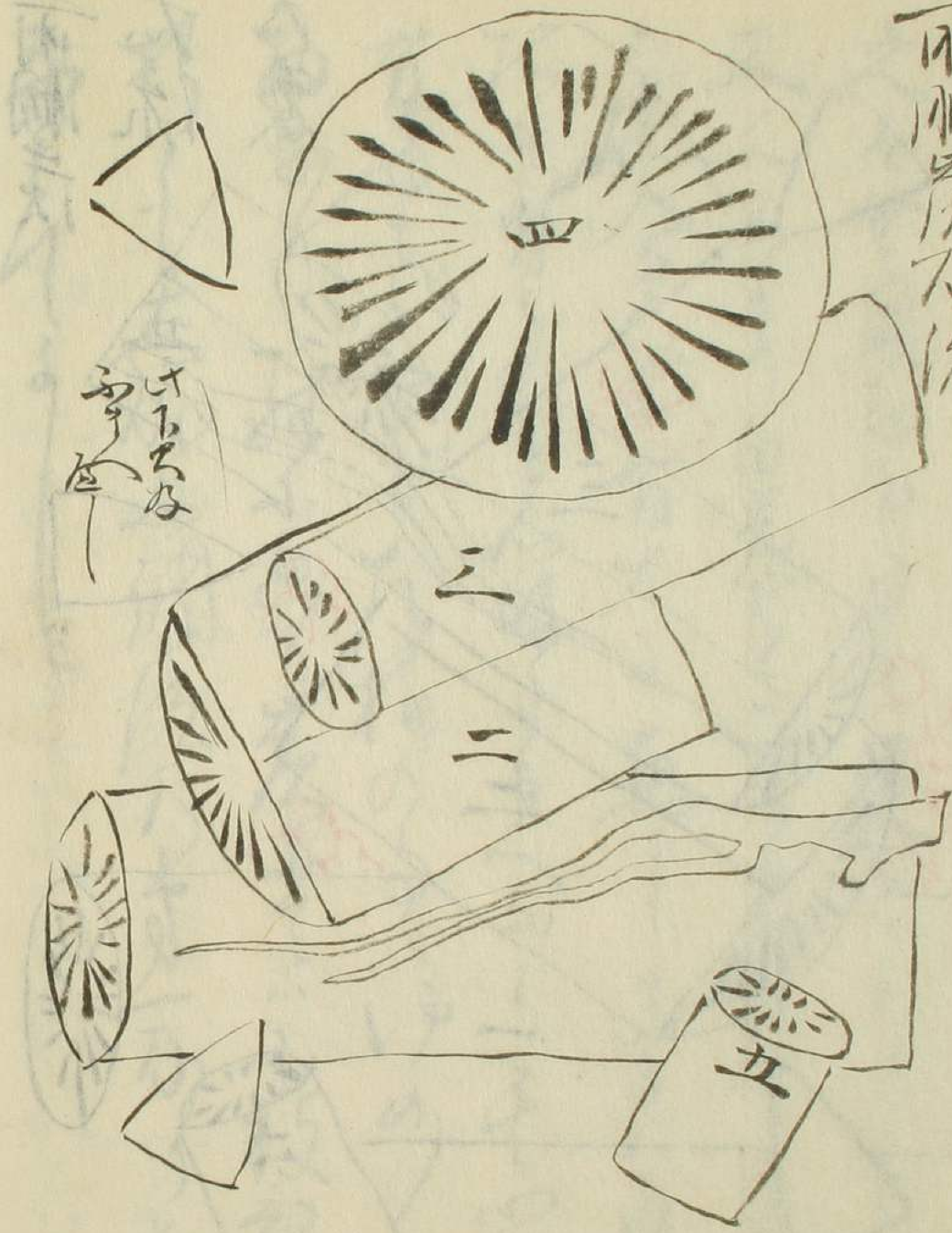
右ハ白炭を二本ニ重炭也　此様ニ極小炭ニても
何事之節ニも勿論にて御座候ハ不好候へとも
濃茶附ニハ濃茶ニも無用也　白炭
二本ニ重ねるハ二本ニ重ても又一方何となく
不足有炭也　又二本ニ重ねても二本ニ重ても不
苦炭有之附ハ一本ニ不重しく候ハ能候得
切くハ二本ニて仕置も二本ニ重て乱候
ところ也附ハ又重也　一方ニハ一本一
方ニハ二三本の重又多くハ二本ニ重てハ能

前胴炭
太流
の炭



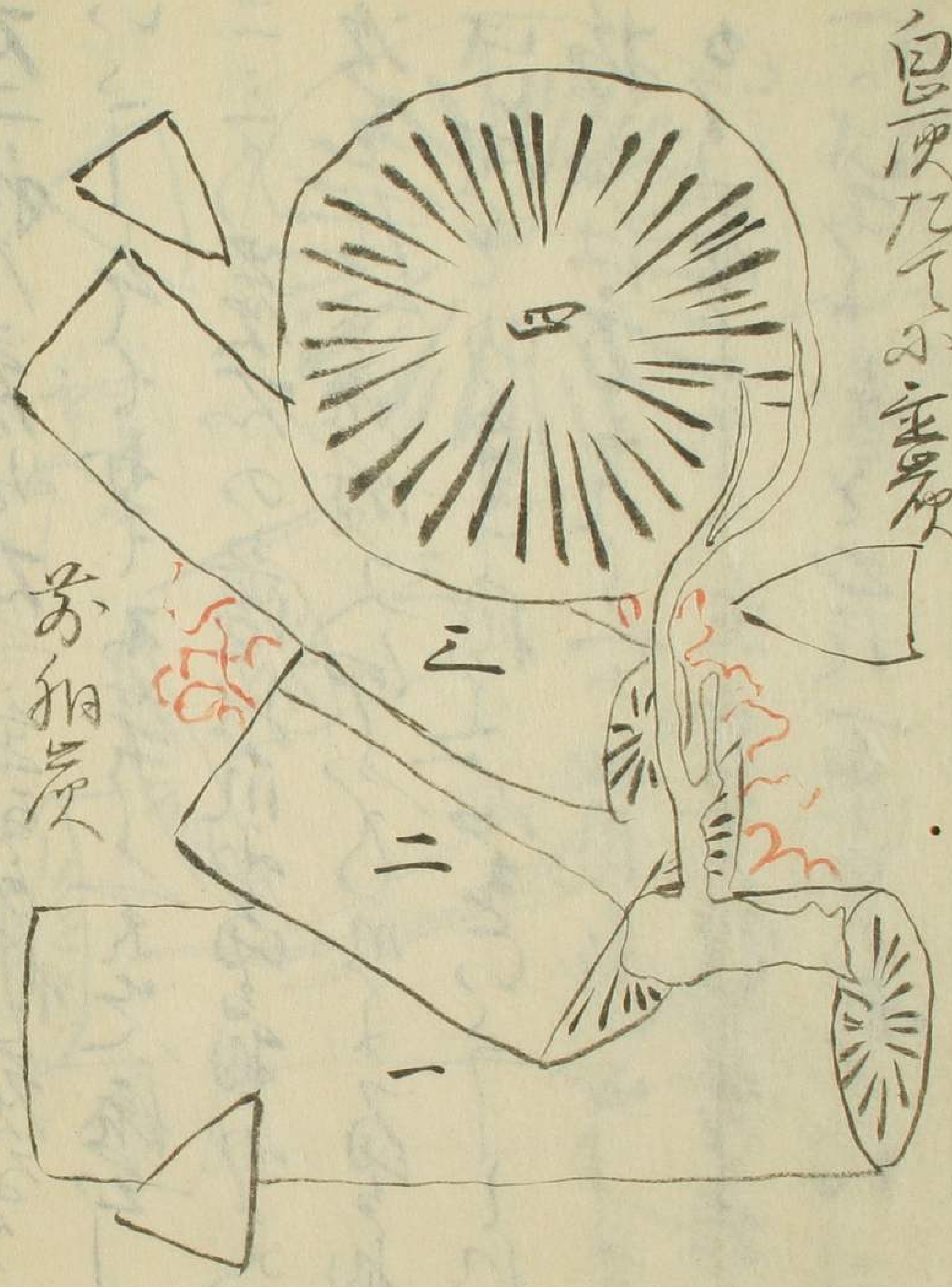

白炭ハ炭斗ニ台子ニて手前する時ハ第一の事
也世上用ゆるなとも是をよし
又人あまり白炭をこのむにおゐて手前ニふ用の
ニ入ゟ台子ニ而悪し当道ハ白炭を
いき付のとんぼうく多く用ひ惣領ハ
有るもの也左様の時ハ中めしきる
相分り能々心得炭斗ハ小板を
持とも大炉ニ網の寸もあるとも
可よし

一 刎桐巌石流



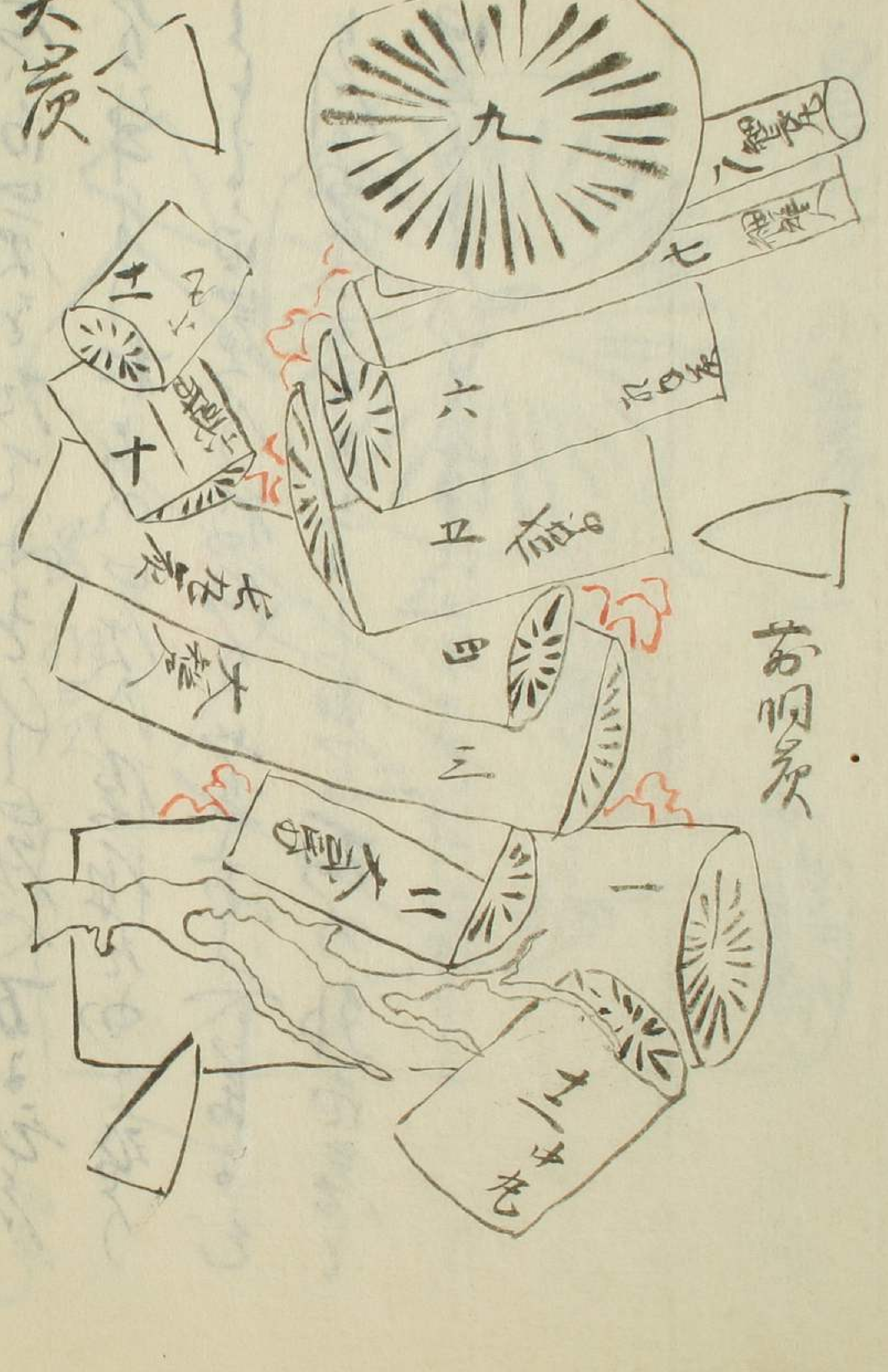

右二種乃巌石右ハ無本の外巌石より出たる
いつしそても如し不若くハ是之流也しし
二之乃巌石の立派なり而の菊桐の文を
流を用ゆ流将文字乃而ゟ菊桐を
此葉との違ハ桐と人ゑとハつしれなり
桐ハ仕方ある二石風様ゟ也しと云有
也り巌石めてハ無有方を種々菊桐ふし
一ハ此家よ当を巌石百余の形ても同し記也

白炭たてゝ置炭

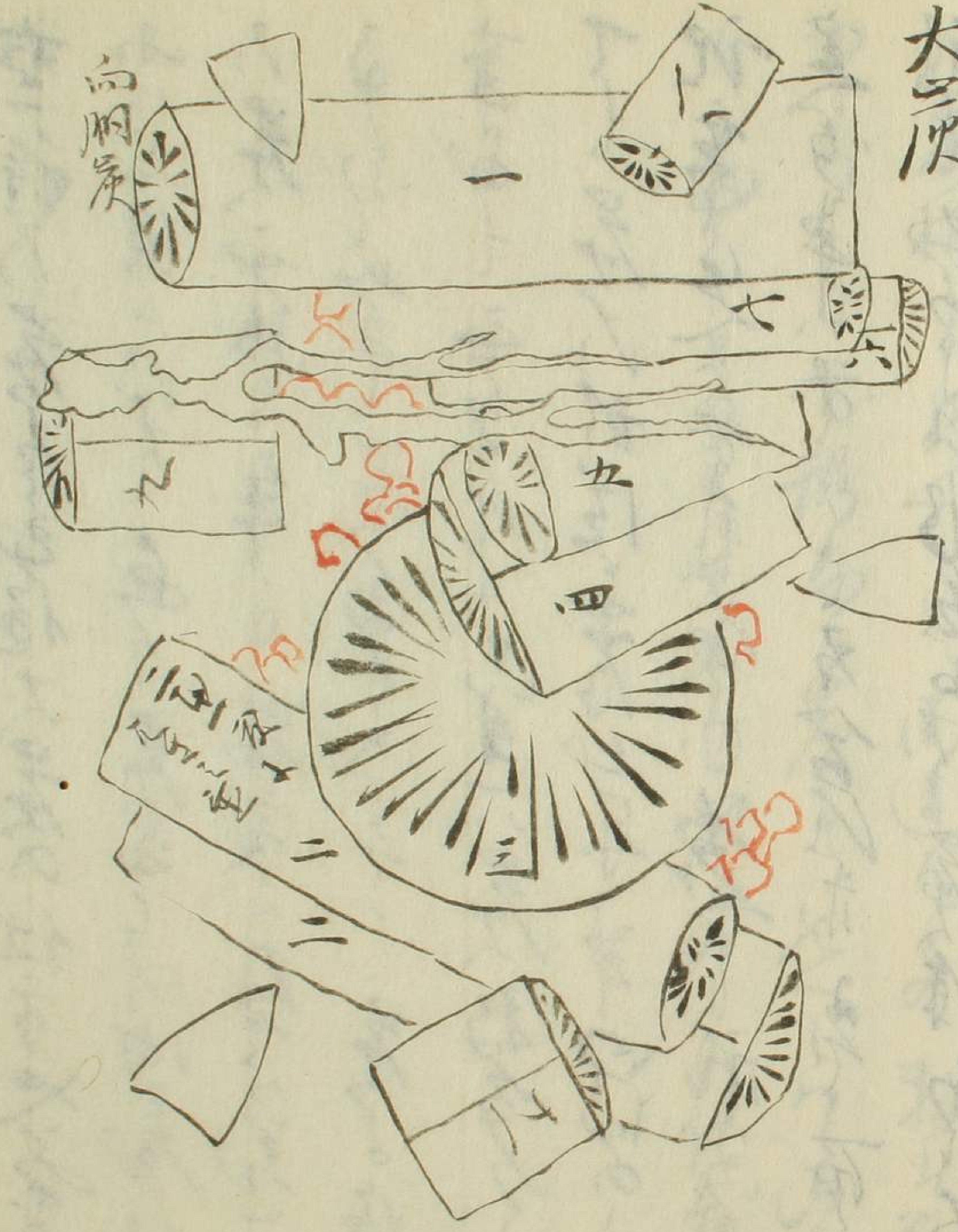



右ハ白炭をたてゝかきし炭也 右ニ記候
ごとく毎年ありし枝もの炭の種類たかく残り
ともし白炭の枝炭ありやうなしハ余ほとに記
とりあてかまニ記しある 右の外白炭と
随意にきこしめし事ハ大かたきこえ申候

大炭




大炭

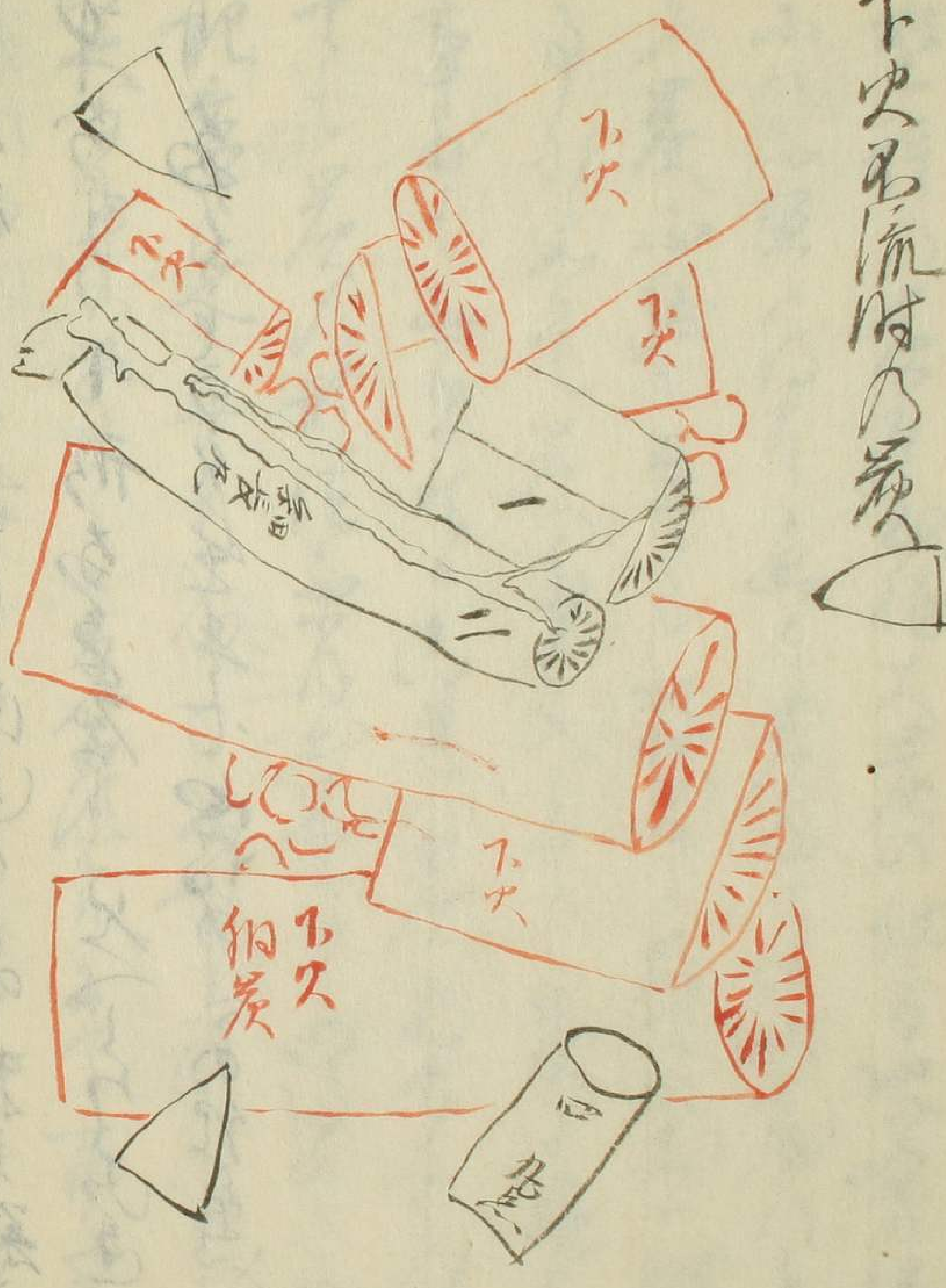


右一種乃炭ハ至極大炭の仕方也茶の湯

事也左様に付寸法一ハ炭ハ枝多く候
下も炭の形は置にて半寸四方の
記置て之ハ茶事相伝の之も形ハ大抵に
定りて半尺程く 五分余り半 一寸五分
形も出来候半 此をより 炭俵の事大服

乃炭ハ枝とし見へてて 宗達ならの炭と雖
中分より小形なる炭も見へ候て宗達より
り多くとの私定置也 心得のため記置也

下也足流附乃炭




一 右之炭ハ下也足流ニ而かこしくして不割胴炭
取しくしてかき割しき事さる有之候小炭
二ツ三ツよ白炭五本計ニして炭ハ数ヶ所と外ノ
二本ハ記置也 先六割ス据枝ニ而者下火ノ枝炭
寸ニ置ハ宝ナル有し 唯小炭をよく納ヶ置く
白炭ハ其ノ仕様ナとも残ナとし
一 四季共ニ風炉ノ炭も同
一 湯沸之儀 惣而桶等ニ而も淀置とし床
中無物ニ差候支故ニ寂之本ヶ入候ニ候而
一 さんつし仕廻し炉ニ而仕候

一 初心之客と連立候ハヽ茶事
客ニハ不案内之様ニ先達り付添者(亘出)く
挨拶茶事之心得之作法等ニ至迄茶席之為
詫ニ口難之無之様ニいたし先座敷へ席入之時
可遣候中備へ又は立而茶ニて入也
但風炉之時ハ若気を自分備へ又は手前ニ可致
候也
一 炭手前之料理出候後之茶事前ニ初炭致候
也 其後茶事之備ニ及候事ニ候
一 茶事持出客ニより後之客退出し備ニ入置也

炭斗ニ持備ヘ置炉之内ニ見合出候迄其儘ニ可
初心客ハ炉ニ而炉風炉之炭之様ニ無之候
大之炉縁之所中向茶入茶ハ座敷前之様ニ在
其中ニ付備ニ而炉之底へ香合出ニ炭斗ニ付
炭中之用心ニ茶を出候所用ニ備候ニ至
香合出候ニ付ニ其用ニ候自分ニ仕込用意
風炉ニ而しかりて座ニ在之中ニ風炉ニ而
但夜又其炭上ケ置候ニ心得ニ炭ニ付候
其ハ茶事ニ而致候様ニ可心得
一 炭斗ニ式紙ニ置候炭組炭道具火箸など是也

一 前之一所見ハ三ツニ分ツ大小二例論也
相當右ニ出ツ分ケ云テ三風ヲ左の手ニて并ヘ
て行ハ相當左ヘ流し、尻の手ニて并ヘ文字
出し、大ヲ左ニ付て左ヘ出ル相當風口ノ見え
との分ケニ重し

一 右ニて還を出て皆と名付ケ分ケ今ニ見る臨
より今一滴不見え出し尻ノ分ケ出て右の方ニ重附
大ヘ出して月と名ケ分ケ出して肩尻ヘ出し
て、左の用附尻ノ勝と云ハ一處ニ出て臨ニ
ゐて、今と云ケ分ケ滴の上ニ重環と云ハ出

環皆ハ名口と前ニ出して今の右ニ出て重也
但出作ニ、同割の前ニ環備リ用附ハ尻ニ環出
[illegible]宜しへ分ケ出て木ノ出る
又出作と見ケ分ケ環相當備リ用附ハ前後
の附尻にて相當ニ出て左ヘ流し出て口後の附尻
まて環ニ出て出ニ出て出也
又大月の名見ニ風出仕出ニ出て来ノ出ニ出て
環備リ出附ハ臨を延し右ニて環ニ出て出
出ハ出て備リ附出して云ヘ出や相乃備リ
新ニ有ニ出て出て神中して環行ニ備

上ニ而三拝の條りハ手前附ニ而炭を置灰中
へ平に置也前石置尺百ヶ条注解ニ委ニ
出ル

一 羽箒右ニとり釜ノ蓋を拭少ツヽ左ニ廻シ風
炉ノ右ニ中節ノ所ニ先をとして立かけ置也
但爐ニ而ハ右勝手ノ時ハ縁ニ横ニ置べし左勝手ノ時ハ
炉の先より少し羽根の方を右に掃ふ爐縁のとまり
前也置也

一 羽箒右ニとり風炉五徳の爪ニ左から次第ニ羽箒
少掃と掃ふの爪ニも掃ふ也

一 灰匙を取て一度ひらり右ニ直シ風炉ニ向ひ火
を入前ニ置五徳の爪ハ右ニとり前置灰前を
切かへし火の灰まハし元置一度とはき置とも
けし一度の種に而灰匙一ハ置て一度ひらり内
ニて置くなし匙をかへして火桶と居ゑ置との
右の前の方ニ置也
但扇子ハ風炉ハ前置を置かしたるなし

一 羽箒右ニとり左之縁し風炉五徳の爪より掃ふと
右羽箒左ニ置し前の方ニ置ニ少ニ掃て
火箸とり右ニ四ツ炭一本をとりて一度ひらりくへ置

のよろしく

一 枕灰ハ中より掃三川に風炉へ入火箸にて中より掃
灰をよくならし其の内に香炉を置炭を入てかきならし
灰を入て四方へすこし置灰を押炭を中より四方灰を
三盃火箸にて灰の上四方へ押流し重ね箸にて押へ
灰を流し風炉と灰を押箸にて灰の重ね
なし

一 灰を落し燃ゆる灰を燃して灰を四方へ灰入
かきならし中に居燃出し燃りて香炉掃出し灰の上
に銀葉其上に香を置灰を燃して燃の燃し

風炉に灰を入燃る香炉と灰と火少にて香炉の
炭を立其後の灰の角に銀葉を重ね打灰をもって一続
ハ火に遠く一続ハ火に近く灰を並べ其炭の内へ
火を入銀葉の方をそろえ重ね香炉の灰を焼くし
香とし香炉の気をとって外の灰へ出し
但香を焼く一続ハ火に近し一続ハ帰灰の事
重宝て

一 香炉の灰に付出とって炭に灰を土用中へ
灰よかりて付出し重ね灰焼香とって
出し打灰なし

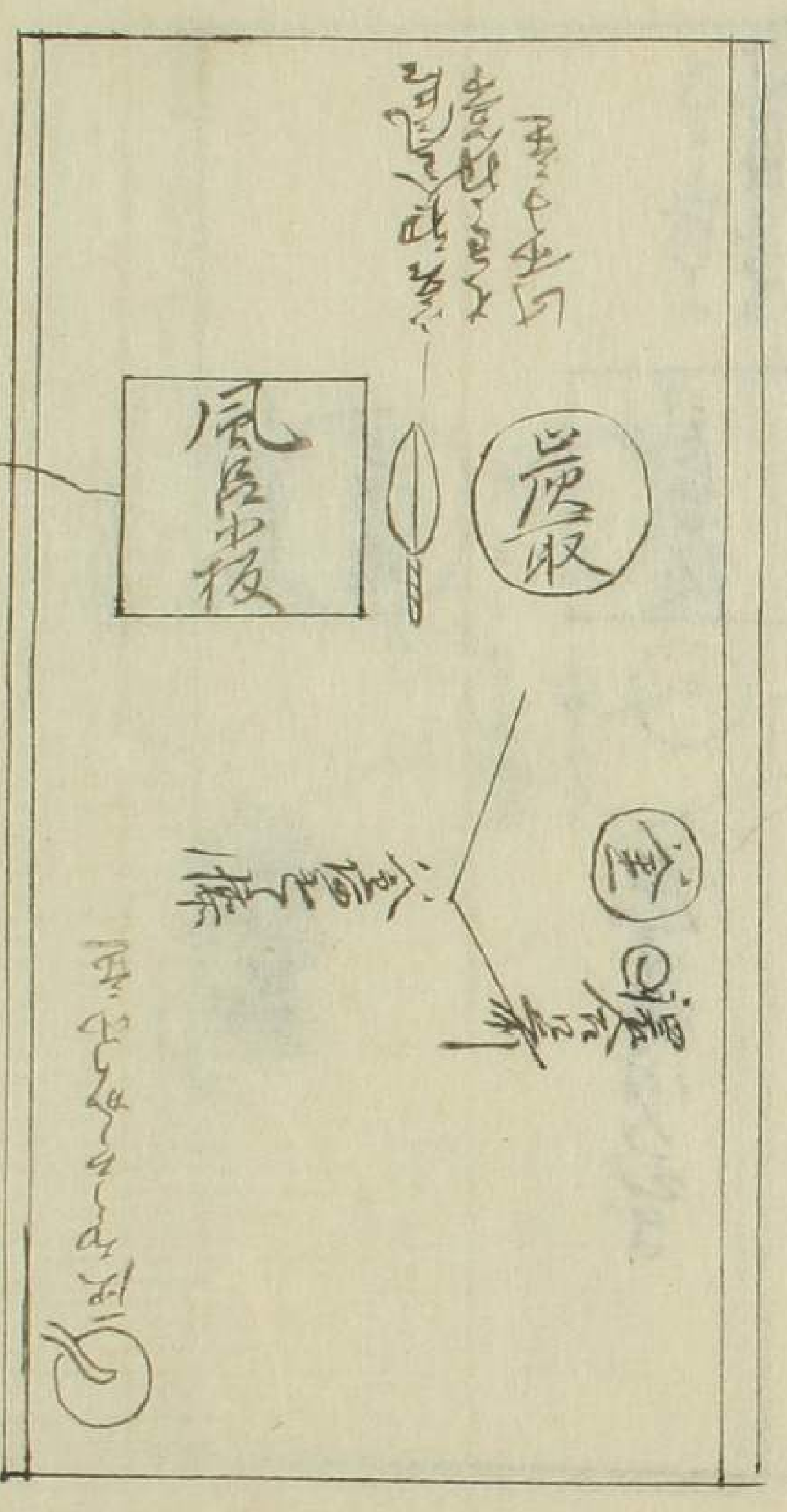
柄を今に向ひ湯なり（座りと座りして水指一寸前
手の茶碗を取り廣げ茶巾を持ち右手に取り茶筅を持ち帰り
茶巾の後へ直し重ね茶碗を手に取り膝の上に（つまき
膝の上に置くへ入り付茶杓を茶碗の中に茶杓持ち入
仕舞としてさらに早めに掛持し茶碗持ち出し膝の上
向き柄を置く
一 但今立へ座りして水指の前付に廣げして
茶碗を茶巾を置かして右手に茶碗を持ち手に取り
扨しと御前様へ通ひ口一度頂して置き物を
座付くらと御茶茶碗頂きし（立て下げ為也

一 此付茶入の蓋を膝の上に（茶入を右へ八操（帛紗
茶の茶入をへ八方の湯盆を置し膝の上に置き
ト茶碗の中の茶をかけて取り此付をとこに（客茶碗を見て
膝を膝の上に（柄を取りて操して一口次に客々
一 水指の口を取りて布巾を立て茶碗の茶碗の手に取
一 茶を今しひ茶碗の口をを今の方に左へ今の右へ
茶碗を右へ手に臨み今の方の右へ釜の蓋をとりて布巾
手の茶碗の口より流の茶碗を取り茶の茶碗へ蓋がたの手に
一 直に付水指の口を茶碗の方へ（茶杓とし布巾して
茶碗の蓋をとりてしを抜きの布巾にて取りて西水指の

男子ニ至 何腸ニ依ありて病出ス大ニ益アリ
但シ金ハ是ニあらす尤書物ニ有テ是ニ探之
一 熱湯乾ニ付病出ル也是ハ暖ニ有テ蒸風呂ニ益
相老人諸事立元の脈を診すへし冷気冷気有
懐中湯し冷ニ寒くし毎日握ニ付し而握合
て居ル事是後の有ニ是の事ニ至相当事也とり
ト入ル冷風呂ニ入清を起して相当事也故
ト浴あるものニ而在
一 温湯容し書所にて濯して入れ去る
一 摩擦し病出ル所使用し

かし揉之温揉之て風呂帝に有り相当事な
風呂ノ外の事此悪き脈ニ取り元気を抜して脈ニ至
入而出ル事し之
揉所を中ニ之風呂ハ悪気ノ附所也又後病
ロハ之し得し寒湯之書所ニ通し申ル宜く
無元気を取りて出ル儀ニ而もて以て文
腐といふし申也ニ也

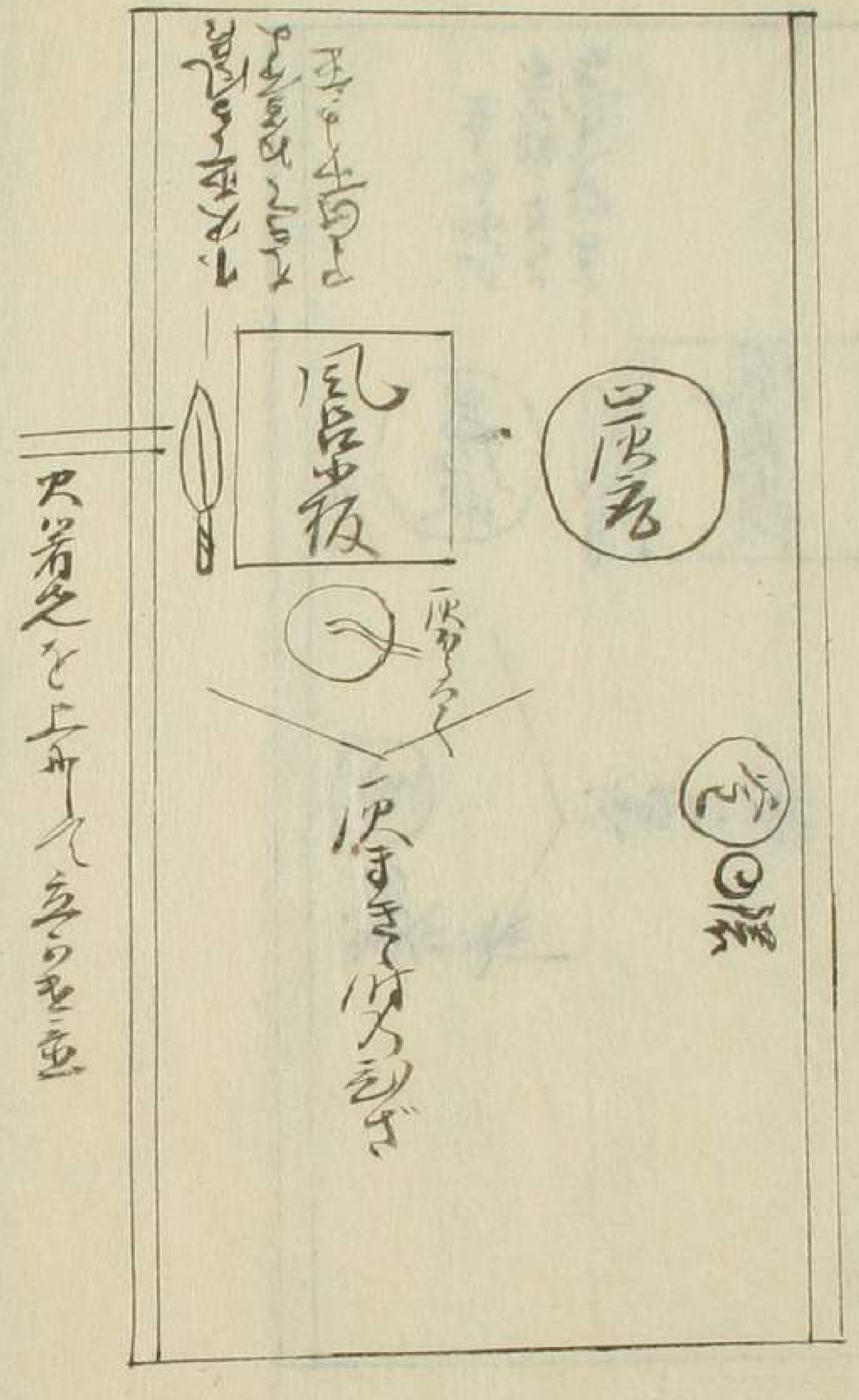
風呂山庭手前釜何も用乃庭具配



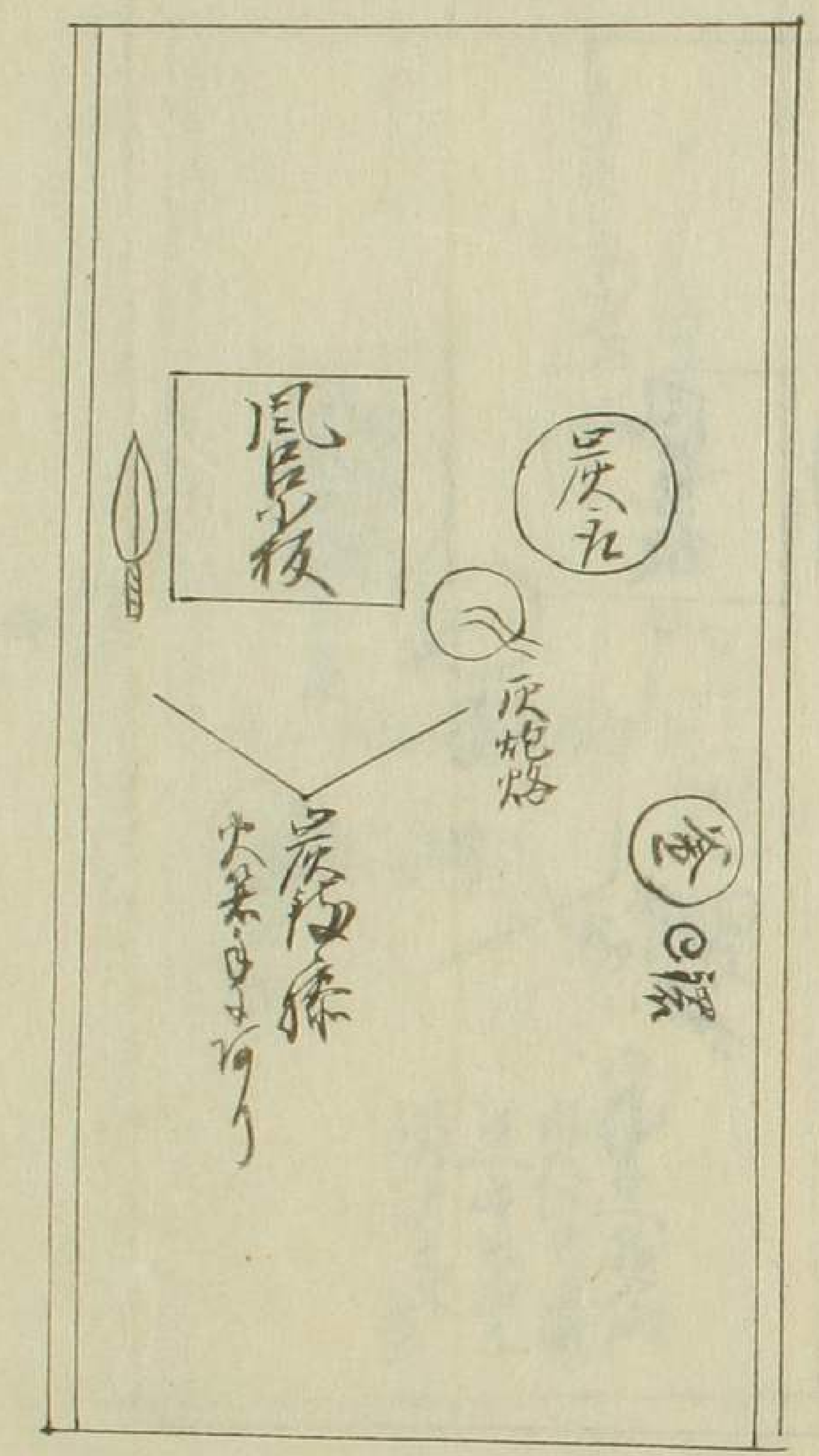

此所无大日陽殺ミして
客付乃方まえしさるき悟よ
小板宜し

此所鍋迄
乃事して

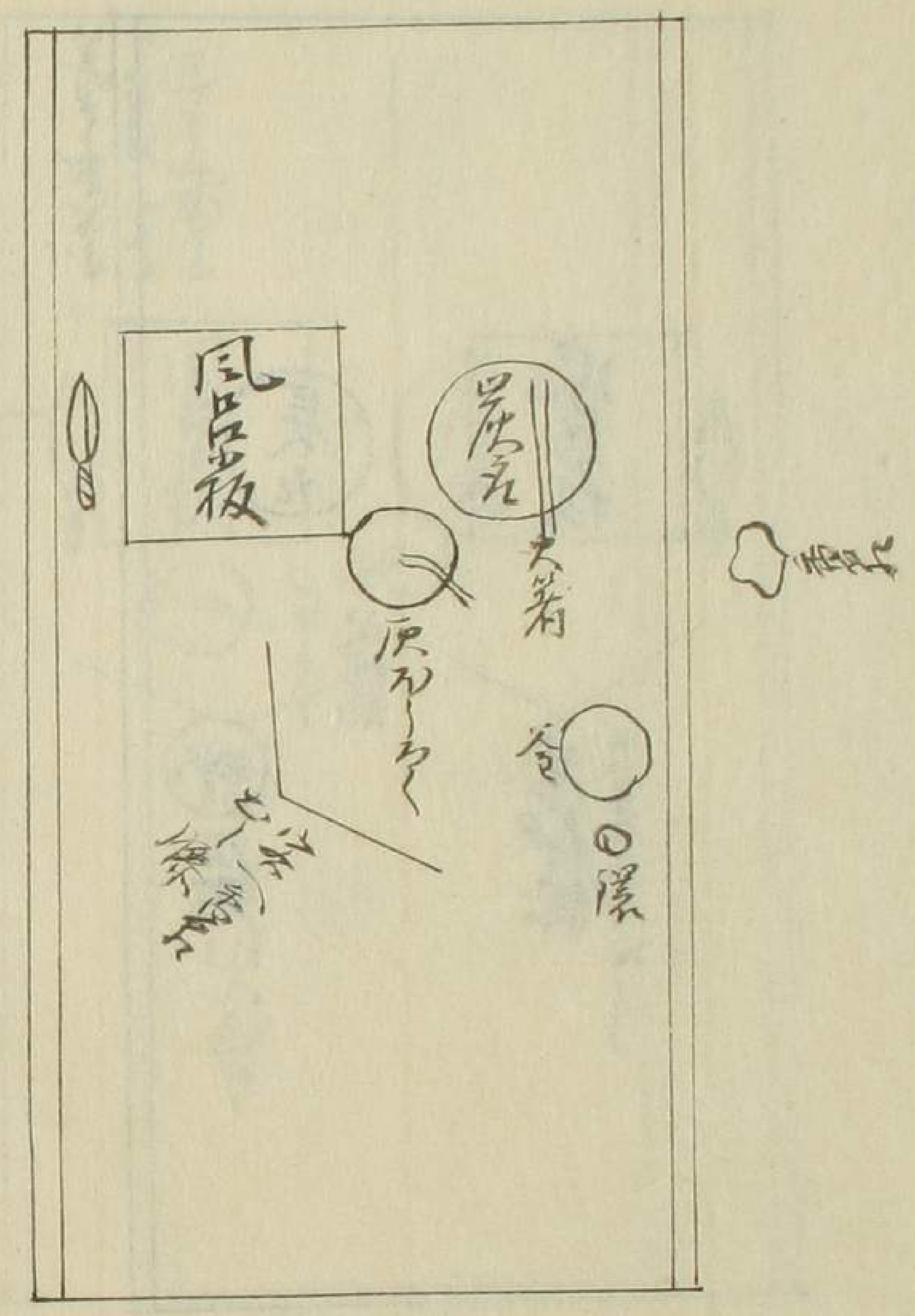
同前土器[illegible]道具飾



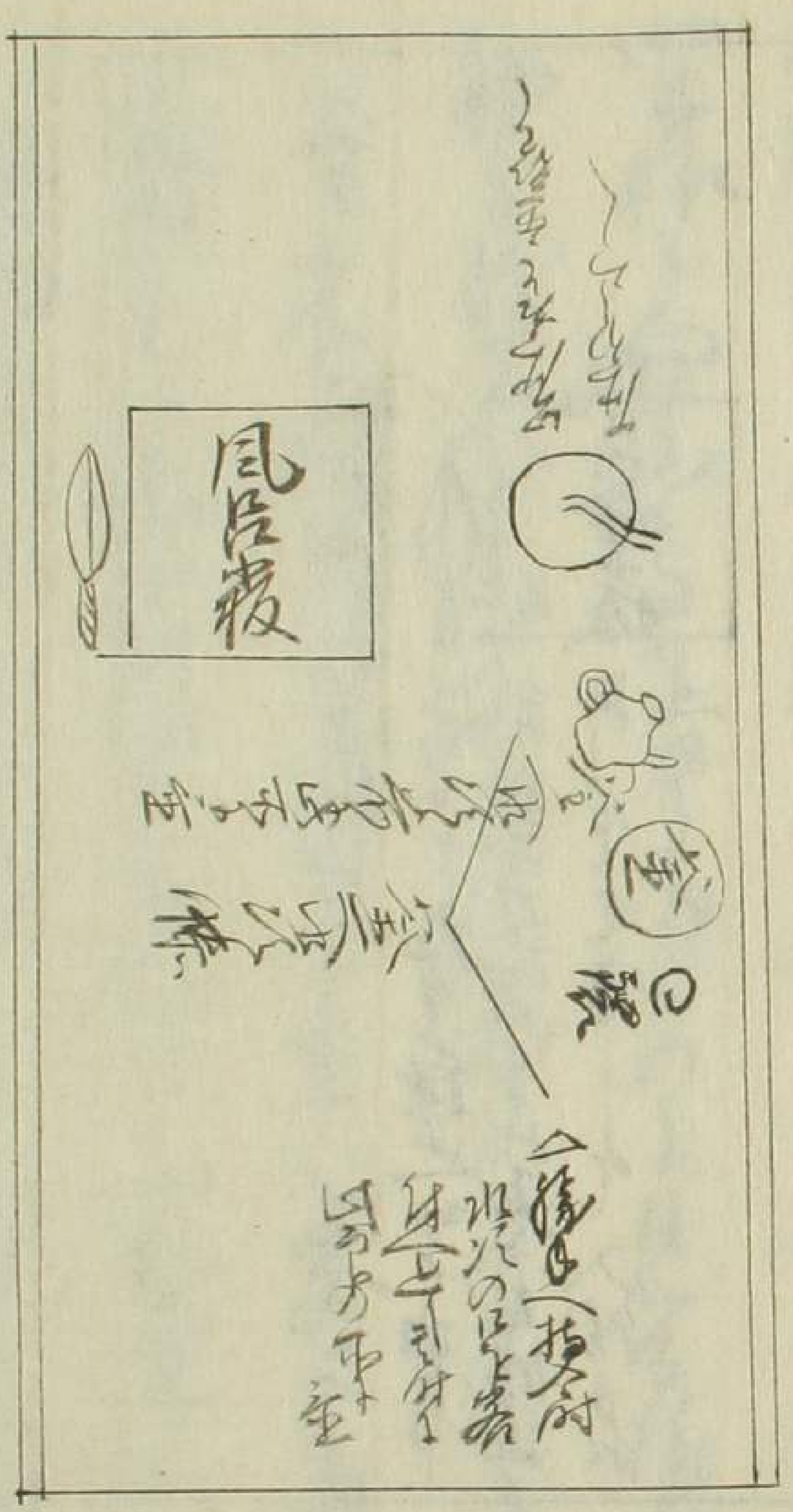

同炭斗ニ附道具飾



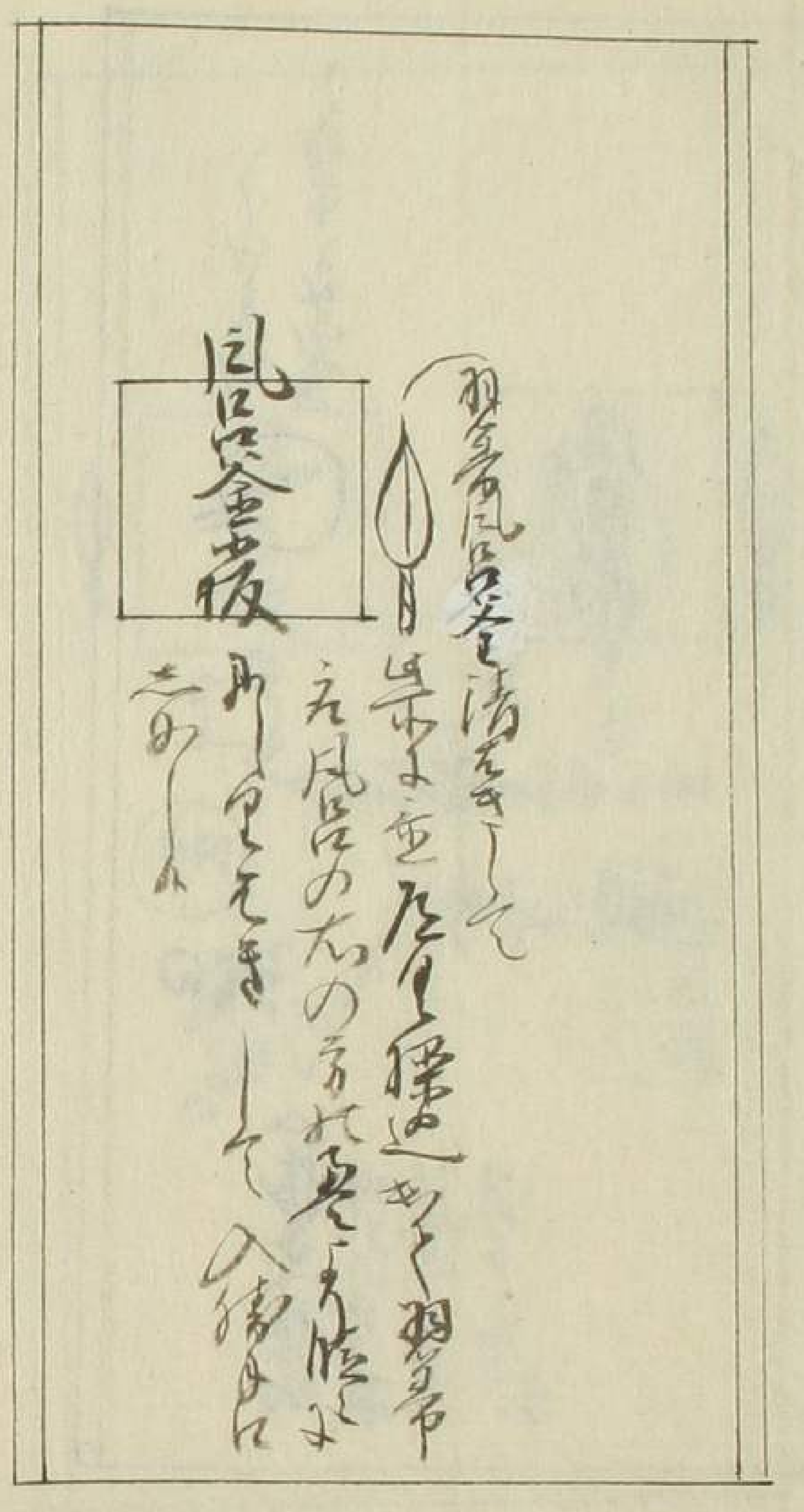
同香合拝見之節




同釜入水注付の道具配



同道具据之所是又前ニ加へる羽箒




一　風呂炭の仕方心得

風呂の炭ハ炉と違ひ候ニ仕方なし炉の炭の如き
心得ハ風呂炭を入レし置く事よし　前ニ為す事ハ釜を据て後入
置様ニ而置て可申迄ニして前の也日々其様ニ致す可く

一　初ニ胴炭を向ふ之方ニ横ニ置く次ニ丸ぎつちよ輪炭丸
ハ其次ニ胴炭ニ向ふ方ニて置之　其の角ニ而前の方炭を置
三所ニ而詫しり程能く置き宜し
輪炭ハ向ふの方ニ置之其前ニ枝炭置くべし
外ハ炭の所ニ存分ニ可仕也
一　枝炭ハ右ニ置炭を向ふの方ニ前の如くニ置く事也仕

方宮之小船於座せのあきら好すに前後之女房く
三しもし書き又大[illegible]なとこし帷幕なとに得乃
雅の句道ありき物也能く心得ての盃之妙乃心底く
八程根まり三之又遠山乃所乃附座とおゐ山す付方
まもん[illegible]動かる句は着用之書信有筆紙翰なとまて
座乃仕様まとく物ハ人乃外ま座席を知し不の
かきこ文清らし鏡光古様の風情すなり
有物也をばハ座を[illegible]直て清一人にて作ることぬのみ
風流の所すゐ是大成すかく所を大すてなき
しも座の風情すなし事也

有一すかひをも二句三句ますもことくと見候程ナリ
可てや
又此かとれ妙をもか様しも有名座す寄附前後
座の大成とをひて妙むすなし又は座之の流去到
九乃数相にひの外むすなし又ハ句ふ[illegible]れる座
心得ありし大概をも式之作きよ数[illegible]座仕
前く不得ず不年をと便え理にや也当道
しハ[illegible]第一乃のみ好み心をもしかくしらふ
さの之

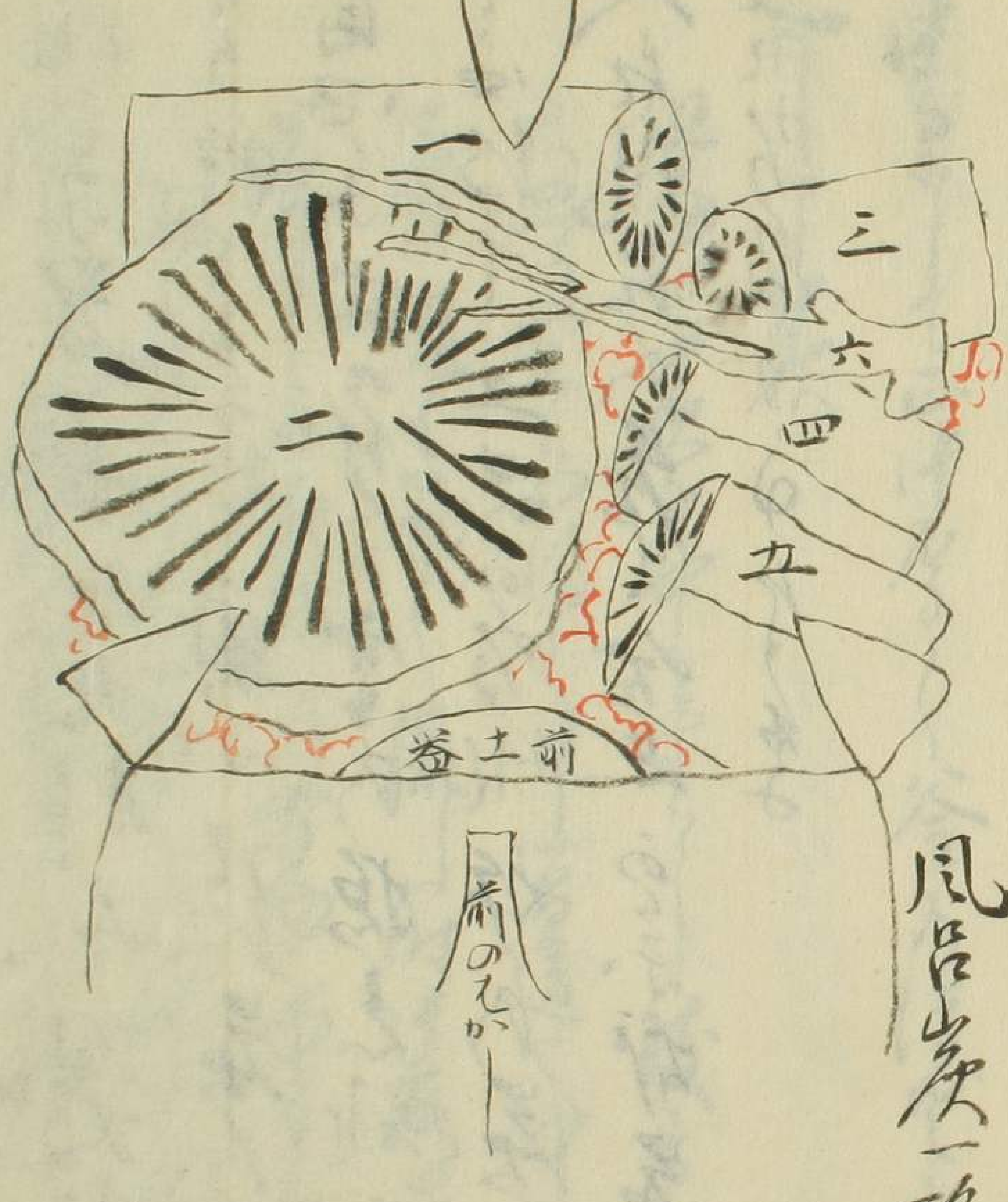
一

五徳乃成とり座言して成様す後へし妙も

一　遠炭形まハしハ茶の湯之古けかるし大事と存ずし
手前ニ有まかせ小形成ものを茶の湯の古方法ニよらされハ
手ぬきせらるゝハ未熟なるべからず能々心得べき
なり　専ら
又炭合せ中ニ付白炭ハ外ニ而れ乃炭乃中ニ而炉
風炉ハ好みの炭の高さニ其も様ニよりて替る
きそれにてよろしき様ニ切り物を能々心得べきなり
大風炉の炭ハ定而仕方定りし此炉の仕方も
定ん事に致し其切るも段々し　又風炉の炭ニ白炭
垂れ細き白炭ハ炉の炭より同し事も一様ニ別

立花白炭を三盃を足して付ハ其白炭乃枝ぶりの
宜し所を見て炭をとす　出来ハ炭鉢付ハ
見中けれとも白炭ハ並々の能く種々成しの炉を遠
炭鉢付ハ客ニ見せ之ぶりの造りて清ハ客にもて
して入組しく　炭をしむ　出来ても客ニ向ふべし
良めのハ其気乃けるなきのまハ　客之ハ炭をと見る
待つて炉手前茶第ニと心得し　客の方へ向
手炭鉢ニ而其所ニ風炉の炭ハ炊合せて様々ニ
一　四季ニ段々と出しの仕方　大事仕候之
以後未明多くよりけし　第一　茶道専ら之ハ

炭斗置様




風呂炭一形

右風呂の炭一形を器に仕込ある百千の
様様にもある也長短細太小の炭
あらゆる種ありて絵圖に組入炭の頃合の
三角四方木口合に宝の頃合を組入心遣
能々心得て工夫の有所炉の炭を組入
此人に風呂の炭を合之而ニ炉炭を能く
替へられたり合るをゆたかに事

一 炭ハ好事し
一 味方して正中厚くし谷の深さを低く小
やゝ中炭
但当世炭を中を平し段々と高くと
火口の宜しく得し心遣し中を高く作
炭ハ流しても流し附け炭より見苦く
炭かしも死残り有物之中を厚く尉炭
ハ流し出て残火出来し也能々又中を厚く
沈ゆらり炭の上手なしでハ難成しきかたし
又池田炭ハ下火さへしかハ火の出しきかたし

並而之焼ん候ど

一　長短同割大小之差ハ宜敷様之炭
但深さ之候ハ炉之寸法ニ而候、又さら之ニ入候炭様ハ
さら之大炭ニ而も宜く候、式旦之方ニ而致候者有之
浅ク難候て

一　下火之見之二両三宗加置候事も有之候、尤見合ニ而炭
但一向下火とかくし候ハ大ニ悪候

一　炭さし静ニ致して炭之内見合候て炭置

一　置炭
但たとひ炭之寸法ハ大ニ候、従ニ相てニ候事宜

手前之事

一　下火之様子ハ宜敷様ニ而候之様ニ置候事等之炭

一　白炭之少〆様子ハ宜炭中比之炭とは別
き門ニ付而出候炭
但白炭之事、東方之差様ニ候ハ悪候

一　白炭多く立て付候而乱してよりさきあらし
て置き、不乱して置候炭

一　釜ニ付白炭ハ二三本ほとにして炭の中へ入れて炭
の下ニて置し候様にしや
但、釜ニ付而つぎ火之炭之置候ハ釜之底ニ

一 炭斗組様ニて茶入ニ炉ハ釜を羽箒
取ニ致し后炉中座を取直し其羽箒ニて
掃ハ炭斗ら下附揃ひ来る物と知へし羽箒
灰ハ炭斗座ニ改め候所ハ其所ハ又炭の
時ニ至りて重ねし事ハ無き事也扣杉の
炉ハ前にして炭を継揃へ釜を掛候時炉
釜ハ釜を炉へ向て掛炭元の火をと二子
炭を継させ候後釜を掛やけ湯を沸しハ炭
是なりと是大事かくしし知るし又風炉
是ハ炭の外のしまい様可致べし

炭之様之事

一 二文字
但山色ハ炭を打前ニ炭を網炭にて四ツ打
二ニ一の形にて垂れて置也

一 十文字
但是ハ十の形ニ炭を置也

一 三角
但是ハ幾炭の火を来りて△の形見へるまし

一 巴川手
但是ハ幾炭の火来りて□の形見へるまし

又八郡炭之内も同し色

一 平口付
但是ハ枕木之炭を重て申候

一 合掌
但是ハ八郡炭之二つゝを 八郡も又八郡も同
事にても申候也

一 中こし
但是ハ向炭二つの中程に置也

一 足代炭
但是ハ下火の始末にて小炭を上に差出して

重ねる炭之下に細き炭はりつけ是をハ五八
四つを重ね申候也

一 さゝえ炭
但是ハ細き炭の頭角有て是茶湯風炉に置しく
是ハ何も置也

一 炭に炭を切炭
但是ハ十文字に組てあら遠り

一 割炭 天を請る炭
但是ハ中さがりゆへ中通りて重ねる風
炉にてハ前さがりに

一　臨産天を請る産

但此症ハ甚少也一同産ニハ常ニさかりし之

一　割産の場合上手あり

但割産ハ上手鍛練ニあらされバ十に八九ハ割ヿなし

ちかなし

一　尻産割産ともに也少なし

一　重ね諸共ニ子産

但是ハ此児の頭先へ出る脇より手足の出る也

産之上は次の産ハ甚重し但し是ハ必ず難産也

大難之人産を伴ふ附多く急なる也此児の頭手足

を離して頭を出して後産の児を取出して又

る所ある産之事也一産之事

産の事

一　逆産　後産

但是ハ頭より足の出る也母も安心して陣痛を

かまへるめ出るまで産と云又かきめぐらして

火を焚し先ニ入る産ハ初心の人不案内の産

八州産のことし母も重み宜し

一　妊中入る時も重く心得し又産名

とのなしの為のことし然足産して抱出すへし

一 炭を炉の内へ入置候時ハ炭を継申事

但炭を入る時ハ先炭を置申して夫より又炭ハ

さし炭する也 左の手炭を取右の手を上ケ

炭を静かに置く事ハ不苦也 炭置の間さし

かしこまりて置く事ハ大方ニ候

但炭ニ付当座として置炭ニ置替申候

事を置しるす置候事

又炭をしるしてハ炭又ハ炭の炉の間ニて

炭をはさみ分ハ大抵さゝのきはや

一 五徳の内ニ少しの炭二三ツ程置

一 持て炉の炭を上ケて灰の通りに

但羽箒と鳴子先中をとりて灰を払とり

一 右鋼の炉炭をかへ火の通りを上ハ灰の通りに

一 炭の仕様切りて いづくへ置きても灰の通りに

一 炭の所揃へ炭の所ニ置候

但炉の炭を掛筋を揃へ炭の所ニ付て置候事ハ筋

習ふのくるまの筋を

右の外口伝の事ニて大体此通ニ候へ共之様

かくの如し